わくたむらあと

湧田村跡

―那覇市新庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告―

巻首図版１　遺跡一帯の空中写真（2010年撮影）　(S=1:10,000)

巻首図版2　層序と検出遺構

1段目左：遺跡の層序
2段目左：第1号遺物廃棄遺構の状況
3段目左：第2号遺物廃棄遺構の状況
4段目左：第3号埋甕遺構の状況

1段目右：第1号井戸の半裁状況
2段目右：第2号井戸の半裁状況
3段目右：第3号遺物廃棄遺構の状況
4段目右:第3号埋甕遺構の状況（埋甕№1の縄）

序

本書は 2010（平成 22）年度に実施した那覇市新庁舎建設事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査の成果報告書です。

那覇市役所は、「昭和 40 年（1965 年）に竣工費 120 万ドルを投じて建設され、当時の沖縄では最大の地上５階（一部９階）、地下１階、延床面積３千坪の規模を持ち、県都那覇を象徴する建物として長く市民に親しまれてきました。しかし、築 44 年近く経過し、建物の老朽化や狭小化が著しく、バリアフリー・高度情報化への対応にも改善では限界があることなどから、現在地に新庁舎を建設する」こととなりました。

本遺跡は、その新庁舎建設工事中に発見されたもので、建物跡や井戸、埋甕遺構などの遺構と外国産陶磁器を始めとする多種多様な遺物が出土しています。これらは、グスク時代～近代にかけての資料と考えられます。

さて、「湧田」は、1616（尚寧王 28）年、朝鮮陶工の張献功によって製陶が始められ、当時の琉球の人々に陶工の技術を伝授した場所で沖縄における窯業の始まりの地として知られている歴史深い地域です。隣接する沖縄県庁では、昭和 61 年度の旧庁舎解体・行政棟建設工事に伴って、まさに「窯跡」が発見されました。本遺跡（湧田村跡）と隣接する窯跡（湧田古窯跡）の関連性には、興味深いものがあります。今回の発掘調査成果は、都市化が進む現在の那覇市において、グスク時代の集落や王府時代の遺跡にとどまらず、近年までの生きた歴史を物語らせる貴重な資料と言えます。

本報告書が、市民の皆様はもとより多くの方々に活用され、文化財保護行政の一助となることを希望いたします。

末尾になりましたが、発掘調査作業ならびに、本報告書を作成するにあたってご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成 25 年３月

那覇市教育委員会

教育長　　城間　幹子

例　言

１．本報告書は、那覇市教育委員会が那覇市総務部新庁舎建設室の依頼を受けて 2010（平成 22）年度に実施した「湧田村跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。

２．発掘調査は那覇市「新庁舎建設事業」に伴うもので、那覇市教育委員会の助言のもと、建築・１工区共同企業体（㈱國場組・㈱沖電工・㈱ニシダ工業）・株式会社　島田組が実施した。

３．巻首図版１の空中写真（2010 年撮影）、第１・２図の那覇市全図（平成 18 年２月発行）は、国土地理院発行のものを複製して使用した。

４．第３図は、那覇市企画部市史編集室　『那覇市史　那覇の民俗　資料篇　第２巻中の７』　昭和 54 年１月　付録「旧那覇の歴史・民俗地図」を拡大加筆・トレースして作図したものである。

５．第４図は、「都市計画図　１：2,500　平成７年 12 月修正　那覇市作成」に『那覇市歴史地図－文化遺産悉皆調査報告書』那覇市教育委員会　昭和 63 年３月に掲載された文化財をプロットして作図したものである。

６．第５～７図は、図面編集業務委託の成果から掲載した。なお、業務は、株式会社　島田組（伊波直樹氏、國分篤志氏、角上寿行氏）に委託した。

７．第 32 図は、沖縄タイムス朝刊　「思い出のわが町」より「<７>泉崎、湧田民俗地図」1976 年４月 22 日を加筆・トレースして作図したものである。

８．第Ⅲ章第１節、第Ⅳ章、第Ⅴ章については、「那覇市新庁舎建設工事埋蔵文化財調査業務　調査業務報告書」　那覇市新庁舎建設工事（建築・１工区）共同企業体　平成 23（2011）年２月を参考にした。

９．附篇１は、湧田村跡出土資料保存処理等業務委託の成果を掲載した。なお、業務は、株式会社文化財サービス（青山奈緒氏、植村明男氏、瀬戸和美氏、外間瞳氏）に委託した。

10．附篇２は、湧田村跡の自然科学分析業務委託の成果を掲載した。なお、業務は、パリノ・サーヴェイ株式会社（上田圭一氏、斎藤崇人氏、矢作健二氏、松元美由紀氏、芝口怜氏）に委託した。

11．湧田村跡発掘調査遺物洗浄業務を株式会社パスコ（木口裕史氏、仲宗根文子氏、稲嶺恵利奈氏、

安里恵夢氏、前田望実氏、石川千恵氏、金城綾乃氏、上原沙織氏）に委託した。なお、第 25 表は、同業務報告書より引用した。

12. 本報告書の執筆は以下の通りである。なお、編集は島弘、志良堂恵、城間千栄子、宮良知子、豊里加奈子、真栄城和美、山下美也子、山下真利子、国吉真由美、新里武督（新庁舎建設室）、伊波直樹（株式会社　島田組）の協力を得て、仲宗根が行った。

第Ⅰ・Ⅱ章　仲宗根啓
第Ⅲ～Ⅴ章　仲宗根啓・伊波直樹
第Ⅵ章　第１節　島弘
　　第２～９・12 節　仲宗根啓
　　第 10・11・13～15 節　城間千栄子
第Ⅶ章　仲宗根啓・島弘・城間千栄子

附篇１　株式会社　文化財サービス
附篇２　パリノ・サーヴェイ株式会社

13. 調査および資料整理は下記のメンバーに指導・協力を得た。感謝申し上げる。

発掘調査
　島袋洋氏、久高健氏（沖縄県教育庁文化課）、山本正昭氏（沖縄県立埋蔵文化財センター）、倉成多郎氏、吉田健太氏（那覇市立壺屋焼物博物館）、那覇市立開南小学校

資料整理
　国吉真由美氏、西銘定子氏、宮城みさ子氏、請盛智秋氏、
（那覇市教育委員会文化財課非常勤職員）

14. 番号と写真図版の番号は一致するように配置してある。

15. 出土遺物は那覇市教育委員会文化財課で保管している。

湧田村跡発掘調査報告書

目次

巻首図版１　遺跡一帯の空中写真
巻首図版２　層序と検出遺構

序
例言

第Ⅰ章　調査に至る経緯・・1

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第Ⅲ章　調査経過と調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　第 1 節　調査経過 ・・7
　　第 2 節　調査組織 ・・9

第Ⅳ章　　層序・・10

第Ⅴ章　遺構・・・13
　　第 1 節　上層の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　第 2 節　下層の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第Ⅵ章　遺物・・・21
　　第 1 節　外国産陶磁器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　　１．白磁・・・21
　　２．青磁・・・26
　　３．青花・・・31
　　４．青磁青花・色絵・翡翠釉・瑠璃釉・三彩・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
　　５．褐釉陶器・・42
　　６．タイ産陶器・産地不明・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
　　第 2 節　本土産陶磁器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
　　第 3 節　沖縄産陶器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
　　１．施釉陶器・・54
　　２．無釉陶器・・55
　　第 4 節　陶質土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
　　第 5 節　瓦質土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

第 6 節　瓦 ・・・

挿図目次

第１図　那覇市の位置と遺跡の位置
第２図　本遺跡の位置と那覇市内の主な古窯跡・・・・・・・・・・・・・・・２
第３図　本遺跡周辺の古地図（昭和期）・・３
第４図　グリッド設定図と周辺の文化財・・６
第５図　層序・・・・・・・・・・・・・・・・11
第６図　遺構全体図・・・・・・・・・・・・17
第７図　第３号埋甕遺構・・・・・・・・・・19
第８図　白磁・・・・・・・・・・・・・・・・25
第９図　青磁①・・・・・・・・・・・・・・・29
第10図　青磁②・・・・・・・・・・・・・・・30
第11図　青花①・・・・・・・・・・・・・・・36
第12図　青花②・・・・・・・・・・・・・・・37
第13図　青花③・・・・・・・・・・・・・・・38
第14図　青磁青花、色絵、瑠璃釉、翡翠釉、三彩・・・・・・・・・・・41
第15図　褐釉陶器・・・・・・・・・・・・・45
第16図　タイ産褐釉陶器（第３号埋甕遺構）・・・・・・・・・47
第17図　タイ産陶器、産地不明・・・・・・49
第18図　本土産陶磁器①・・・・・・・・・・52
第19図　本土産陶磁器②・・・・・・・・・・53
第20図　沖縄産施釉陶器・・・・・・・・・・58
第21図　沖縄産無釉陶器①・・・・・・・・・59
第22図　沖縄産無釉陶器②・・・・・・・・・60
第23図　陶質土器、瓦質土器・・・・・・・62
第24図　瓦・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第25図　円盤状製品・・・・・・・・・・・・67
第26図　煙管・・・・・・・・・・・・・・・・69
第27図　簪・・・・・・・・・・・・・・・・・71
第28図　銭貨①・・・・・・・・・・・・・・・72
第29図　銭貨②・・・・・・・・・・・・・・・75
第30図　ガラス製小玉、石製品・・・・・・77
第31図　貝製品・・・・・・・・・・・・・・・80
第32図　泉崎・湧田民俗地図・・・・・・・86

挿表目次

第１表　調査工程・・・・・・・・・・・・・７
第２表　外国産陶磁器出土一覧・・・・・・22
第３表　白磁出土一覧・・・・・・・・・・・23
第４表　白磁観察一覧・・・・・・・・・・・24
第５表　青磁出土一覧・・・・・・・・・・・27
第６表　青磁観察一覧・・・・・・・・・・・28
第７表　青花出土一覧・・・・・・・・・・・33
第８表　青花観察一覧・・・・・・・・・・・34
第９表　青磁青花・色絵・瑠璃釉翡翠釉・三彩観察一覧・・・・・・39
第10表　青磁青花・色絵・瑠璃釉翡翠釉・三彩出土一覧・・・・・・40
第11表　褐釉陶器出土一覧・・・・・・・・・43
第12表　褐釉陶器観察一覧・・・・・・・・・44
第13表　タイ産陶器産地不明観察一覧・・・・・・・・・48
第14表　本土産陶磁器観察一覧・・・・・・51
第15表　沖縄産施釉陶器観察一覧・・・・・56
第16表　沖縄産無釉陶器観察一覧・・・・・57
第17表　陶質土器・瓦質土器観察一覧・・・・・・・・・61
第18表　瓦観察一覧・・・・・・・・・・・・63
第19表　円盤状製品観察一覧・・・・・・・66
第20表　煙管観察一覧・・・・・・・・・・・68
第21表　簪観察一覧・・・・・・・・・・・・70
第22表　銭貨出土一覧・・・・・・・・・・・73
第23表　銭貨計測一覧・・・・・・・・・・・74
第24表　貝製品出土一覧・・・・・・・・・・79
第25表　遺物洗浄業務委託遺物数量一覧・・85

図版目次

図版１　調査の状況
図版２　遺跡の全景
図版３　遺跡の層序
図版４　建物跡の状況

図版 5　建物跡の状況及び第１・４号埋甕遺構
図版 6　第１号井戸及び第２号井戸の状況
図版 7　第２号井戸の状況
図版 8　第１号遺物廃棄遺構の状況
図版 9　第２号遺物廃棄遺構の状況
図版 10　第３号遺物廃棄遺構の状況
図版 11　第２号埋甕遺構の状況
図版 12　第３号埋甕遺構の状況
図版 13　第３号埋甕遺構の状況
図版 14　第３号埋甕遺構の状況（埋甕№１）
図版 15　遺物集中部の状況
図版 16　作業の状況
図版 17　白磁
図版 18　青磁①
図版 19　青磁②
図版 20　青花①
図版 21　青花②
図版 22　青花③
図版 23　青磁青花、色絵、瑠璃釉
　　翡翠釉、三彩
図版 24　褐釉陶器
図版 25　タイ産褐釉陶器
　　（第３号埋甕遺構）
図版 26　タイ産陶器　産地不明

第１図　那覇市の位置と遺跡の位置

湧田村跡発掘調査報告書

第Ⅰ章　調査に至る経緯

本遺跡は、沖縄県那覇市泉崎の「那覇市新庁舎建設工事」に伴って発見されたものである。

那覇市役所は、「昭和 40 年（1965 年）に竣工費 120 万ドルを投じて建設され、当時の沖縄では最大の地上５階（一部９階）、地下１階、延床面積３千坪の規模を持ち、県都那覇を象徴する建物として長く市民に親しまれてきました。しかし、築 44 年近く経過し、建物の老朽化や狭小化が著しく、バリアフリー・高度情報化への対応にも改善では限界があることなどから、現在地に新庁舎を建設すること（後略）」となった。

新庁舎建設が本格化する状況の中、諸検討・準備の一つとして、平成 20 年４月 23 日付けで「埋蔵文化財事前審査願」が那覇市長（総務部新庁舎建設室）から那覇市教育委員会教育長（文化財課）あて提出された。庁舎が現存する中、限定的ではあったが試掘調査が実施された（平成 20 年５月 24・25、30 日）。しかし、その際には、埋蔵文化財の存在は確認されず、平成 20 年６月５日付け、「埋蔵文化財事前審査報告書」が那覇市教育委員会から市へと回答がなされた（今後既存の建物を撤去する際には立会いを行う）。

平成 21 年 10 月以降、旧庁舎の解体工事、そして本格的な「新庁舎建設工事」が平成 22 年６月以降開始されるに至る。前述のように本遺跡は、その工事の進行に伴って発見されたものである（GL-約 1.5m）。遺跡の発見を受けて、那覇市と市教育委員会では、幾度もの調整を行った結果、遺跡の現状保存を困難であるとして、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。以下、遺跡の発見から記録保存のための発掘調査に至る経緯を略記する。

2010（平成 22）年

11 月４日　那覇市新庁舎建設室へ、工事関係者から「新庁舎建設工事地内」より埋蔵文化財と考えられる遺構が発見されたとの連絡が寄せられる。

５日　那覇市教育委員会文化財課による現地確認。詳細確認のため、対象範囲の拡大を要請。

８日　文化財課による現地確認。近代の建物跡及び近世の遺物包含層（集落跡）が確認される。その後、関係者による調整会議を行う。遺跡保存のための調整が行われた結果、現地保存 は困難であると判断され、記録保存のための発掘調査が必要であるとの結論に至る。

９日　文化財課職員の現地確認。

11 日　調整会議。文化財保護法の手続きを開始する。

25 日　関係者による調整会議。発掘調査に関する確認。

29 日　文化財課及び発掘調査支援業者との調整会議。

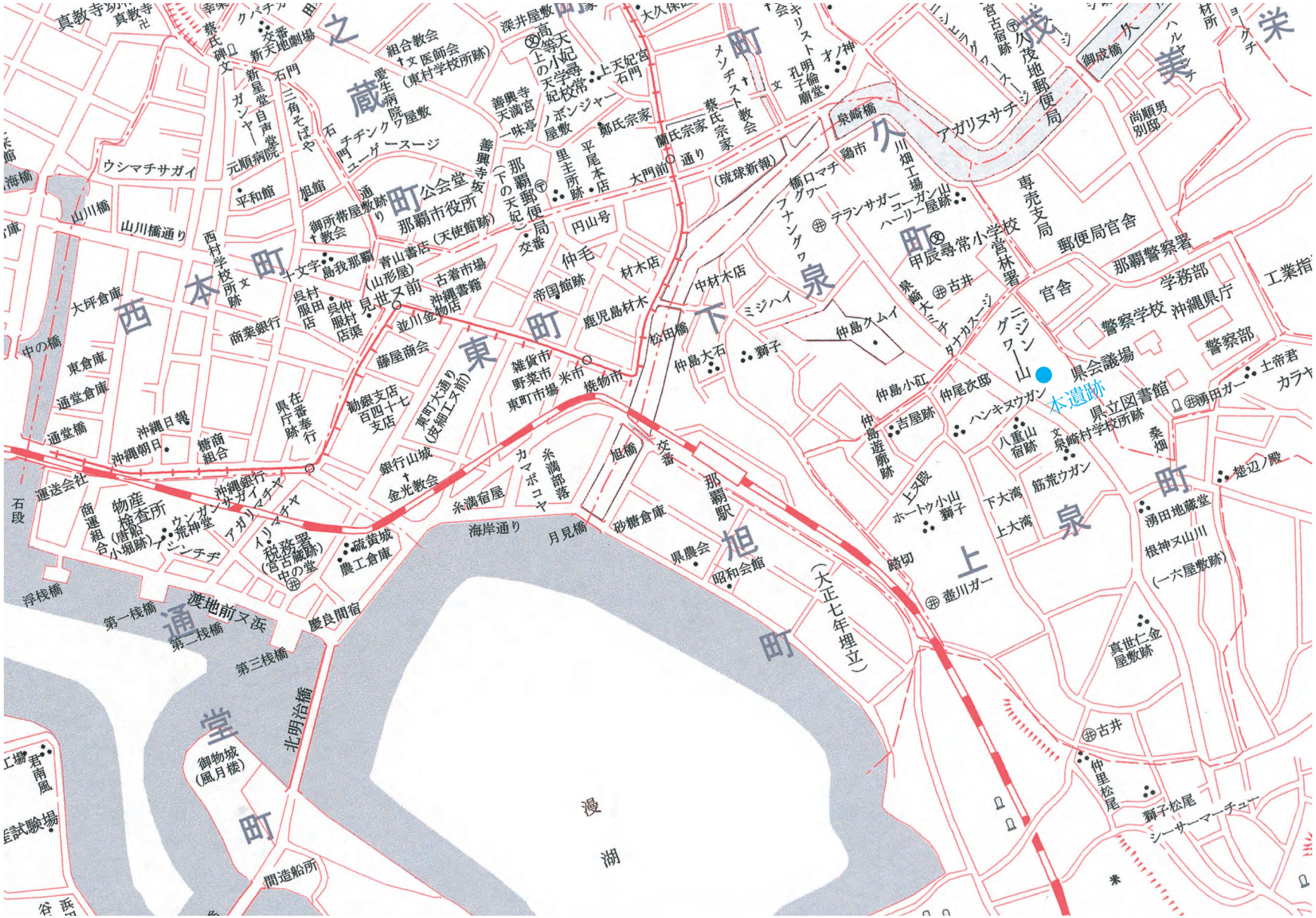
12 月１日　発掘調査開始。

参考文献

『那覇市新庁舎基本構想（改正版）』　那覇市　平成 21 年８月

『広報なは　市民の友』　第 704 号　那覇市　2009 年（平成 21 年）９月

第２図　本遺跡の位置と那覇市内の主な古窯跡　（Ｓ＝１：50,000）



第３図　本遺跡周辺の古地図（昭和期）　（Ｓ＝１：6,000）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

那覇市の現況　本遺跡の所在する沖縄県那覇市は沖縄本島の南西部に位置し（第１図）、面積 39.23 ㎢、総人口 321589 人（2013 年１月現在）を擁する県庁所在地である。本市は東シナ海に西面し、東側に弁ヶ嶽・首里城付近を頂点とする台地があり、南側には小禄台地、北側は天久台地が占地する。北に浦添市、東に西原町、南風原町、南に豊見城市が接している。那覇市は、県庁、那覇市役所が所在する泉崎、国際通り（県道 39 号線）周辺に企業や官公庁が集中し、活気を呈している。さらに、本市北西側では、1987（昭和 62）年、「天久解放地」と称されていた米軍用地が全面返還され、「那覇新都心」として整備され発展を遂げている。

那覇市内の主な遺跡　本遺跡と関連が強いことが示唆されるのが「湧田古窯跡」である。第２図に本市における古窯跡の主な遺跡分布を示した。その数は、７遺跡が知られており、市内に点在する。また、沖縄近世を中心とした集落跡（村跡）も市内に散在して位置している。集落跡に関する発掘調査については、首里地域や壺屋地域において、その事例が増加しているものの、小禄や真和志地域では希薄の感がある。今後、範囲確認調査や分布調査などの事前調査も積極的に実施する必要がある。

本遺跡周辺の文化財　本遺跡周辺には、先に述べた「湧田古窯跡」の他に、多くの文化財（沖縄県指定史跡：仲島の大石や湧田地蔵、一六屋敷跡、壺川ガー、湧田ガー、ハンキヌウガン、筋荒ウガン等）が存在していたことが知られている（第３・４図）。

文献等による「湧田」

「湧田」は、『南島風土記』によれば、「また和久田に作る。田中小路より上、大體に於て今の上泉崎町を指す。（中略）湧田は泉崎村の域内一部の字名たるに過ぎないが、慣習上は別區をなし、稀に湧田村と唱へる事もある。（後略）」と記される。

また、『沖縄大百科事典』によると、「那覇市泉崎１～２丁目付近。昔の泉崎村の一部。旧上泉町の範囲とほぼ一致。1617 年（尚寧 29）高麗人張献功がこの地で陶業をはじめたのが琉球における陶業のはじまりとされている。1682（尚貞 14）美里間切地花、首里宝口とともに湧田の陶窯も壺屋に移転。湧田井、湧田地蔵は戦火で焼失。」と記される。

『角川日本地名大辞典』には、「王府時代の通称地名。「球陽」では湧田村・和久田とも書く。はじめ古波蔵村のうち、17 世紀に那覇の泉崎村に移された。地名は、村外れにあったワクタガーの井戸にちなむ（由来記）。（中略）万暦 44 年（1616）、国質として薩摩へ赴いた佐敷王子朝昌（のちの尚豊王）が帰国する際、朝鮮の陶工張献功と一官・三官を伴って帰国、湧田の地で製陶を始め、人々に陶工の技術を伝授した（球陽附巻尚寧王 28 年条）。（後略）」とある。

以上のように、「湧田」は、沖縄における窯業の始まりの地として知られている地域でもある。

参考資料・引用文献

「那覇市　位置・面積」　那覇市ホームページ

『広報なは　市民の友』　第 746 号　那覇市　2013 年（平成 25 年）３月

『湧田古窯跡Ⅰ』沖縄県教育委員会　1993 年３月

『湧田古窯跡Ⅱ』沖縄県教育委員会　1995 年３月

『湧田古窯跡Ⅲ』沖縄県教育委員会　1997 年３月

『湧田古窯跡Ⅳ』沖縄県教育委員会　1999 年３月

『やちむん』第 10 号　やちむん会　1988 年３月

『那覇市の文化財』　那覇市教育委員会　平成 19 年３月

『那覇市歴史地図―文化遺産悉皆調査報告書―』　那覇市教育委員会　1986 年３月

『市内遺跡Ⅰ』　那覇市教育委員会　2007 年３月

『市内遺跡Ⅱ』　那覇市教育委員会　2009 年３月

『市内遺跡Ⅲ』　那覇市教育委員会　2010 年３月

『市内遺跡Ⅳ』　那覇市教育委員会　2011 年３月

『壺屋古窯群Ⅰ』那覇市教育委員会　1992 年３月

『壺屋古窯群Ⅱ』那覇市教育委員会　1995 年３月

『壺屋古窯群Ⅲ』那覇市教育委員会　1997 年３月

『壺屋古窯群Ⅳ』那覇市教育委員会　2008 年３月

「思い出のわが町」＜７＞　泉崎・湧田民俗地図　1976 年４月 22 日付け沖縄タイムス朝刊

『南島風土記』（東恩納寛惇　沖縄郷土文化研究会　昭和三十九年十二月）

『沖縄大百科事典』　下巻　沖縄タイムス社　1983 年５月

『角川日本地名大辞典　47　沖縄県』　株式会社　角川書店　昭和 61 年７月

『球陽　読み下し編』（球陽研究会　編　『沖縄文化史料集成』５　株式会社　角川書店　昭和五十七年五月）

『琉球國由来記』（横山重　編纂　『琉球史料叢書』第一巻　東京美術　昭和四十七年四月）

『琉球國舊記』（横山重　編纂　『琉球史料叢書』第三巻　東京美術　昭和四十七年四月）

第 4 図　グリッド設定図と周辺の文化財

第Ⅲ章　調査経過と調査組織

第１節　調査経過

本遺跡の発掘調査は、第Ⅰ章でも述べたとおり、2010（平成 22）年 12 月１日より開始した。調査開始前には、すでに建物跡・井戸・埋甕遺構などが露出していた。

発掘調査は、まず調査区内に検出されていた遺構（建物跡）の軸に沿い、任意にグリッド（４ｍ×４ｍメッシュ）を設定することから開始した。グリッドは、略南北方向はアルファベット、略東西方向は算用数字を付して、その呼称は、北西隅の杭を基準とした。

グリッド設定後、調査区の精査作業を行いながら、上層遺構面（主に建物跡）の写真測量作業を実施した（12 月８日～11 日）。

写真測量と併行し、E ライン・７ラインに沿って十字状のトレンチを設定した。トレンチ調査の結果を受けて、12 月 11 日から遺物包含層の掘削作業を開始した。

２基の井戸の掘削に限り重機を使用した。その他、上層の遺構面（建物跡）の西側に位置する石積み、旧那覇市役所建物の基礎工事による撹乱層も、重機掘削で対応した。

人力による包含層掘削は、E ライン・７ラインに幅 50㎝の土層観察畦を十字状に残して掘削した。順次検出された遺構の測量は、手描きによる実測で対応した。十字畦を除く遺物包含層の掘削作業は、平成 23 年１月 18 日までに終了した。十字畦の土層断面図作成、土層注記、写真撮影の記録作業も同日までに終了した。その後、十字畦の掘削を行い、調査区全域で岩盤を全面検出し、１月 22 日に現地調査を終了した。

なお、資料整理及び報告書作成作業は、平成 23・24 年度に行った（第１表）。

第１表　調査工程

年度／工程	2010年度（平成22年度）	2011年度（平成23年度）	2012年度（平成24年度）
遺跡発見	→		
立会調査	→		
発掘調査	→		
資料整理		→	→
報告書作成			→

以下、調査経過を略記する。

2010（平成 22）年

12 月１日（水）晴れ

発掘調査開始。事前に検出されていた遺構面（上層の遺構：建物跡と考えられる石列・井戸跡２基など）の清掃作業から開始する。

８日（水）くもり時々晴れ

第１遺構面の清掃作業を完了、写真撮影を実施。その後、写真測量を開始する。調査区内に幅 50 ㎝のトレンチを十字状に設定し土層堆積の厚さの把握に努める。

11 日（土）晴れ

第１遺構面の写真測量作業を完了する。トレンチ掘削の結果、最深約 120 ㎝の堆積が認められ、大きく７層に分層できた。第１遺構面の下層の掘削作業を開始する。

15 日（水）曇り

井戸跡№.２の掘削作業を開始。上層の遺構面について平面図（略測図：Ｓ＝１：40）の作成を終了する。

24 日（金）晴れ時々曇り

Ｃ－７グリッド第４層における遺物集中部の検出作業を終了。その後、写真撮影を行って遺物取り上げ作業を開始する（遺物は、ドットにて取り上げ、三次元のデータを記録した）。

Ｄ－８グリッド第４層中で検出された第３号遺物廃棄土坑の平面実測（Ｓ＝１：10）終了。

30 日（木）曇りのち雨

Ｄ－６グリッド第４層の掘り下げ作業をほぼ終了する。午後より雨天のため、調査区内の養生を行う。本日にて、年内の作業は終了する。

2011（平成 23）年

１月４日（火）曇り

平成 23 年の調査を開始する。Ｄ－３グリッド第４層上面において赤瓦・獣骨・沖縄産陶器などがまとまった状態で検出された（第２号遺物廃棄土坑）。Ｄ－８グリッド第３号遺物廃棄土坑の半裁作業を開始する。

11 日（火）曇りのち雨

Ｃ－７グリッドにて検出された第３号埋甕遺構の掘り下げ作業を開始する。

14 日（金）晴れ時々曇り

調査区の東西及び南北畦の土層堆積状況図（Ｓ＝１：20）の作成作業を開始する。

22 日（土）晴れ時々曇り

Ｃ－７グリッド第３号埋甕遺構を完掘する。埋甕№.１の胴部から底部にかけて縄が確認された。写真撮影を行った後、取り上げ作業。調査区全体の完掘状況を写真撮影。第７層（岩盤）の掘り込みの平面図（Ｓ＝１：40）を作成して調査区内での作業をすべて終了した。

なお、現地に保管していた遺物等の移動は１月 24 日（月）まですべて終了した。

第２節　調査組織

（１）調査組織

発掘調査および報告書作成は次の体制により実施された。

事業主体	那覇市教育委員会	教育長	城間　幹子（平成 22～24 年度）
事業所管	文化財課	課　長	古塚　達朗（平成 22～24 年度）
調査総括	文化財課	副参事	島　　弘（平成 22～24 年度）
調査事務	文化財課	主　幹	内間　　靖（平成 22～24 年度）
	〃	主　査	會澤　一大（平成 23・24 年度）
	〃	主任主事	仲宗根　健（平成 22・23 年度）
	〃	主任主事	瑞慶山　由香里（平成 24 年度）
	〃	主事（臨時職員）	古波蔵　七保（平成 24 年度）
調査員	文化財課	副参事	島　　弘
	〃	主　幹	内間　靖
	〃	専門員主査	玉城　安明
	〃	専門員主査	北條　真子
	〃	専門員主査	仲宗根　啓
	〃	主任専門員	樋口　麻子
	〃	主任専門員	當銘　由嗣
	〃	専　門　員	知念　政樹

（２）発掘調査

那覇市新庁舎建設工事（建築・１工区）共同企業体

㈱國場組・㈱沖電工・㈱ニシダ工業

現場代理人　新里　一郎

監理技術者　大城　修

工事担当　　金城　誠

株式会社　島田組

文化財事業部長　利川　昇

調査員　　伊波　直樹、國分　篤志、比嘉　直樹

測量担当　　赤嶺　正勝、渡慶次　道輝

発掘調査作業員　吉田　洋、波平　悟、上地　博子、謝敷　毅、宮城　親正、仲本　聖也、仲井間　隆行、本田　勝也、照屋　達、泉谷　塁、大城　俊、上江洲　由昇、安村　重保、浦崎　京子、内間　哲己

（３）資料整理

城間　千栄子、志良堂　恵、真栄城　和美、山下　真利子、山下　美也子、高良　夏枝、宮良　知子、豊里　加奈子、大城　亜姫代

第Ⅳ章　層序

本調査区の層序は、大きく７枚の土層に大別した。さらに、色調の違いや、出土遺物等の多少、しまり具合の違いなどによって細分した（第５図　図版３）。

以下、各層の特徴を略記する。

第１層：上層の遺構面（建物跡）の表層である。建物跡の上面に堆積する焼土を主とした。焼土は、火災による建物の焼失によるものと考えられたもので、木材等が炭化した箇所もまばらに見られる。遺物は、建物で使用した赤瓦が主体で、本土産近代磁器や、鉄製品・ガラス製品などは火災時の被熱により変形したものも確認された。

第２層：上層の遺構面（建物跡）内に堆積する。建物の造成・整地層と考えられる。黒褐色～暗黄灰のシルトを使用し、全体的に締まりは弱い。褐色で締まりの強いシルトを混在させて、締め固めている区域がD－６グリッドで見られる。その他、建物跡西側の石列の一部には、白砂・サンゴ礫・石灰岩礫が多く混入する土で造成・整地されている。遺物は、赤瓦の他に、沖縄産陶器、本土産磁器など近世～近代に属するものが多く見られた。

第３層：調査区のほぼ全域に堆積する。上層の遺構面（建物跡）内では、褐色で締まりの強いシルトが使用され、石灰岩礫や炭・焼土があまり混入しない。一方、建物外側の石積みの造成では、灰オリーブ色の粘土に近いシルトが利用されたり、石灰岩礫が多く使用されるなど、多様な状況である。建物跡の外では、表層から本層の堆積が確認できる。褐色～オリーブ褐色のシルトで構成され、石灰岩礫・炭・焼土が混入する。建物跡の下層でも部分的に見られることから、建物を構築する前から堆積していた状況が窺える。遺物は、赤瓦の他に、沖縄産陶器、本土産磁器（染付）、灰色系瓦など近世期の遺物が主体となる。本層以下より検出された遺構を下層の遺構面とする。

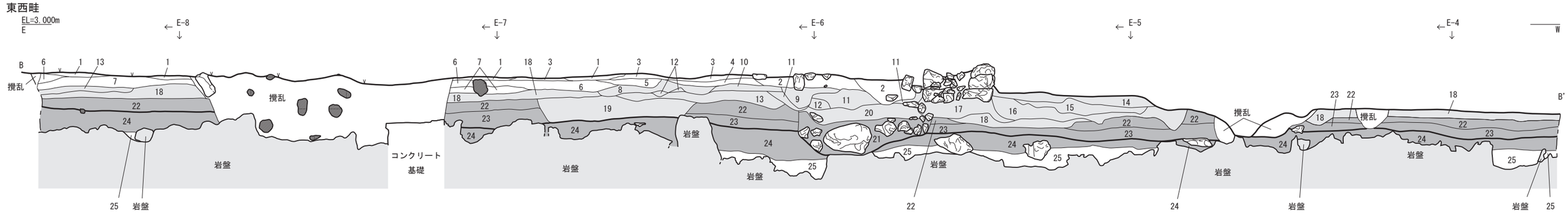
第４層：調査区の広範囲に堆積する。オリーブ褐色のシルトで構成され、第３層と比較して締まりが強く、粘性も強い。石灰岩礫・炭・焼土が混入する。本層は、２層に細分することができた。下層は上層と比較して炭・焼土の混入が弱くなる傾向が見られる。遺物は、赤瓦の出土が少なくなり、灰色系瓦の出土量が多くなる。また、沖縄産陶器の他に中国産磁器の出土も多くなり、貝、獣骨が一定の範囲に検出された状況も見られた。堆積状況は、東西畦では東から西に向かって、南北畦では北から南へ向かって緩やかに低くなるが、層厚20cm～30cm以上で概ね水平に堆積する傾向にある。

第５層：オリーブ褐色のシルトで構成され、第４層よりも締まり・粘性ともに強くなる。混入物は石灰岩礫が主体で、炭・焼土は僅かにしか見られない。遺物は第４層よりは出土量が少なくなる。中国産青磁・青花、沖縄産陶器は第４層よりも少なくなる。第４層と同様、東西畦では東から西に向かって、南北畦では北から南へ向かって緩やかに低くなるのが確認できた。起伏のある岩盤に対して概ね水平に堆積し、遺物の出土量も有している事から、人為的な造成による堆積も可能性の一つとして考えられるが、第４層と同様、堆積の要因については検討が必要である。

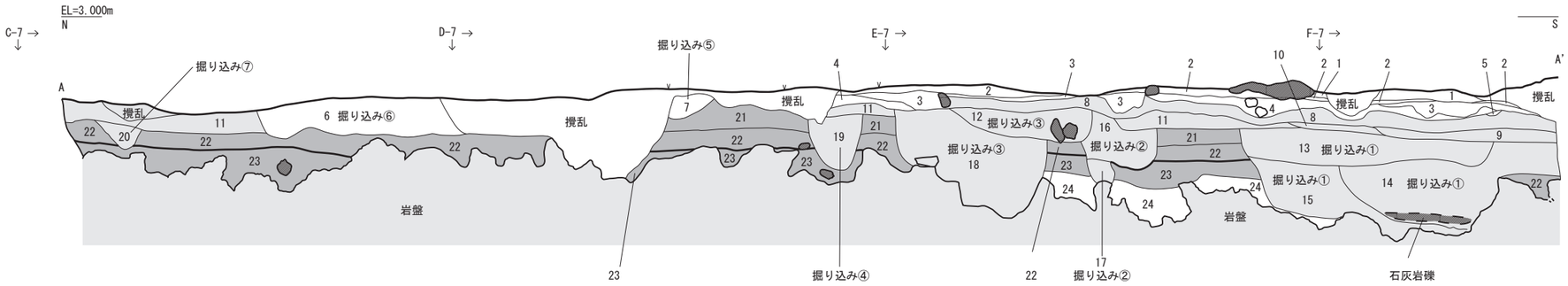
第６層：岩盤直上に堆積し、暗黄灰色の砂質を多く含むシルト層。混入物は石灰岩礫のみである。

第７層：岩盤（琉球石灰岩）

東西畦



南北畦



= 基本層序 3 層　= 基本層序 4・5 層

= 岩盤　= 石

0 (1:50) 2m

東西畦　セクション層序

1. 5YR4/8 赤褐砂質シルト 締まり・粘性ともに弱。第 1 面建物の焼失層（第 1 層）
2. 2.5Y5/3 黄褐シルト 締まりやや弱い。粘性やや強。白砂・サンゴ礫・石灰岩礫・炭・焼土混入。建物外の床石を造成する整地層。
   D-6 出土の水道メーターに接続する水道管が検出（第 2 層）
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐砂質シルト 締まり・粘性ともに弱。炭・焼土・石灰岩礫・白砂混入。E-6 グリッドで確認された建物内の造成整地（第 2 層）
4. 10YR4/3 にぶい黄褐シルト 締まり・粘性ともに弱。白砂・炭・焼土が混入。石灰岩礫の混入は殆どなし。E-6 グリッドの一部で確認された建物内の造成・整地層（第 2 層）
5. 2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト 締まり・粘性ともに弱。炭・焼土混入。建物内の造成・整地層（第 2 層）
6. 10YR4/4 褐色シルト 締まり強。粘性やや強。E-6 の一部で確認。5,7 の土と混材して使用。建物内の造成・整地層（第 2 層）
7. 2.5Y4/2 暗灰黄砂質シルト 締まり・粘性ともに弱い。5 と同様、建物の地固め土であるが、5 より石灰岩礫の混入が少ない（第 2 層）

第 2 層

8. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性弱。炭・焼土の混入は弱い。E-6 グリッドの一部で確認された建物内の造成・整地層。
9. 2.5Y4/4 オリーブ褐砂質シルト 締まり・粘性ともに弱。石灰岩小礫を主体に炭・焼土・明褐色シルトブロックが混入。
   E-5,E-6 グリッドの建物石列の造成・整地で溝状に形成。
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト 締まり強。粘性弱。石灰岩小礫を主体に構成。E-6 グリッドの一部で確認された建物内の造成・整地層。
11. 10YR5/8 黄褐粘質シルト 締まり強。粘性やや強。マージと思われる粘質シルトに石灰岩小礫を混材。
   E-5,E-6 グリッドで確認され、建物石列、建物外の石積みの溝床石までを造成・整地する層。
12. 10YR5/8 黄褐粘質シルト 締まり強。粘性やや強。マージと思われる粘質シルト主体。11 の土と比較して石灰岩礫の混入が殆ど見られない。
   E-5,E-6 グリッドで確認され、建物内、建物石列を造成・整地する層。井戸 No.1,2 で使用される掘り方造成土と同様の土を使用。（第 3 層）
13. 2.5Y4/2 暗黄灰シルト 締まりやや弱。粘性やや弱。石灰岩小礫を主体にサンゴ礫・炭・焼土が混入。E-6,E-8 グリッドの一部で確認された建物内の造成・整地層。
14. 5Y4/2 灰オリーブ粘土 締まり強。粘性強。石灰岩礫・炭・焼土が混入。E-4 ～ E-5 グリッドにかけて確認。F-5 のシーリ周辺の埋土と同質の土（第 3 層）
15. 10YR5/8 黄褐粘質シルト 締まり強。粘性やや強。マージと思われる粘質シルトに石灰岩礫・炭が混入。焼土の混入は弱い。
   E-4,E-5 グリッドで確認され、建物外の石積みの西側を整地する層。（第 3 層）
16. 2.5Y4/2 暗黄灰粘質シルト 締まり強。粘性やや強。石灰岩礫（最大約 10 cm）を主体に炭・焼土・白砂が混入。焼土の混入は弱い。
   E-4,E-5 グリッドで確認され、建物外の石積みの西側を整地する層。（第 3 層）
17. 5Y4/2 灰オリーブ粘質シルト 締まり強。粘性強。石灰岩礫を主体に混入。炭・焼土の混入は弱い。E-5 グリッドの建物外の石積みを整地する層。（第 3 層）
18. 2.5Y4/2 暗黄灰粘質シルト 締まり弱。粘性弱。石灰岩礫・炭・焼土が混入。建物を構築する前に堆積した層と考えられる。（第 3 層）
19. 2.5Y4/3 オリーブ褐粘質シルト 締まり強。粘性強。石灰岩礫の混入が目立つ。炭・焼土混入。E-6 グリッドで確認された掘り込み 10 の埋め土。
20. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。石灰岩礫・炭・焼土・黄褐シルトブロックが混入。E-5,E-6 グリッドで確認された掘り込み 10 の埋土。

第 3 層

21. 2.5Y4/3 オリーブ褐粘質シルト 締まり強。粘性やや強。20 と同様、E-5,E-6 グリッドで確認された掘り込み 10 の埋土。
   大型の石灰岩礫を混入するが、20 と比較して石灰岩小礫・炭・焼土の混入は弱い。
22. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。石灰岩礫・炭・焼土が混入。調査区の広範囲に堆積する。（第 4 層）
23. 2.5Y4/2 暗黄灰粘質シルト 締まり強。粘性強。石灰岩礫・炭・焼土の混入は 22 と比較して弱くなる。調査区の広範囲に堆積する。（第 4 層）
24. 2.5Y4/4 オリーブ褐粘質シルト 締まり強。粘性強。石灰岩礫は混入するが、炭・焼土の混入は殆ど見られない。調査区の広範囲に堆積する。（第 5 層）
25. 2.5Y5/2 暗黄灰砂質シルト 締まりやや弱。粘性弱。炭・焼土の混入は見られない。無遺物層。岩壁直上に自然堆積した層と考えられる。（ 第 6 層）
26. 岩盤（第 7 層）

第 4 層

南北畦セクション層序

1. 5YR4/6 赤褐砂質シルト 締まり・粘性ともに弱。第 1 面建物跡の焼土面。2 と比較して焼土の赤みが弱い。E-7,F-7 グリッドで確認される。
2. 5YR4/8 赤褐砂質シルト 締まり・粘性ともに弱。建物内焼失層。（第 1 層）

第 1 層

3. 2.5Y5/2 暗灰黄シルト 締まり・粘性ともにやや弱。石灰岩礫（約 10 cm）を主体に構成。D-7,E-7,F-7 グリッドで確認された建物の造成・整地層（第 2 層）
4. 2.5Y4/2 暗灰黄シルト 締まり・粘性ともに弱。石灰岩礫・炭・焼土混入。D-7,E-7,F-7 グリッドで確認された建物内の造成・整地層。（第 2 層）
5. 7.5YR4/2 灰褐砂質シルト 炭・焼土混入。出土するのは F-7 グリッドの一部でのみ確認。（第 2 層）
6. 10YR5/3 にぶい黄褐砂質シルト 締まり強く粘性弱。灰白砂の混入が目立つ。C-7,D-7 グリッドの一部で確認された掘り込み⑥の埋め土。
7. 10YR4/3 にぶい黄褐シルト 締まりやや強。粘性やや強。
   石灰岩礫・炭・焼土混入。D-7 グリッドの一部で確認された掘り込み⑤の埋土。

第 2 層

8. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性弱。石灰岩礫は殆ど混入せず。炭・焼土の混入も弱い。
   E-7,F-7 グリッドで確認された建物内の造成・整地層。（第 3 層）
9. 2.5Y4/2 暗黄灰粘質シルト 締まり強。粘性強。炭混入が目立つ。
   F-7 グリッドで確認され、F-6 グリッドの 3 層で検出された焼土・炭集中遺構にかかる土。（第 3 層）
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まりやや強。粘性やや強。石灰岩礫が多く混入。建物内の造成・整地にかかる土かは不明瞭。（第 3 層）
11. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。石灰岩礫が多く混入。建物内の造成・整地にかかる土かは不明瞭。（第 3 層）
12. 2.5Y4/2 暗黄灰シルト 締まりやや弱。粘性やや弱。大型（20 cm弱）の石灰岩礫は混入するが、炭・焼土の混入は弱い。
   E-7 で確認された掘り込み③の埋土。3 層に帰属。
13. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。炭・焼土・石灰岩粒が混入。褐色シルトがブロック状に混入。
   E-7,F-7 で確認された掘り込み①の埋土。
14. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト～粘質シルト 締まり強～非常に強。粘性強～非常に強。炭・焼土・石灰岩礫混入。
   層の下部には 5 cm～ 10 cmの石灰岩礫が集中。13 と同様、掘り込み①の埋土。
15. 2.5Y4/4 オリーブ褐シルト～粘質シルト 締まり津余～非常に強。粘性強～非常に強。炭・焼土・石灰岩礫が混入。
   褐色シルトがブロック状に混入。13,14 と同様、掘り込み①の埋土。
16. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。炭（最大 2 cm）・焼土・石灰岩礫混入。E-7 グリッドで確認された掘り込み②の埋土。
17. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。炭・焼土・石灰岩礫は殆ど混入しない。16 と同様、掘り込み②の埋土。
18. 2.5Y4/2 暗黄灰シルト 締まり弱。粘性弱。炭・焼土・石灰岩礫混入。E-7 グリッドで確認された掘り込み③の埋土。
19. 2.5Y4/4 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。炭・焼土・石灰岩礫混入。D-7 グリッドで確認された掘り込み③の埋土。
20. 10YR3/4 暗褐シルト 締まり強。粘性やや弱。炭・焼土の混入はわずか。石灰岩礫（約 10 cm）を多数埋め込む。
   C-7 で確認された掘り込み⑦の埋土。（第 3 層）

第 3 層

21. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。炭・焼土・石灰岩礫混入。調査区の広範囲に堆積する。（第 4 層）
22. 2.5Y4/2 暗黄灰シルト～粘質シルト。粘性強。炭・焼土・石灰岩粒の混入は 21 と比較して弱くなり。
   調査区の広範囲に堆積する。（第 4 層）
23. 2.5Y4/4 オリーブ褐粘質シルト 締まり強。粘性強～非常に強。石灰岩礫は混入するが、炭・焼土の混入はごくわずか。調査区の広範囲に堆積する。（第 5 層）
24. 2.5Y5/2 暗黄灰砂質シルト 締まりやや弱。粘性弱。無遺物層。炭・焼土も混入しない。（ 第 6 層 ）
25. 岩盤（第 7 層）

第 4 層

第 5 図　層序

第Ⅴ章　遺構

第１節　上層の遺構

建物跡、第１号井戸、第２号井戸、第１号遺物廃棄遺構、第１埋甕遺構などが検出された。発掘調査の契機となった遺跡の基本層序の第１・２層で検出された遺構群である。

以下、各遺構の詳細を述べる。

１．建物跡（第６図　図版４・５）

建物の内外を分ける区画を琉球石灰岩製の石列で形成する。石列は北西側と北東側の２面に残存し、北西側が少なくとも約11m、北東側も約11m残存しているが、調査区内では南東側、南西側を走る石列が残存していないため、建物の規格・形状は不明である。なお、D－８グリッドの北東側石列は３m×0.8mの範囲で外側に張り出しを形成している。建物内では、砂岩・琉球石灰岩製の礎石が64個検出された。礎石は北東－南西方向を軸に少なくとも12列配置され、間隔は90cm～100cmを測る。一方、北西－南東方向にも90cm～100cmの間隔で配置されている礎石に加えて、所々にその中間に配置された礎石が第２層から検出された。また、同じ箇所で上下に重なる礎石も検出されたため、建物の建て替えを行っている可能性が示唆された。第１層で検出された礎石は30cm～50cmの大きさで方形、六角形、多角形等に成形された砂岩を主体として配置される。上面には柱を納める８cm～10cm四方の浅い掘り込みが施された礎石も見られる。一方、石灰岩の礎石は第１層で見られるものは少なく、第２層から多く検出される。また、第２層で検出された礎石は、規格も約20cm前後と小さくなる。その他、D－６グリッドでは水道メーターが検出されており、水道管と接続している。水道管は建物石列の内側を並行し、途中で建物の外側に曲がり、E－５グリッドの途中で切れる。この水道管を埋め込むために、建物の北西側石列の一部は再形成を行い、その後、石列の外側に建物への出入り口となる床敷きに漆喰を施している。

２．第１号井戸（第６図　図版６）

D－４、D－５グリッドに所在する。平面形は、直径約40～50cmのやや楕円形を呈する。井戸の東側には、井戸へと行く道を石灰岩の床石を敷き詰めて構築している。井戸周辺の床石と、孔口の上面とは比高差が5cm～10cmと殆んど無い状況である。また、井戸の西側には灰色系瓦で蓋をした暗渠を構築しており、取水施設へ排水するような構造となっている。

内部の状況としては、井戸の内壁は大型の琉球石灰岩を積み上げ、その裏込めには石灰岩の小礫を使用している。孔口よりも内部が広い構造となる。また、地上近くの一部の内壁では、土留めとして、マージと思われる明褐色のシルトが使用されている。井戸の底面と孔口の比高差は約2.5mである。

調査時においては、重機による半裁後に、内部の石積みが崩落する危険性が高まった事から、予定していた断面図作成を中止し、写真撮影による記録に留めた。

３．第２号井戸（第６図　図版６・７）

Ｃ・Ｄ－５グリッドに所在する。建物跡の北角に隣接する。平面形は、直径約 60～70㎝のやや楕円形を呈する。孔口の周りを琉球石灰岩の切り石で孔口の円を成形しているのは、第１号井戸と同様であるが、井戸周辺を敷きつめた床石と孔口上面とは 50㎝以上の比高差を有する。また、床石も琉球石灰岩の切り石が敷き詰められており、上面には薄い漆喰が施された石もいくつか見られた。井戸の外壁から石列を構築し、建物の石列と並行して溝を形成している。溝の幅は約 30㎝で、途中直角に折れ、建物外に流れる構造となる。溝の底面には漆喰が施され、漆喰の下からは石灰岩の床石が検出した。井戸の外壁北側にも土留めの石積みが構築され、北東方向に延びるが、途中、新庁舎建設工事によるＨ鋼に切られる。土留め石積みの裏込めからは陶器の胴部～底部が出土している。

内部の状況は井戸№1 と同様の構造となっており、崩落の危険性から写真撮影による記録に留めている。井戸の底部と孔口上面の比高差は約 3.2m である。井戸の埋め戻し後、人力による包含層掘削時において、マージと思われる明褐色の井戸の掘方が一定の範囲を持って検出された。掘方は井戸外壁の南側約 1mの範囲を有しており、途中撹乱されているが、長軸が長い楕円形を呈しているのが窺える。掘方の厚さは深い所で約 30㎝を測る。

４．第１号遺物廃棄遺構（第６図　図版８）

Ｅ・Ｆ－５、Ｆ－４グリッドに所在する。調査中は、方形枠組遺構・シーリと称していた遺構である。一辺約 1.1m のほぼ正方形で、上面は琉球石灰岩の切り石で成形する。石積み遺構に隣接しており、石積みの西側溝の排出先がこのシーリとなる。シーリは岩盤まで掘り込まれており、上面からの深さは約１m～1.2m を測る。壁面の状況は４面で異なり、北西壁と北東壁が３段～４段の石積みを形成し、根固めに褐色の小礫を多く使用する。南西壁は幅約 1.1m、高さ最大約 50㎝を測る琉球石灰岩の１枚石を壁面成形して埋め込み、１枚石の周辺の小礫で補強する。そして、南東壁は石積み遺構の西側溝の床石のみで、下部は岩盤まで土が堆積する。埋土は灰オリーブ色の粘性の高いシルトで石灰岩礫・炭・焼土が混入し、赤瓦などの遺物も多く出土した。また、埋土は独特の臭みを持つ。本遺構は、建物からの排水や食料残滓等の廃棄用として利用されたものと考えられた。土壌の一部について科学分析を行った（附篇２参照）

本遺構周辺を掘削すると、北西壁、北東壁の石積みの後方で、大量の赤瓦を中心に沖縄産陶器、ガラス製品が出土した。また、壁面の石積みを除去すると、根固めの土が掘り方として検出され、沖縄産陶器壺の底部が形をもって出土している。さらに、岩盤を全面検出した際に、岩盤を方形に掘り込んでいる状況が確認された。

５．第１号埋甕遺構（第６図　図版５）

建物内の東側Ｄ－８グリッドに所在する。口径 48.4 ㎝、底径 23.4 ㎝、高さ 44.0 ㎝を測る沖縄産無釉陶器の甕である。

第２節　下層の遺構

遺跡の基本層序である第３層～第５層で検出された遺構群である。

１．第２号遺物廃棄遺構（第６図　図版９）

D－３グリッドの第４層上面にて確認された。規格は70cm×55cmの方形を呈する。遺構の上面には沖縄産陶器、赤瓦、獣骨が検出された。埋土は単層で、にぶい黄褐色のシルトと、白砂・サンゴ礫・石灰岩礫の混合層からなる。深さは約10cmと浅く、掘り込み方も緩やかである。

本調査で検出した遺構では規模が最も小さく、遺物の出土量も少ない。

２．第３号遺物廃棄遺構（第６図　図版10）

D－８グリッドの第４層掘削時において確認された。赤瓦、沖縄産の擂鉢や壺、碗といった陶器、中国産磁器、本土産染付、ブタの下顎骨といった遺物が密集して検出された。埋土はオリーブ褐色の砂質を含むシルトの単層からなり、締まり・粘性ともにやや弱い。石灰岩礫・炭・焼土・白砂が混入する。遺構の形状は上面で見ると、堆積層である第４層との境目が不明瞭な不定形を呈していたが、掘削すると南東側に広がり、最終的にはC－８グリッド、D－９グリッドの一部に掛かる調査区の境界まで範囲が広がる事となった。遺構の深さは約10cmと浅く、掘り込み方も緩やかである。

当該遺構は、先述した密集して検出された遺物を一括廃棄するための掘り込みである可能性が高いと考えられる。しかし、掘削時に遺構の範囲が広がり、その際に出土した遺物は、密集度が弱く、遺物も赤瓦が明らかに多くなる。このことから複数回に分けて遺物を廃棄した可能性も考えられる。陶磁器から見るとほぼ近世の遺物で構成されており、近世に属する第３層、もしくは第４層を掘り込んだ遺構として捉えられる。

３．第２号埋甕遺構（第６図　図版11）

ここでは、Ｆ－６グリッド第３層の調査中に「炭・焼土集中遺構」「埋甕遺構」と称していた遺構を一括して第２号埋甕遺構とする。Ｆ－６グリッドにおいて、広範囲に広がる焼土面と、焼土面に付随する炭が集中する面が検出されたため、これを「炭・焼土集中遺構」と称した。遺構の形状は調査区の境界と旧那覇市役所の基礎工事攪乱で切られているため、不定形であるが、残存長で約3.5mの規模を有する。遺構内の埋土は９層からなり、上面で検出された焼土面は第１層に、炭の集中する層は第５層にあたる。遺構の深さは、約10cmと浅い。焼土面は基本層序の第１層で見られたような火災の焼失による一過性の焼土化ではなく、その区域で何度も焼成作業を行って焼土化したものと考えられた。焼土層を除去すると、棒状で北東－南西方向に長軸を持つ黒褐色の砂質シルト（遺構内２層）が検出された。さらに遺構内２層を除去すると、沖縄産の甕の口縁部が検出された。炭・焼土集中遺構の全面掘削と併行して甕の口縁部を半裁する形でトレンチを入れると、大型の甕が埋め込まれた新たな遺構が確認され、これを「埋甕遺構」と称した。

甕は口縁部～胴部まで残存しており、口径（24.4cm）と比較して胴部の張り出しが強く最大径で約59cmを測る。口縁部～胴部の高さは約46cmである。甕の内部は口縁部～胴部まで炭が堆積している状況であった。埋甕遺構は平面の形状が周辺の堆積層との境目が不明瞭で、断面でのみ確認できる。埋甕遺構の埋土はオリーブ褐色の粘性が高いシルトであるが、甕の西側と東側に埋め込まれた土では石灰岩礫の混入量に差がみられ、質が異なる。さらに甕の西側ではピット状に掘り込まれた遺構が見られ、灰オリーブ色の粘土を埋土としている。

当該の炭・焼土集中遺構、埋甕遺構は上下に重なる遺構であり、順番としては甕を埋めた後に何らかの焼成作業を行った遺構として考える事が出来るが、その目的は不明である。

４．第３号埋甕遺構（第６・７図　図版12～14）

Ｃ－７グリッドに所在する。本遺構は、調査前にはすでに確認されていた遺構である。建物跡の北東側石列からは約1.5m離れた位置にある。当初は甕１基（埋甕№1）の胴部が見えており、甕の周辺は石が崩落していた状況であった。その後、崩落した石を除去するともう１基（埋甕№2）が埋まっているのが確認された。その後も、転石等を除去し、甕の周辺を掘削すると、長方形に掘り込まれた遺構である事が分かった。

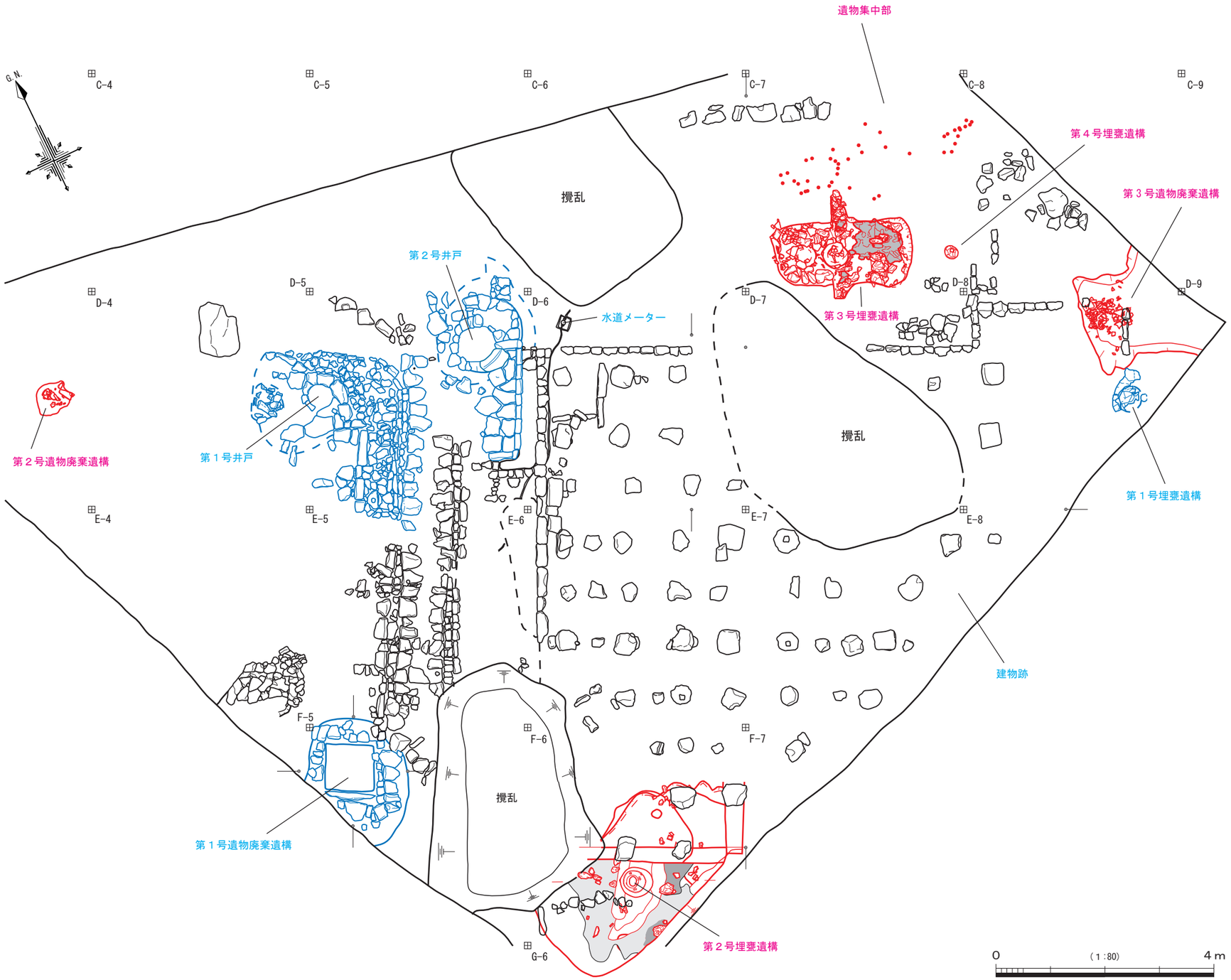
遺構の規格は約2.5m×1.2mで北西－南東方向に長軸を持つ。遺構内における２基の甕は、中心ではなく長軸の北西側に配している。また、甕の上面を囲うように石列を配置している。埋土は上から、①石列の根固めの土（暗オリーブ褐色、締まりの強いシルト）、②遺構の埋め土（オリーブ褐色、締まり弱い）、③甕の底部を補強する土（暗黄灰色、締まり強い）と３つの層からなる。遺構は上面から湾曲して、場所によっては内に抉るように岩盤を掘削して構築されており、上面から深い所で約90cmの比高差を有している。２基の甕はタイ産の褐釉陶器が使用されており、埋甕№2は底部を固定する為の木材が検出されている。一方、埋甕№1では底部を検出時に、胴下部に甕の括り縄が一部見られ、甕を取り上げると括り縄が底部一面に及んでいる状況が検出された。そこで、括り縄の状態を現状保存するため、一旦取り上げた甕を戻して周辺の土ごと剥ぎ取りを行った。その他、遺構内からは太さ10cm以上の木杭が３本、等間隔に並列して検出された。木杭は遺構の底部から斜めに突き出ており、杭の底部を土と石で、その内１本は赤瓦を立てて、補強している。

遺構を完掘後、岩盤を全面検出すると、遺構の岩盤掘り込みの跡だけではなく、そこから遺構の東側に「く」の字状に伸びる溝状の掘り込みを形成しているのが確認することが出来た。
なお、調査時において、当該の埋甕遺構は調査期間の最後に調査を終了した遺構となった。

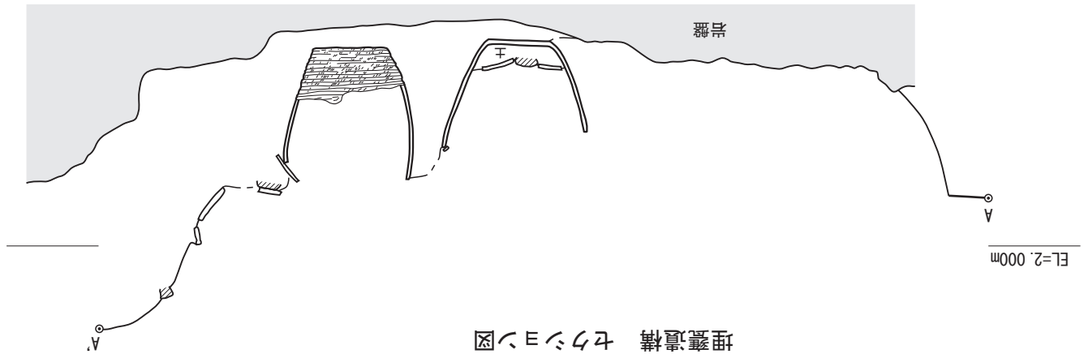
なお、資料の詳細は、第16図を参照、埋甕№.１に付随した縄の保存処理及び内部の土壌、縄、遺構内の木杭について、科学分析を行った（附篇１参照）。

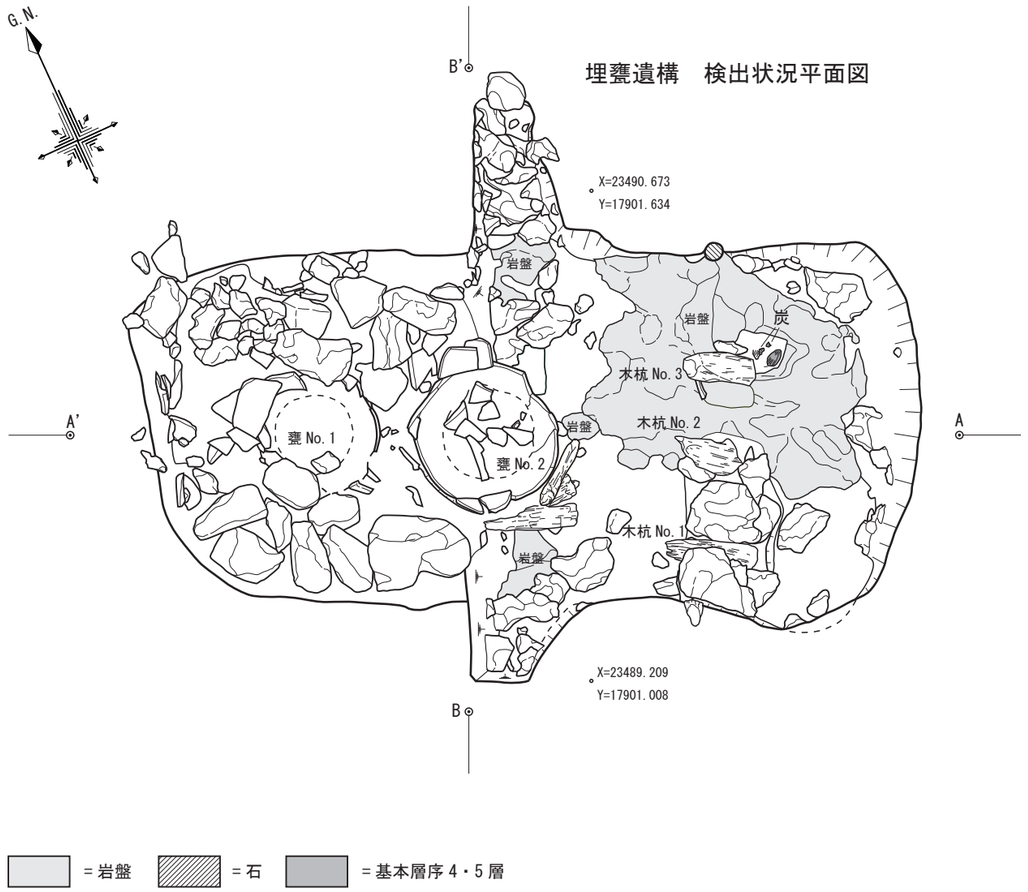
５．第４号埋甕遺構（第６図　図版５）

Ｃ－７グリッドの第４層の掘り下げ作業中に検出された。陶質土器の蓋と身がセットになっていた（第23図参照）。調査当初は、上層の建物跡に付随する遺構と考えられたが、出土した層位から、ここで扱った。


遺物集中部
C-4
C-5
C-6
C-7
C-8
C-9
第４号埋甕遺構
第３号遺物廃棄遺構
撹乱
第２号井戸
D-4
D-5
D-6
D-7
D-8
D-9
水道メーター
第３号埋甕遺構
第２号遺物廃棄遺構
第１号井戸
撹乱
第１号埋甕遺構
E-4
E-5
E-6
E-7
E-8
建物跡
F-5
F-6
F-7
撹乱
第１号遺物廃棄遺構
G-6
第２号埋甕遺構
0
(1:80)
4m

第６図　遺構全体図





1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルト 締まり強。粘性やや強。炭・焼土・石灰岩粒の混入はわずか。
   遺構の上面に形成される石列を根固めする土。
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐シルト 締まり・粘性ともに弱。石灰岩礫・白砂を多く混入。炭・焼土の混入は少量。
3. 2.5Y4/2 暗灰黄粘質シルト 締まりやや強。粘性強。石灰岩礫を主体に混入。炭・焼土の混入はわずか。
   甕の底部を補強する土と考えられる。
4. 2.5Y4/2 暗黄灰シルト～粘質シルト 締まり強。粘性強～非常に強。石灰岩礫を混入し、炭・焼土の混入は弱い。
   基本層序の 4 層に対応。
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐弱粘質シルト 締まり強。粘性強～非常に強。石灰岩礫は混入するが、炭・焼土の混入はごくわずか。
   基本層序の 5 層に対応。

第 7 図　第 3 号埋甕遺構

第Ⅵ章　遺物

第１節　外国産陶磁器

第２表に示したとおり、中国産・タイ産・産地不明の陶磁器が得られた。その殆どが、中国産の白磁・青磁・青花で、青磁類が多く得られた。層的には第４・５層がメインで、第３層は遺構に伴うものを主に集計したため、極端に出土量が落ちる。青花が白磁・青磁に比べて、第４層で出土する若干の時間差が伺えた。時期的には、15 世紀後半～16 世紀後半～19 世紀にかけた幅広い時期のものである。以下、特徴的な遺物を示し種類別に記述する。

１．白磁

器種としては、碗・皿・杯・壺・秉燭などが得られた。特に、碗・皿類が数多く見られ、次いで杯類であった。主に、15 世紀後半～ものである。個々の観察や出土量は第３・４表に示した。以下、器種別に記述する。

碗（第8図1）

失透釉を施したもので、高台内側はハの字状に成形されている。見込みは若干盛り上がる。

皿（第８図２～９）

２～７は小皿のもので、２は内湾の皿、３～５は高台に抉り、見込みに溶着痕を残すものである。６は輪花文の皿で、７は碁笥底のものである。７は２次使用のためか、口縁部を円弧状に打ち欠かいている。８・９は中皿の端反りのもので、失透釉が施されている。

杯（第８図 10～12）

10・11 とも失透釉で、いずれも小杯である。10 は外反杯、11 は直口杯と思われる。12 は腰折れ杯で、胴部の破損面で開く器形を呈している。全体の器形は不明。

壺（第８図 13）

内外面には明瞭にロクロ痕が観察される。釉薬は内外面に見られるが、腰部より高台にかけては施さない。一部、畳付けまで釉垂れが及ぶ。いわゆる「安平壺」と呼ばれているものである。

灯明具（第８図 14）

脚付きの灯明具で、秉燭と呼ばれているものである。脚部は空洞で、底面には孔が見られる。釉薬は脚部の裾野まで施すが、釉垂れが一部底面の立ち上がりまで及ぶ。釉薬には細かい貫入が見られる。底面は露胎で、右回転のろくろ痕が観察される。

第２表　外国産陶磁器出土一覧

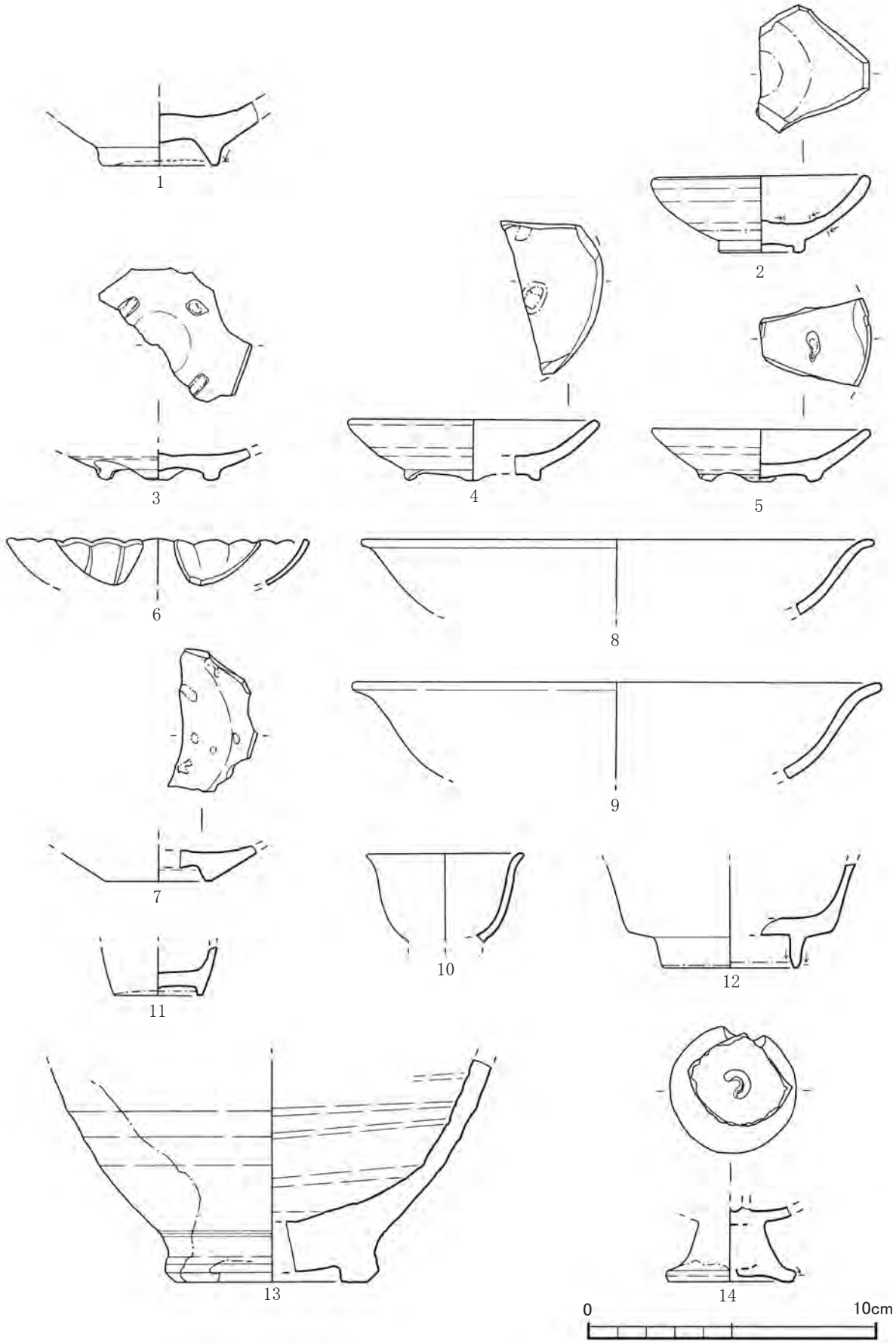
グリッド	層序	遺構	白磁	青磁	青花	褐釉	青磁青花	褐釉染付	色絵	三彩陶器	瑠璃釉	翡翠釉	鉄絵	半練土器	外国産不明	合計
	第2層			1	1		1									3
	第3層		3	7	11	2										23
	第4層		52	279	231	232	1	2	3	3	2		1		9	815
	第5層		39	284	76	250	1	1	1	4		1	2	1	2	662
	下層（第3～5層一括）		5	29	18	36									1	89
D－4	第1層	重機掘削面精査				1										1
E―4・5	第1層	試掘坑跡壁面精査時			1											1
C―5	第1層	撹乱（井戸No1重機埋土）	2	10	6	13				1					1	33
D－4	第1層	撹乱（井戸No1重機埋土）			5	8										13
D－5	第1層	撹乱（井戸No2重機埋土）		6	5	5				1						17
E―5	第1層	西側溝内	1													1
F－5	第1層	シーリ内			2											2
	第1層	シーリ内埋土	2	2												4
	第1層	方形枠組み遺構内（シーリ）		1	2											3
	第1層	方形枠組み遺構内（シーリ）埋土			5											5
	第2層	シーリ掘り方			4											4
	第2層	シーリ周辺		2	4	2		1								9
E―4	第2層	シーリ周辺瓦敷き集中部一括		1	1											2
	第2層	シーリ周辺石積下2層			3											3
D－8	第2層	埋甕内		1												1
C－6	第2層	井戸No2裏込め石内	2	2	3	2										9
	第2層	井戸溝No2掘り方	1													1
D－5	第2層	井戸No2裏込め石内	3		2											5
	第2層	井戸No2裏込め周辺	1													1
	第2層	井戸No2半裁時			2											2
D－6	第2層	石列脇トレンチ井戸No2掘り方				1										1
D－5	第2層	井戸No1掘方造成土（明褐色土）				1										1
E―4	第3層	井戸No1掘り方造成土東西畦除去時			1	1										2
D－3	第3層（4層上面）	廃棄遺物遺構			3	1										4
	第3層（4層上面）	廃棄遺物遺構一括		1												1
C－7	第3層	埋甕遺構内	2	2	2											6
	第3層	埋甕遺構遺構内2層一括	1	2	2									1		6
	第3層	埋甕遺構内　3層一括	1		1											2
	第3層	埋甕遺構甕No1本体				1										1
	第3層	埋甕遺構甕No2本体				1										1
	第3層	埋甕掘削時		3		2										5
	第3層	埋甕遺構裏込め		1												1
	第3層	埋甕遺構周辺		2												2
	第4層	埋甕遺構周辺		1	1	4										6
	第4層	埋甕遺構 甕No2南側													1	1
F－6	第3層	埋甕遺構埋土		2												2
F－6	第3層	炭・焼土集中遺構サブトレンチ内			2	1										3
	第3層	炭・焼土集中遺構周辺			5											5
	第3層	炭・焼土集中部遺構内焼土層（第1層）				1										1
	第3層	焼土・炭集中遺構焼土層		1	4											5
	第3層	焼土・炭集中遺構炭層		1												1
	第3層	炭・焼土集中遺構炭集中土層			2											2
	第3層	炭・焼土集中部炭集中土層			4											4
	第3層	炭・焼土集中遺構炭層第5層			2											2
C－7	第4層	遺物集中部		13	1	6										20
	第4層	遺物集中部一括				2										2
C－8	第4層	遺物集中部一括			1											1
D－8	第4層	廃棄遺物 DotNo.3					1									1
	第4層	廃棄遺物遺構一括		3	21	4	2									30
D－6	第3・4層	南北トレンチ　－30cm～岩盤		5	1	2										8
	第4層	南北トレンチ　－70cm岩盤直上		1												1
D－8	第5層	埋甕周辺				2										2
E―8	不明	東西トレンチ褐色粘質土（-20cm以下）		2		1										3
		合計	115	665	435	582	6	4	4	9	2	1	3	2	14	1842
						67										
						1（壺・胴部抜き合計）										

第３表　白磁出土一覧

ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層序	遺構	白磁																					合計
			碗			小碗	皿					小皿			杯					灯明具		壺	不明	
			口縁	胴部	底部	口縁	口縁	胴部	底部	口～胴	口～底	口縁	底部	口～底	口縁	胴部	底部	口～胴	口～底	口縁	底部	底部	胴部	
	第3層				1		1																1	3
	第4層		8		9		2		3					1	4		3	1	1	1	1	1	17	52
	第5層		5	1			4	1	7	1	1	1	1	1	1	1	5	1					8	39
	下層(第3～5層一括)					1	1										1						2	5
C―5	第1層	攪乱(井戸No1重機埋土)					1			1														2
E―5	第1層	西側溝内																					1	1
F―5	第1層	シーリ内埋土				1																	1	2
C―6	第2層	井戸No2裏込め石内																					2	2
	第2層	井戸溝No2掘り方					1																	1
D―5	第2層	井戸No2裏込め石内													1								2	3
	第2層	井戸No2裏込め周辺																					1	1
C―7	第3層	埋甕遺構内																					2	2
	第3層	埋甕遺構遺構内第2層一括							1															1
	第3層	埋甕遺構内第3層一括																					1	1
合計			13	1	10	2	10	1	11	2	1	1	1	2	6	1	9	2	1	1	1	1	38	115

第４表　白磁観察一覧

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	種	口径 器高 高台径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	出土地点
第８図　1 図版17の１	碗		― ― 4	灰白色で微粒子	内外面に施す。畳付けは露胎。その内側に細砂粒付着。	なし		なし	Ｅ－５ 第４層
第８図　2 図版17の２	皿		7.6 2.9 3	淡黄白色で粉粒子	内外面に施す。見込み蛇の目釉剥ぎ。腰部～露胎。	なし	淡黄白色	細かくあり	Ｃ－７ 第５層
第８図　3 図版17の３	〃		― ― 4.2	〃	内外面に施す見込みに熔着痕が残る。	〃	〃	なし	Ｄ－６ 第５層
第８図　4 図版17の４	〃		8.8 2.1 4.8	〃	〃	〃	〃	〃	Ｄ－５ 第５層
第８図　5 図版17の５	〃		7.5 1.9 4.2	灰白色で微粒子	〃	〃	灰白色		Ｃ－７ 第４層
第８図　6 図版17の６	〃		10.4 ― ―	〃	内外面に施す。	輪花文	〃	あり	Ｄ－５ 第５層
第８図　7 図版17の７	〃		― ― 3.8	〃	不明	不明	〃	不明	Ｆ－６ 第５層
第８図　8 図版17の８	〃		18 ― ―		〃				Ｃ－７ 攪乱 第１号井戸
第８図　9 図版17の９	〃		18.6 ― ―		内外面に施す。		灰白色		Ｅ－５ 第５層
第８図　10 図版17の10	杯		5.4 ― ―	淡黄白色で粉粒子	内外面に施す。	なし	黄白色	あり	Ｅ－６ 第５層
第８図　11 図版17の11	〃		― ― 3	灰白色で微粒子	失透釉を内外面に施す。畳付け露胎。	〃	灰白色	なし	Ｅ－６ 南北トレンチ
第８図　12 図版17の12	腰折れ杯		― ― 4.8	灰白色 微粒子	〃	なし	〃	〃	Ｅ－５ 第５層
第８図　13 図版17の13	壺		― ― 7.4	〃	内外面に施す。腰部～高台露胎。	なし	〃	あり	Ｃ－７ 第４層
第８図　14 図版17の14	灯明具		― ― 4.3	白色で粉粒子	内外面に施す。脚部の裾野と底部は露胎。	〃	白色	あり	Ｆ－７ 第４層



第8図（図版17） 白磁：碗(1)、皿（2～9）、杯（10～12）、壺(13)、灯明具(14)

２．青磁

器種としては、碗・皿・壺・香炉などが得られた。特に、白磁と同様に碗・皿が多く得られた。時期的には15世紀後半～16世紀後半代のものが見られた。個々の観察・出土量は第５・６表に示した。以下、器種別に略述する。

碗（第９図１～４）

１は全形を知り得る略細蓮弁文の直口碗である。見込みには印花文を施す。高台外面にスス痕の付着が見られるが、使用時のものと思われない。２は見込みに捻り文の見られるもので、１と同様に高台外面にスス痕が観察される。畳付けにも釉薬が見られた。また、見込みに小孔が残るものが、３点確認された。その内の３・４の２点を示した。小孔痕は重ね焼きの際の釉薬を剥ぐ道具痕と思われた。３は高台外面まで釉垂れが及ぶ。

皿（第９図５・６、第10図１・２）

５も先の碗と同様に、見込みに小孔が見られるものである。畳付けが殆ど破損しているが、僅かに残る面に釉薬が観察される。６は釉薬がやや厚く、内面に略蓮弁文が見られる。器表面は劣化が著しく、廃棄後の周辺の包含する土質の影響と思われた。

１・２は腰折れの綾花皿で、皿類の大半を占める。口縁内面に草花文等を描く。２は釉薬を内外面に釉薬を施した後、高台内の釉剥ぎを行っている。１が灰緑褐色で２が黄褐色を呈する。

瓶（第10図３）

頸部から肩部にかけてのもので、頸部に直線と曲線を組み合わせた文様と肩部に草花文を刻むものである。

壺（第10図４）

頂部より庇へ向けて波状に成形した壺の蓋である。本資料も碗類に見られた、同様のスス痕が観察された。

香炉（第10図５・６）

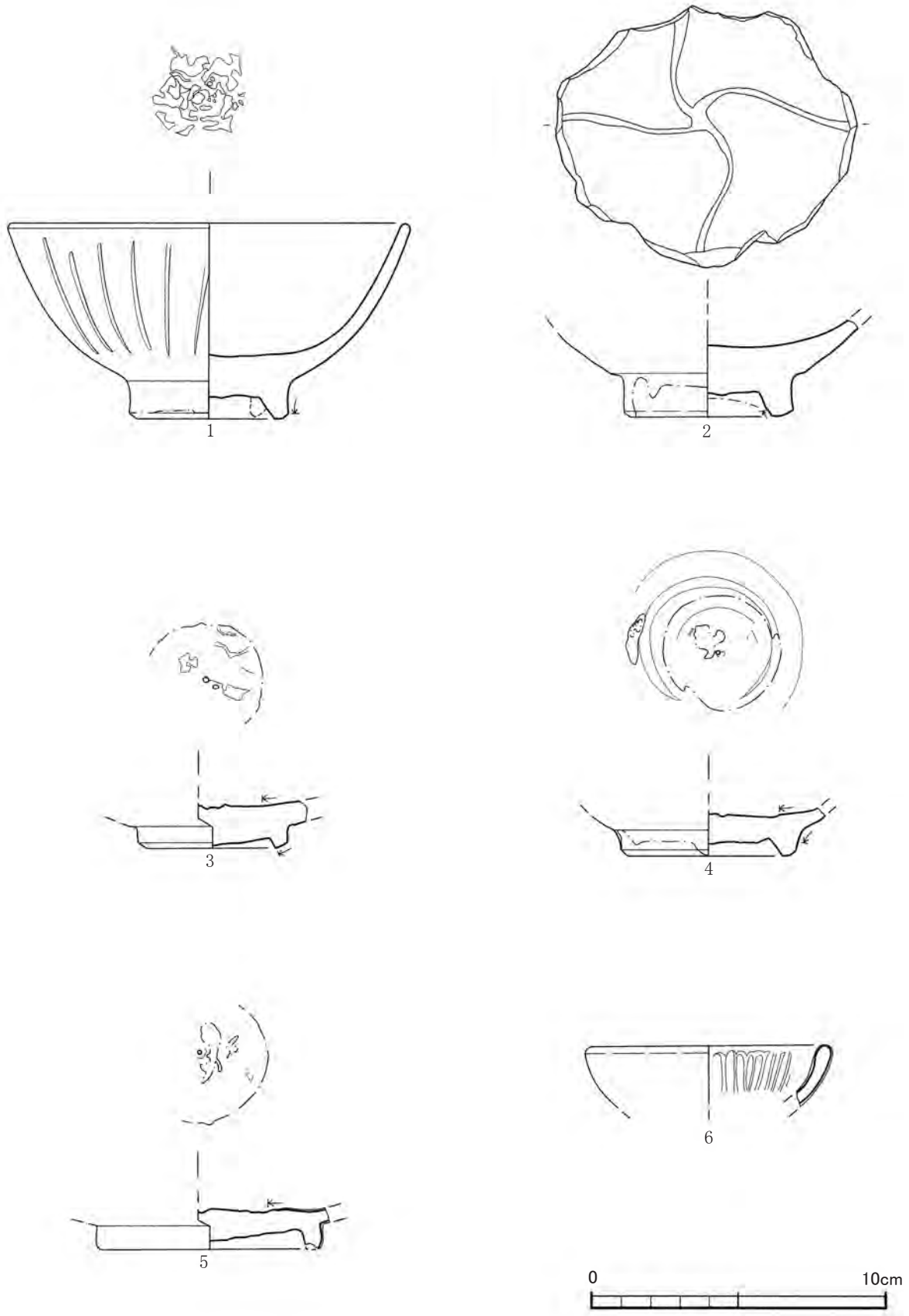
５は高台部を台状に造るもので、獣形の脚部が１足見られる。脚部の獣形はかなり簡略されている。６も獣形の脚部片で、５に比べると獅子面は明瞭である。

第５表　青磁出土一覧

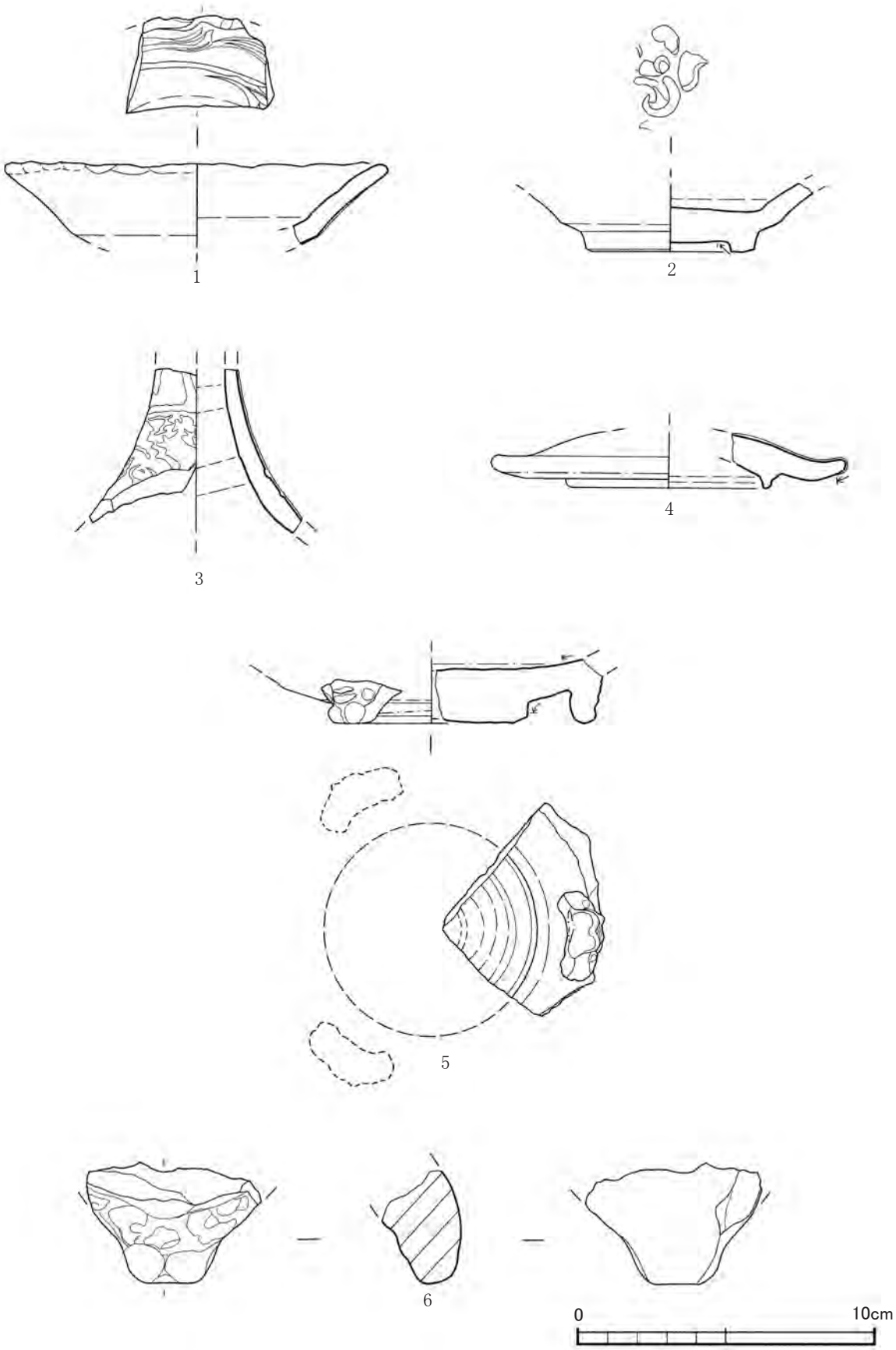
ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層序	遺構	青磁																													合計
			碗				皿			杯			鉢	盤		香炉				壺		大壺	袋物	蓋		水滴	不明				
			口縁	胴部	底部	口～底	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	口縁	胴部	口縁	胴部	底部	脚	胴部	底部	胴部	胴部	口縁	胴部	胴部	口縁	胴部	底部	脚？	
E―6	第2層		1																													1
	第3層		1	1	1		1	2																				1				7
	第4層		62	30	24	1	27	17	5	9	2					1		1	1	3	1		1	2				91	1		279
	第5層		45	77	19		51	20	7	3			1	1	1	1						1				1	1	55			284
	下層(第3～5層一括)		4	13	1		4	1		1							1			1								3			29
	第1層	攪乱（井戸No1重機埋土）	1	1	1		3			1																		3			10
D―5	第1層	攪乱（井戸No2重機埋土）	1	3								1																		1	6
C―6	第2層	井戸No2裏込め石内		2																											2
F―5	第1層	シーリ内埋土			1					1																					2
	第1層	方形枠組み遺構内（シーリ）			1																										1
	第2層	シーリ周辺		1						1																					2
E―4	第2層	シーリ周辺瓦敷き集中部一括																										1			1
D―8	第2層	埋甕内																							1						1
D―3	第3層	（第4層上面 廃棄遺物 遺構一括）				1																									1
C―7	第3層	埋甕遺構内		2																											2
	第3層	埋甕遺構遺構内2層一括			1		1																								2
	第3層	埋甕掘削時		2						1																					3
	第3層	埋甕遺構裏込め					1																								1
	第3層	埋甕遺構周辺					1	1																							2
	第4層	埋甕遺構周辺																										1			1
F―6	第3層	埋甕遺構埋土		1	1																										2
F―6	第3層	焼土・炭集中遺構焼土層			1																										1
	第3層	焼土・炭集中遺構炭層																										1			1
C―7	第4層	遺物集中部		9			2	2																							13
D―8	第4層	廃棄遺物遺構一括	1				1																					1			3
D―6	第3・4層	南北ﾄﾚﾝﾁ　―30cm～岩盤		3	1		1																								5
	第4層	南北ﾄﾚﾝﾁ　―70cm岩盤直上			1																										1
E―8	不明	東西ﾄﾚﾝﾁ褐色粘質土(-20cm以下)		1					1																						2
合計			116	147	53	1	93	43	13	17	2	1	1	1	1	2	1	1	1	4	1	1	1	2	1	1	1	157	1	1	665

第６表　青磁観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	口　径 器　高 高台径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	その他	出土地点
第９図　１ 図版18の１	直口 碗	13.8 6.7 5.4	灰白色で 粗粒子	内外面に施す。畳付～外底面は露胎。	略細蓮弁文 見込みに印花文	淡灰緑色	あり	外底面に溶着物が残る。	Ｃ－７ 第４層
第９図　２ 図版18の２	碗	－ － 5.8	〃	内外面に施す。畳付内まで施釉。畳付は一部露胎。	見込みに捻り文	〃	なし	腰部の破損部打ち欠き二次使用か	Ｄ－６ 第４層
第９図　３ 図版18の３	碗	－ － 5	〃	内外面に施す。見込み外底面は露胎。	不明	〃	あり	〃	Ｄ－５ 第５層
第９図　４ 図版18の４	〃	－ － 5.6	黄白色で粗粒子	〃 高台は露胎	不明	黄灰色	あり	〃	Ｃ－７ 第４層
第９図　５ 図版18の５	皿	－ － 7.5	灰白色で 粗粒子	内外面に施す。見込み外底面の中央部は露胎。	不明	緑色	〃	〃	Ｄ－５ 第５層
第９図　６ 図版18の６	〃	8.4 － －	灰白色で微粒子	不明 釉薬は厚い	内面に略蓮弁文	灰緑色	あり	器表面の劣化著しい	Ｆ－６ 第４層
第10図　１ 図版19　１	綾花 皿	13 － －	灰白色で粗粒子	内外面に施す	内面に曲線・圏線・草花文	〃	〃		Ｃ－８ 第５層
第10図　２ 図版19　２	〃	－ － 5.8	淡黄褐色で粗粒子	高台内のみ露胎	見込みに印花文	黄褐色	なし	破損面に二次的にススが付着	Ｃ－６ 第５層
第10図　３ 図版19　３	瓶	－ － －	灰白色で微粒子	内外面に施す	頸部に沈文 肩部に草花文	淡緑白色	あり	器表面の劣化やや著しい	Ｃ－８ 第４層
第10図　４ 図版19　４	壺の 蓋	12.0 － 6.6	〃	庇の端部内側まで施す	不明	〃	なし	〃	Ｄ－４ 第４層
第10図　５ 図版19　５	香 炉	－ － 5.6	黄白色で粗粒子	内外面に施すが、見込みと底面は露胎。	不明	〃	〃		Ｄ－６ 第４層
第10図　６ 図版19　６	〃 の 脚	－ － －	〃	〃	獣形	黄褐色	あり		Ｄ－８ 第４層



第9図（図版 18） 青磁①：碗（1 ～ 4）、皿（5・6）



第 10 図 (図版 19)　青磁②：皿 (1・2)、瓶 (3)、壺の蓋 (4)、香炉 (5・6)

３．青花

第 11～13 図に特徴的なものを示した。碗・鉢・皿・壺・杯等が得られた。15 世紀代のものも見られたが、主に 16 世紀以降のものであった。個々の観察や出土量は第７・８表に示した。以下、碗より記述する。

碗（第 11 図１～８）

１・２とも高台の高い碗で、１は腰部に「寿」をデザイン化した文様と圏線を高台・見込みに描く。２の文様は褐色を呈している。３はやや丸碗状を呈し、内外面に文様を描く。高台内に「天下□平」の銘が見られる。４は外面に褐色の略草花文を描く。５は全体的に淡い緑褐色の外反碗である。文様は風景文と雷文を明瞭に巡らす。

６は蓮子形のもので、見込みに法螺貝文を描く。７は小碗で、口縁部を曲げ草花文を縦位に施す。８は腰部にラマ式蓮弁文を配し、見込みに十字文と紋章文を描く。

鉢（第 11 図９）

大振りの鉢の破片で、外面に縦位の草花文を描く。内面に文様が見られるが、全体の構図は判然としない。

皿（第 12 図１～８・第 13 図１）

小・中・大の３種のサイズが見られた。仮に小（第 12 図１・２）中（同図３～６）大（同図７～第 13 図１）と分けた。以下、略述する。

１は直口皿で、文様に波濤文・芭蕉文・草花文等が施される。２は外反皿で、文様は宝相唐草文・太めの圏線を描く。文様や口唇部の作りもやや雑である。

３・４は中皿の底部で、３は高台内を弧状の上げ底に、４は碁笥底のものである。５もやや深みのある中皿で、宝相唐草文と芙蓉手の文様を描くものである。６は畳付けを平坦ぎみに成形した中皿で、見込みに淡い樹鳥図文を描く。

７は深みのある大皿の高台片で、畳付けは内側へ向く。外面に唐草文、内面には文字らしき文様と草花文が見られる。８は７と異なり平坦に開く大皿と思われるもので、仙芝祝寿文が描かれている。外底面には銘が見えるが、判読不明。第 13 図１は前述したものとやや趣が異なる皿で、口縁部をかなり折り曲げた大皿である。その口縁部内側に太め呉須で、抽象的な文様を描き巡らす。外縁にも太めの圏線を巡らす。

杯（第 13 図２～８）

直口杯・小杯・高付き杯等が見られた。２は腰部で折れ曲がる直口杯である。その腰部に如意頭文と圏線、見込みに梅文と圏線を巡らすものである。３～５は外反する小杯で、草花文と圏線が施されている。６は型作りもので、腰部に芭蕉文、高台内には「大明」の銘が見られる。

７・８は高付きの杯で、７はいわゆる「馬上杯」と呼ばれているものである。台状部に淡い圏線を巡らしている。頂部の破損面は全体に滑らかで、破損後に二次使用されたものと思われた。８は低めの

高付きの杯で、外面に圏線を巡らされている。高台内は段状に見られ、台部と器部を別個に作製し、焼成前に接合したことが伺えた。

壺（第 13 図 9 ～12）

９は外側へ大きく外反する壺で、芭蕉文と圏線が見られる。10 は胴下半部で膨らむ器形のもので、内面は無釉のものである。ろくろ痕が顕著に残る。文様は宝相華唐草文と渦巻き文が見られる。釉薬全体は発色が悪く、淡い茶褐色を呈している。二次焼成を受けたか？。11 は長頸のもので、芭蕉文と蛸唐草文が見られる。内面はろくろ痕が残る。12 は濃状に発色した窓文と渦巻文を組み込んだ文様を、胴部全体に施す。胴部には縦位の凹みが見られ全体に房状を呈した長胴形の壺と思われる。

蓋（第 13 図 13）

袋物の蓋で、外面に濃み状の草文？を描くものである。釉薬は外面のみに施し、内面に見られない。胎土は粗粒子である。

蓮華（第 13 図 14）

柄の立ち上がりが急なもので、内面に抽象的な文様（散り蓮華？）を描く。底面の縁周りは露胎である。

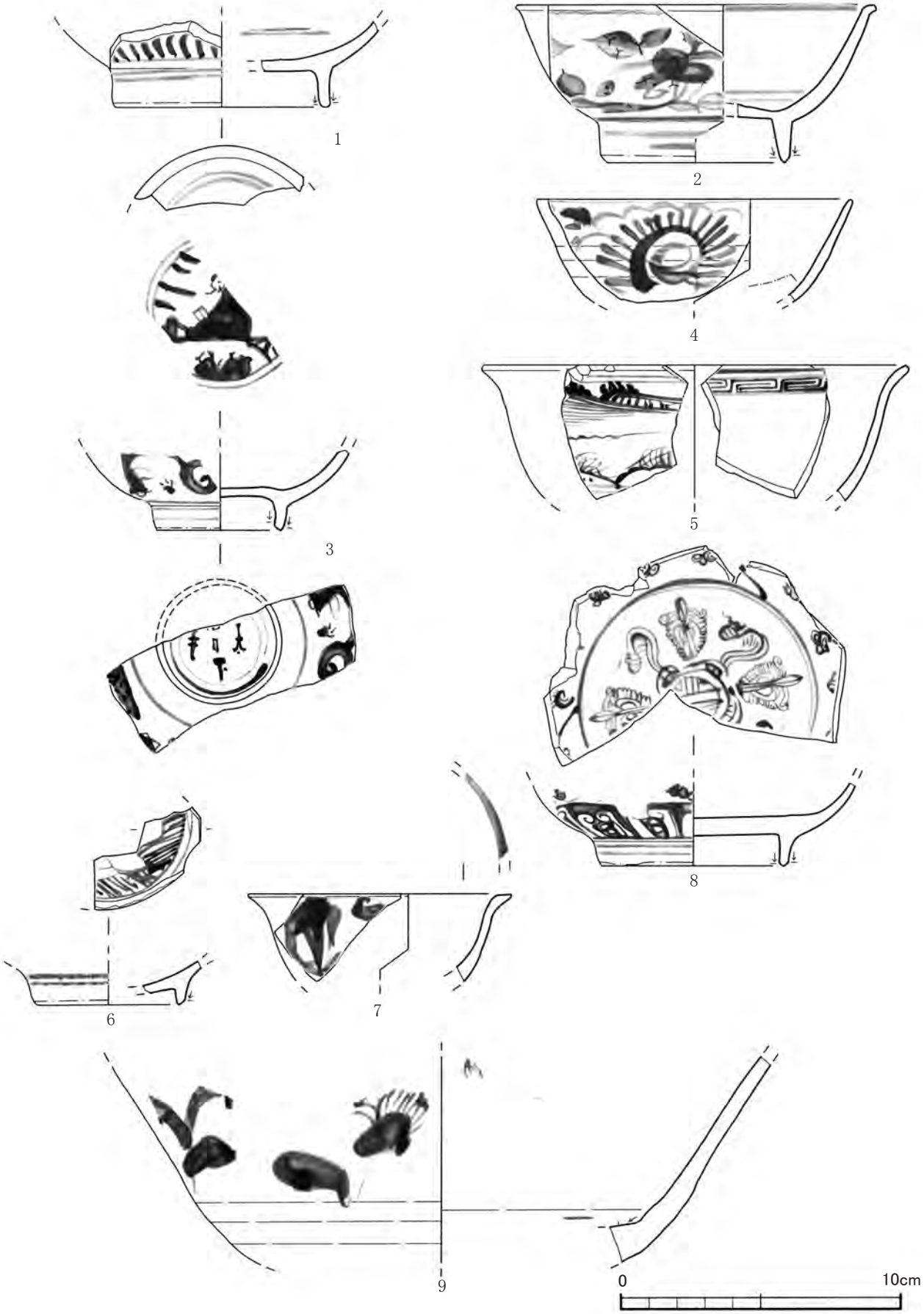
第７表　青花出土一覧

ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層序	遺構	青花																																	合計
			碗					小碗			皿				小皿	杯			小杯			高付杯	鉢	瓶			壺	袋物		蓮華	蓋	不明		
			口縁	胴部	底部	口～胴	口～底	口縁	胴部	底部	口縁	胴部	底部	口～底	底部	口縁	胴部	底部	口縁	底部	口～底	底部	胴部	口縁	胴部	底部	胴部	胴部	底部	胴部	底部	口縁	胴部	
F－6	第2層																																	1	1
	第3層		4	1	5								1																						11
	第4層		52	32	34	1		3	3	1	14	2	15	1	2	10	1	3	2	2		2	2	1	7		3	5	1	1		1	30	231
	第5層		12	9	14			6		1	6		5			3	1	4	2	1		1	1		1	1		2				2	4	76
	下層(第3～5層一括)		4	1	2								1						2	1							1				1		5	18
E―4・5	第1層	試掘坑跡壁面精査時	1																																1
C－5	第1層	攪乱（井戸No１重機埋土）	1								2		1					1										1						6
D－4	第1層	攪乱（井戸No１重機埋土）	2		2								1																					5
D－5	第1層	攪乱（井戸No２重機埋土）	1								1		1								1												1	5
F－5	第1層	シーリ内		2																														2
	第1層	方形枠組み遺構内（シーリ）	2																															2
	第1層	方形枠組み遺構内（シーリ）埋土	2	1	1								1																					5
	第2層	シーリ掘り方	1					1																								1	1	4
	第2層	シーリ周辺	2	1	1																													4
E―5	第2層	シーリ周辺瓦敷き集中部一括									1																							1
E―4	第2層	シーリ周辺石積下２層	1		1													1																3
C－6	第2層	井戸No２裏込め石内			1								1																				1	3
D－5	第2層	井戸No２裏込め石内																	2															2
	第2層	井戸No２半裁時						1																									1	2
E―4	第3層	井戸No１掘り方造成土東西畦除去時					1																											1
D－3	第3層(4層上面)	廃棄遺物遺構	3																															3
C－7	第3層	埋甕遺構内	1		1																													2
	第3層	埋甕遺構遺構内第2層一括						1																									1	2
	第3層	埋甕遺構内第3層一括														1																		1
C－7	第4層	埋甕遺構周辺									1																							1
F－6	第3層	炭・焼土集中遺構サブトレンチ内	1																														1	2
	第3層	炭・焼土集中遺構周辺	2																														3	5
	第3層	炭・焼土集中遺構焼土層		3													1																	4
	第3層	炭・焼土集中部炭集中土層	2																														2	4
	第3層	炭・焼土集中遺構炭集中土層	1		1																													2
	第3層	炭・焼土集中遺構炭層第5層		1												1																		2
D－8	第4層	廃棄遺物遺構一括	7	10							2					1																	1	21
C－7	第4層	遺物集中部	1																															1
C－8	第4層	遺物集中部一括									1																							1
D－6		南北ﾄﾚﾝﾁ　－30cm～岩盤											1																					1
合計			103	61	63	1	1	12	3	2	28	2	28	1	2	16	3	9	8	4	1	3	3	1	8	1	4	8	1	1	1	4	52	435

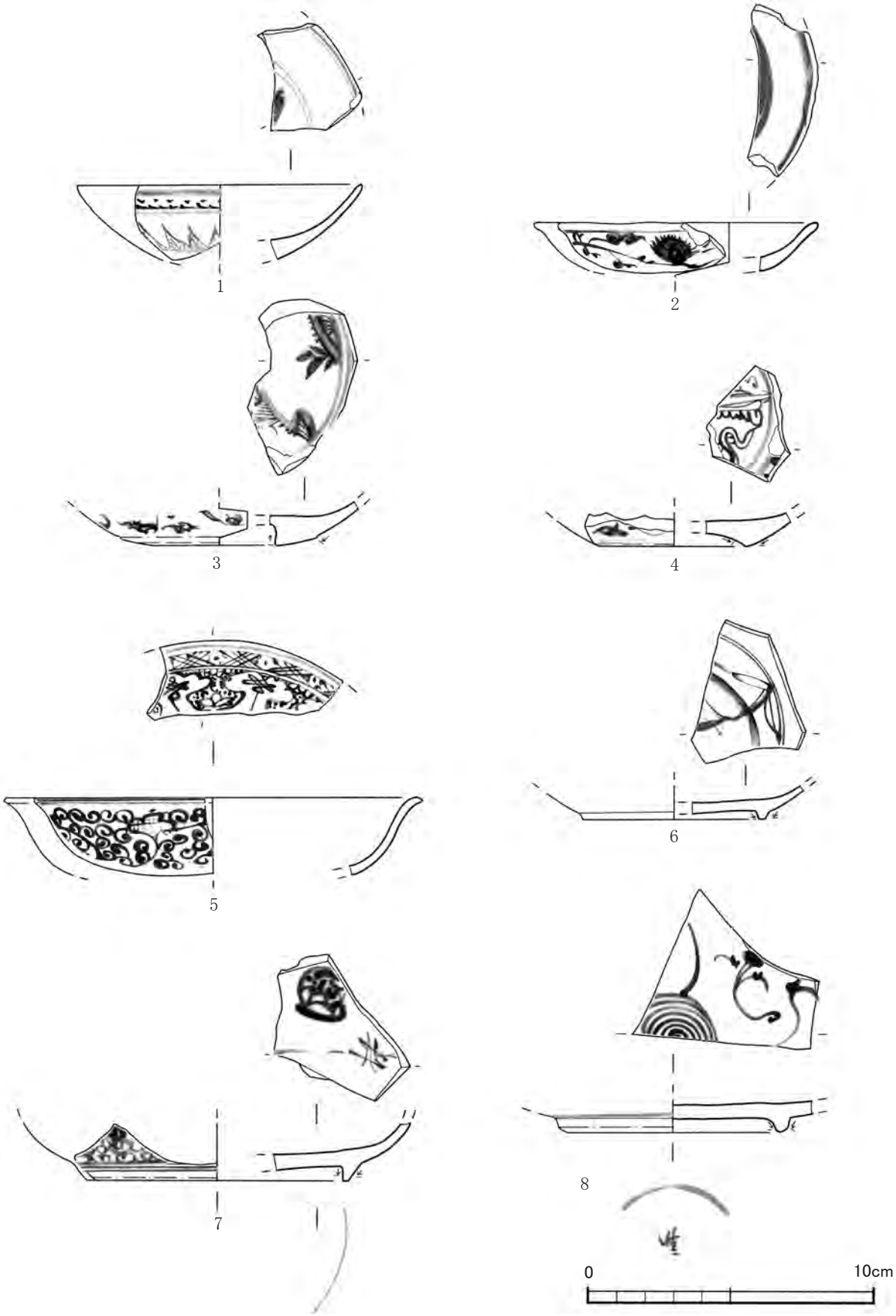
第８表　青花観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	種	口　径 器　高 高台径	素地	施釉	文様　外面 内面 高台内	貫入	出土地点
第11図　1 図版20の 1	外 反 碗		― ― 7.8	灰白色で 微粒子	内外面に施 す。畳付け は露胎。	圏線 略寿字に圏線 圏線	なし	Ｃ―７ 第４層
第11図　2 図版20の２	〃		12.9 5.7 6.8	〃	〃	草花文・圏線 圏線 圏線 梅文	〃	Ｅ―４ 第３層 井戸堀方造成土
第11図　3 図版20の３	碗		― ― 4.5	〃	〃	唐草文？圏線 圏線 圏線と銘	〃	Ｄ―８ 第４層
第11図　4 図版20の４	直 口 碗		11.4 ― ―	〃	内外面に施 す。腰部か ら露胎。	草花文と圏線	なし	Ｅ―５ 第４層
第11図　5 図版20の５	外 反 碗		15.3 ― ―	〃	内外面に施 す。	風景？ 圏線と雷文	あり	Ｃ―８ 第５層
第11図　6 図版20の６	直 口 碗		― ― 5.4	〃	内外面に施 す。畳付け は露胎。	圏線 法螺貝文	あり	Ｄ―６ 第５層
第11図　7 図版20の７	口 折 碗		9.5 ― ―	〃	内外面に施 す。	草花文？ 圏腺	〃	Ｄ―３ 第５層
第11図　8 図版20の８	不 明		― ― 6.6	〃	内外面に施 す。畳付け は露胎。	十字花文 圏線 ラマ式蓮弁文 圏線	〃	遺物集中部 一括
第11図　9 図版20の９	鉢		― ― ―	黄白色の 淡粉粒子	内外面に施 す。腰部か ら露胎。	草花文	〃	Ｄ―６の４・５ Ｅ―６の第５層
第12図　1 図版21の１	皿		10 ― ―	灰白色で 微粒子	内外面に 施す。	波濤文 蕉葉文 圏線 不明	なし	Ｃ―８ 第４層
第12図　2 図版21の２	〃		10 ― ―	灰白色で微 粒子	内外面に 施す。	宝相唐草文 圏線	〃	Ｃ―５ 攪乱 第１号井戸
第12図　3 図版21の３	〃		― ― 5.1	〃	〃 畳付は露胎	十字花文 圏線	あり	Ｃ―６ 第４層
第12図　4 図版21の４	〃		― ― 5	〃	〃 外底面は施 釉。	宝相唐草文 梅文？	なし	Ｃ―８ 第５層
第12図　5 図版21の５	〃		14.7 ― ―	〃	内外面に 施す。	花唐草文 圏線 袈裟文帯 芙蓉手文	〃	Ｄ―８ 第５層
第12図　6 図版21の６	〃		― ― 6.4	〃	内外面に 施す。 畳付は露胎	樹鳥図文	〃	Ｄ―５ 第４層
第12図　7 図版21の７	〃		― ― 9.2	〃	〃	文字？ 唐草文	〃	Ｄ―５ 第５層

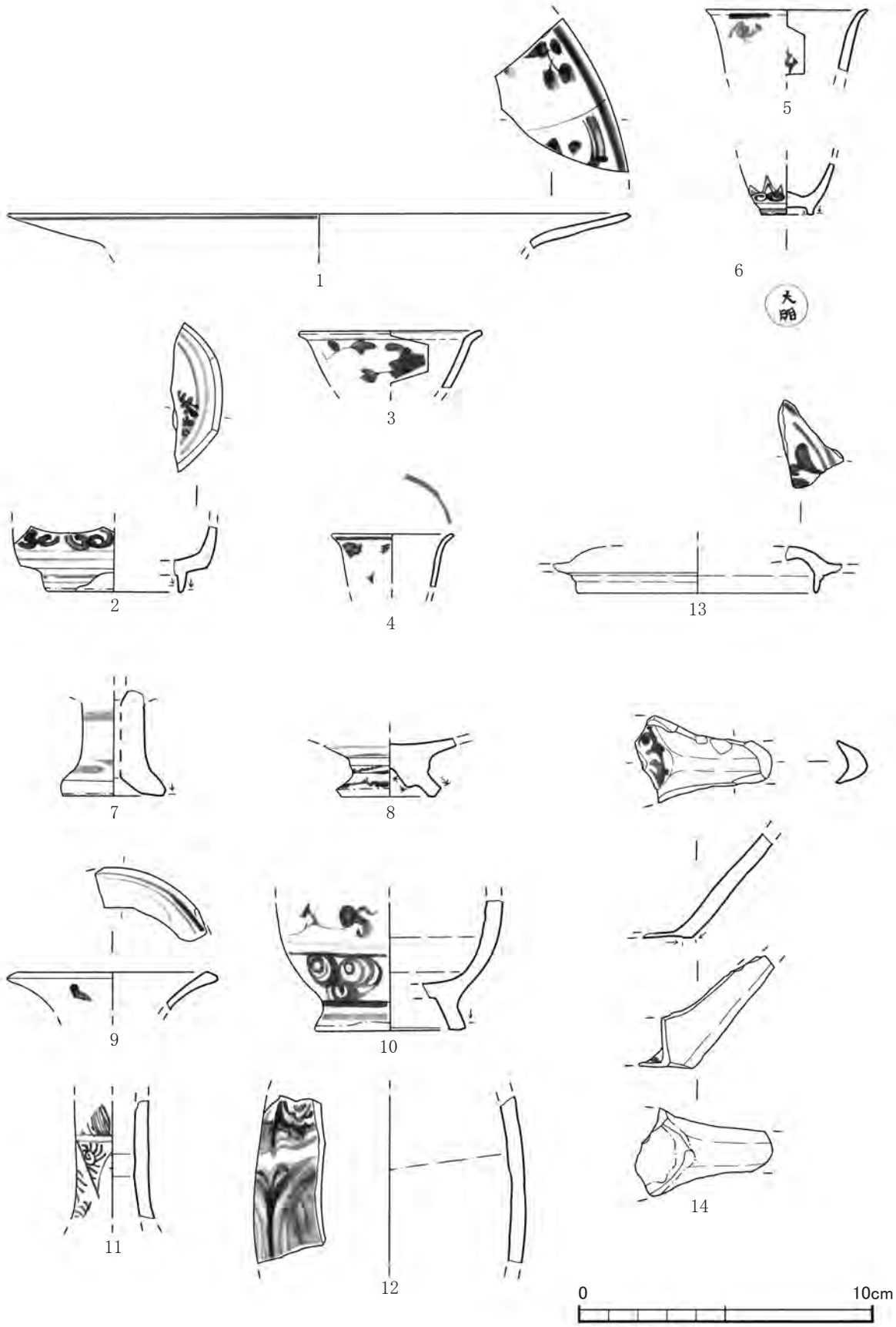
第12図　8 図版21の８	〃		― ― 8	〃	〃	仙芝祝寿文 渦巻文 銘あり	〃	Ｄ―４ 第１号井戸埋土 攪乱
第12図　1 図版21の１	〃		21.4 ― ―	〃	不明	圏線 抽象文	〃	Ｄ―３ 第５層
第12図　2 図版21の２	直口杯		― ― 4.6	〃	内外面に 施す。 畳付は露胎	如意頭文 圏線	〃	Ｄ―６ 第４層
第12図　3 図版21の３	小杯		6.3 ― ―	〃	内外面に 施す。	草花文 圏線	〃	Ｄ―５ 第４層
第12図　4 図版21の４	〃		4.2 ― ―	〃	〃	草花文？ 圏線	〃	Ｄ―６ 第５層
第12図　5 図版21の５	〃		5.6 ― ―	〃	〃	圏線 抽象文	あり	Ｄ―５ 第５層
第12図　6 図版21の６	〃		― ― 1.8	〃	内外面に 施す。 畳付は露胎	圏線 芭蕉文 銘あり	なし	Ｅ―７ 第４層
第12図　7 図版21の７	高付杯		― ― 3.4	〃	外面に施す。 底面と孔部 は露胎。	圏線 不明	なし	Ｄ―５ 第４層
第12図　8 図版21の８	〃		― ― 3.5	白色の 微粒子	外面と孔部 に施す。 底面は露胎。	〃	〃	Ｅ―７ 第４層
第12図　9 図版21の９	壺		7.2 ― ―	灰白色の 微粒子	内外面に施 す。	圏線 抽象文	〃	Ｄ―４ 第４層
第12図　10 図版21の10	〃		― ― 5.2	〃	外面に施す。 内面・高台 内は露胎。	宝相華唐草文 圏線 渦巻文	あり	Ｃ―７ 第５層
第12図　11 図版21の11	〃		― ― ―	白色の 微粒子	内外面に施 す。	芭蕉文 圏線 蛸唐草文	なし	Ｄ―７ 第４層
第12図　12 図版21の12	〃		― ― ―	〃	内外面に 施すが、内 面下部は露 胎。	圏線	〃	Ｄ―６ 第５層
第12図　13 図版21の13	袋物蓋		― ― 8.2	〃	外面に施す 内面は露胎	外面に草文	〃	Ｄ―５ 下層 東西トレンチ
第12図　14 図版21の14	蓮華		― ― 6.4	〃	内外面に 施す。 畳付は露胎	ちり蓮華？	〃	Ｄ―４ 第４層



第 11 図 (図版 20)　青花①：碗 (1 ～ 8)、鉢 (9)



第 12 図（図版 21 ）　青花②：皿



第 13 図 (図版 22)　青花③：皿 (1)、杯 (2 ～ 8)、壺 (9 ～ 12)、蓋 (13)、蓮華 (14)

４．青磁青花・色絵・翡翠釉・瑠璃釉・三彩

器種としては、碗・皿・水滴？などが得られた。個々の観察や出土量は第９・10 表に示した。以下、個別に略述する。

第 14 図１は青磁青花で、全形を知り得る外反碗である。見込みに太極文、内面に八卦文を巡らす。外底面に文字が４字見られるが、判読不明。

同図２は色絵の大振りの碗で、見込みに圏線と雲文？を描くものである。色絵自体が剥落しており、色調や全体の構図は不明。

同図３は外面を瑠璃釉、内面を白釉の掛け分けた外反の碗である。同図４は翡翠釉の皿で、二次焼成を受けたものと思われ、釉薬の発色が悪く鈍い色調を呈している。断面も同様である。外側の釉薬は加熱を直接受けたものと思われ、やや鮫肌状に縮まる。重ね焼きのためか、畳付けには白化粧土が見られる。

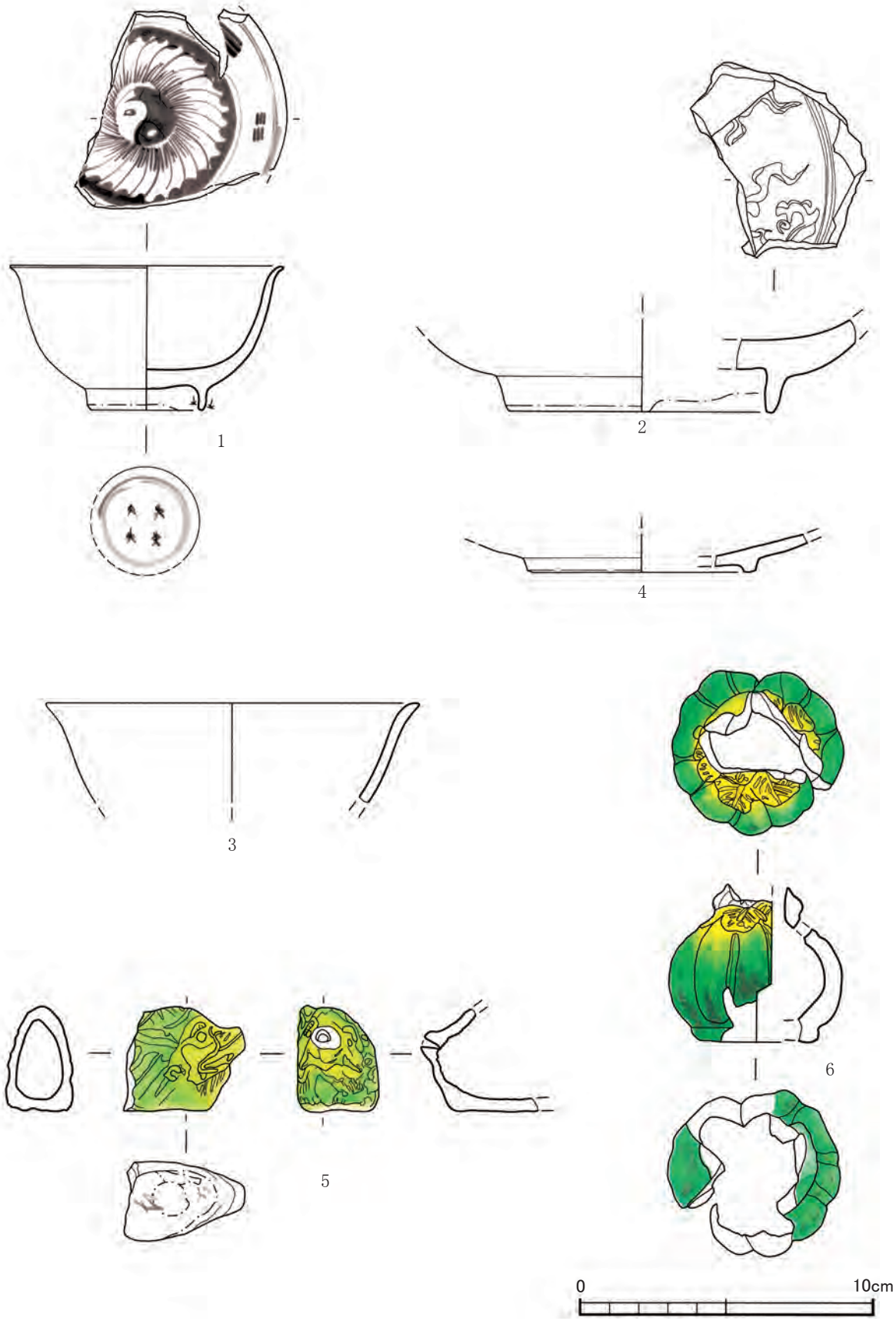
同図５・６に示したものは、三彩の水滴？で２点とも型づくりものである。外面に釉薬、内面は無釉である。内面には指頭痕が顕著に観察される。５は猪？をイメージしたものか判然としないが、口蓋に牙らしきものが観察される。口部に僅かに孔が見られる。獣面の部分に黄褐色、周辺は淡い緑色を配する。底面は露胎で、墨書？らしきものが見られる。６は、植物の果実をイメージしたもので、葉の黄褐色、房の部を淡い緑色を塗布したものである。

第９表　青磁青花・色絵・瑠璃釉・翡翠釉・三彩観察一覧

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	器種	口径 器高 高台径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	その他	出土地点
第14図　1 図版23の１	青磁青花	碗	9.3 5 3.8	灰白色で微粒子	内外面に施す。畳付は露胎。	太極文と八卦文 外底面に銘あり	淡緑色	なし		D－８ 第４層 第３号遺物廃棄遺構
第14図　2 図版23の２	色絵	〃	－ － 9	〃	〃 畳付、縁部は露胎。	見込みに圏線と雲文？	白色	なし	畳付に砂粒が観察される。	D－４ 第５層
第14図　3 図版23の３	瑠璃釉	〃	12.8 － －	〃	内外面に施す。	不明	瑠璃と白	なし		D－６ 第４層
第14図　4 図版23の４	翡翠釉	皿	－ － 8	灰褐色（二次焼成？）粗粒子	〃 畳付は露胎	〃	翡翠釉	なし	二次焼成で釉が劣化	C－８ 第５層
第14図　5 図版23の５	三彩	水滴？	－ － －	黄白色で粗粒子	外面に施す。底面は露胎	動物をイメージした型物	黄緑	なし	底面に墨書？	D－４ 第４層
第14図　6 図版23の６	〃	〃	－ － 4.3	〃	〃	植物をイメージした型物	〃	〃		D－６第４層 D－５・６ 第５層

第 10 表　青磁青花・色絵・瑠璃釉・翡翠釉・三彩等出土一覧

ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層序	遺構	Dot No	青磁青花			褐釉染付		色絵				三彩陶器					外国産瑠璃釉		外国産翡翠釉	タイ産鉄絵			タイ産半練土器		外国産不明									合計
				碗	小碗	不明	小杯		碗	杯	不明		皿	合子	鳥型	水滴		碗	不明	皿	袋物	蓋				皿	小皿	瓶		壺		合子	不明		
				口縁	口～底	胴部	口縁	底部	底部	口縁	胴部	底部	口縁	口縁	胴部	口～底	胴～底	口縁	胴部	底部	胴部	胴部	底部	つまみ	胴部	口縁	底部	口縁	底部	胴部	底部	口縁	口縁	胴部	
F－6	第2層					1																													1
	第4層					1	1	1		1	1	1	1			1	1	1	1		1								1	2	2	1	1	2	21
	第5層					1	1		1						2		2			1		1	1		1		1	1							13
D－5	下層（第3～5層一括）	東西ﾄﾚﾝﾁ																								1									1
C－5	第1層	攪乱（井戸No1重機埋土）												1												1									2
D－5	第1層	攪乱（井戸No2重機埋土）													1																				1
F－5	第2層	シーリ周辺					1																												1
C－7	第3層	埋甕遺構遺構内第 2層一括																						1											1
	第4層	埋甕遺構 甕No2南側																											1						1
D－8	第4層	廃棄遺物遺構一括			1																														1
	第4層	廃棄遺物遺構一括		1																															1
	第4層	廃棄遺物	3		1																														1
合計				1	2	3	3	1	1	1	1	1	1	1	3	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	2	2	1	1	2	45



第 14 図 (図版 23)　青磁青花 (1)、色絵 (2)、瑠璃釉 (3)、翡翠釉 (4)、三彩 (5・6)

５．褐釉陶器

器種としては、壺類が殆どで、鉢・水注などが僅かに見られた（第 11 表）。個々の観察は第 12 表に示した。以下、器種別に略述する。

壺（第 15 図１～５）

１は肩の張る肩部より頸部を立ち上げる薄手の壺である。口縁部はやや三角状に成形し、暗茶褐色の釉薬を薄く塗布する。口唇部は露胎である。２は口縁部を厚く成形するもので、器表面に淡い茶褐色釉を施す。釉薬は手触りがザラつき、縁部の縁は部分的に剥落が見られる。３～５は平底のもので、３は薄手の壺、底面よりやや膨らみ立ち上がるものである。底面には砂粒・繊維痕？の付着が見られる。４も部分的に薄く褐釉が施されている。底面にはススが残る。５は立ち上がりに釉垂れが見られるもので、内外面にろくろ痕が見られる。外面は凹凸が顕著である。

鉢（第 15 図６・７）

６は内湾器形のもので、内外面の釉薬が施されている。特に、口縁部には濃い暗褐色の釉薬を帯状に巡らす。かなり使用されたものと思われ、器表面には手慣れ（？）と思われる光沢が見られる。７は台状の底部を持つ擂り鉢で、７本１組の櫛目が観察される。

水注（第 15 図８）

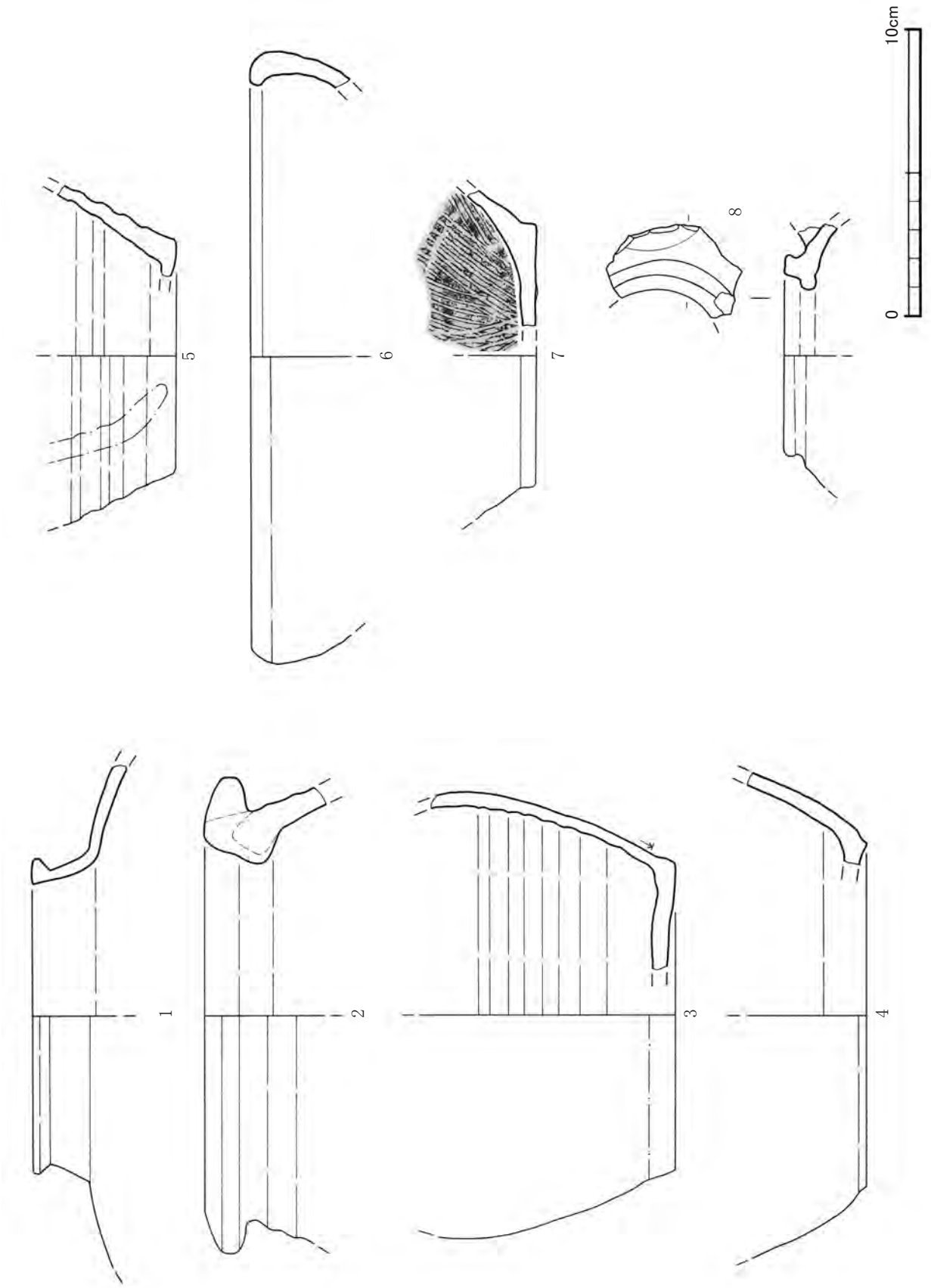
蓋受け部から肩部にかけて、薄く施釉されたものである。肩部に破損痕が見られるが、「取手」「注ぎ口」部分なのか判然としない。

第 11 表　褐釉陶器出土一覧

ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層序	遺構	褐釉														合計
			壺					小壺	壺（急須）	水注	鉢	すり鉢		碗	不明		
			口縁	胴部	底部	耳	完	底部	口縁	口縁	口縁	胴部	底部	胴部	胴部	底部	
F－6	第3層			2													2
	第4層		8	212	4	1				1	1		1	1	2	1	232
	第5層		23	218	5			1	1	1		1					250
	下層（第3～5層一括）		1	33	2												36
D－4	第1層	重機掘削面精査		1													1
C－5	第1層	攪乱（井戸No1重機埋土）		10	3												13
D－4	第1層	攪乱（井戸No1重機埋土）		8													8
D－5	第1層	攪乱（井戸No2重機埋土）		5													5
C－6	第2層	井戸No2裏込め石内		2													2
D－6	第2層	石列脇ﾄﾚﾝﾁ井戸No2掘り方		1													1
D－5	第2層	井戸No1掘方造成土（明褐色土）	1														1
E—4	第3層	井戸No1掘り方造成土東西畦除去時			1												1
F－5	第2層	シーリ周辺	1		1												2
F－6	第3層	炭・焼土集中遺構サブトレンチ内		1													1
	第3層	炭・焼土集中部遺構内焼土層（第1層）		1													1
D－3	第3層（第4層上面）	廃棄遺物遺構		1													1
C－7	第3層	埋甕掘削時	1	1													2
	第3層	埋甕遺構甕No1本体					1										1
	第3層	埋甕遺構甕No2本体					1										1
	第4層	埋甕遺構周辺		3	1												4
C－7	第4層	遺物集中部		6													6
	第4層	遺物集中部一括		2													2
D－8	第4層	廃棄遺物遺構一括		3	1												4
D－6	第3・4層	南北ﾄﾚﾝﾁ　－30cm～岩盤		2													2
D－8	第5層	埋甕周辺		2													2
E—8		東西ﾄﾚﾝﾁ褐色粘質土（－20cm以下）		1													1
合計			35	515	18	1	2	1	1	2	1	1	1	1	2	1	582

第 12 表　褐釉陶器観察一覧

挿図番号 図版番号	名称 又は 仮称	器種	口　径 器　高 高台径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	その他	出土地点
第15図　1 図版24の１	中国産	短頸壺	11 － －	淡紫褐色で粗粒子	内外面に施す。口唇部は露胎。	なし	暗茶褐色	なし	砂粒子散見	Ｆ－５ 第２層
第15図　2 図版24の２	〃	壺	16.6	灰褐色で粗粒子	内外面に施す。	〃	淡飴色	なし	茶褐色の粒子	Ｄ－８ 第５層
第15図　3 図版24の３	〃	壺の底部	－ － 10.8	茶褐色で粗粒子	内外面に施すが、底部脇から露胎	不明	茶褐色	〃	石英・赤・砂粒子が散見	Ｆ－５ 第２層
第15図　4 図版24の４	〃	〃	－ － 12	橙褐色 粗粒子	外面に薄く帯状に見られる。底面は露胎。	不明	暗茶褐色	〃	底面にススが付着	Ｄ－５ 第５層
第15図　5 図版24の５	〃	〃	－ － 8.2	淡橙褐色 粗粒子	外面に釉垂れが見られる。	〃	茶褐色	なし	砂粒子が散見	Ｃ－５ 攪乱 第１号井戸
第15図　6 図版24の６	〃	鉢	20.4 － －	淡灰褐色 粗粒子	内外面に施す。	〃	暗茶褐色	〃		Ｄ－８ 第４層
第15図　7 図版24の７	〃	擂鉢	－ － 9.2	淡紫褐色で粗粒子	不明	〃	不明	不明		〃
第15図　8 図版24の８	〃	水注	7 － －	暗茶褐色で粗粒子		〃	〃	なし		第５層(Ｄ－５)



第 15 図 (図版 24)　褐釉陶器：壺 (1 ～ 5)、鉢 (6・7)、水注 (8)

６．タイ産陶器・産地不明

タイ産は褐釉陶器・土器・合子の蓋などが得られた。産地不明としたものは、中国産・ベトナム産等よく解らないものを一括した。個々の出土量や観察は第２・13 表に示した。以下、に略述する。

タイ産大型壺（第 16 図１・２）

Ｃ－７埋甕遺構として検出された四耳壺である。１が埋甕№.１、２が埋甕№.２のものである。１・２とも器形や釉薬等の保存状態が良く、タイ産の特徴を良く残している。以下、それぞれを略述する。

１は口縁部を大きく外側へ外反させ、肩の張るもので、口径 21.6 ㎝、器高 58.8 ㎝、底径 24.0 ㎝を測る。淡い褐釉を概ね頸部、胴下半部以外に施したものである。内面も胴下半部には見られない。底面は平底で細かい凹凸が見られる。凹線を大きく外反する口唇部と肩部に巡らす。頸部と肩部の境目にも微弱な凸帯を巡らす。胎土は淡い桃褐色の粗粒子で、混入物に赤・茶・白等の粒子が散見できる。細かい貫入も見られる。

２も口縁部を外反させるが、撫で肩の器形のものである。サイズは口径 21.4 ㎝、器高 62.8 ㎝、底径 26.2 ㎝を測る。釉薬は黒褐色の褐釉を１と同様に施している。凹線を口唇部に施すが、１よりは内側に施されている。肩部の凹線は二条、頸部と肩部には凸帯巡らす。胎土などの諸特徴は１にほぼ同じ。両者を比べると１・２とも口径はほぼ同じであるが、２が器高・底径が大きく、どっしりとしたものである。２点ともメナムノイ窯産と思われる。

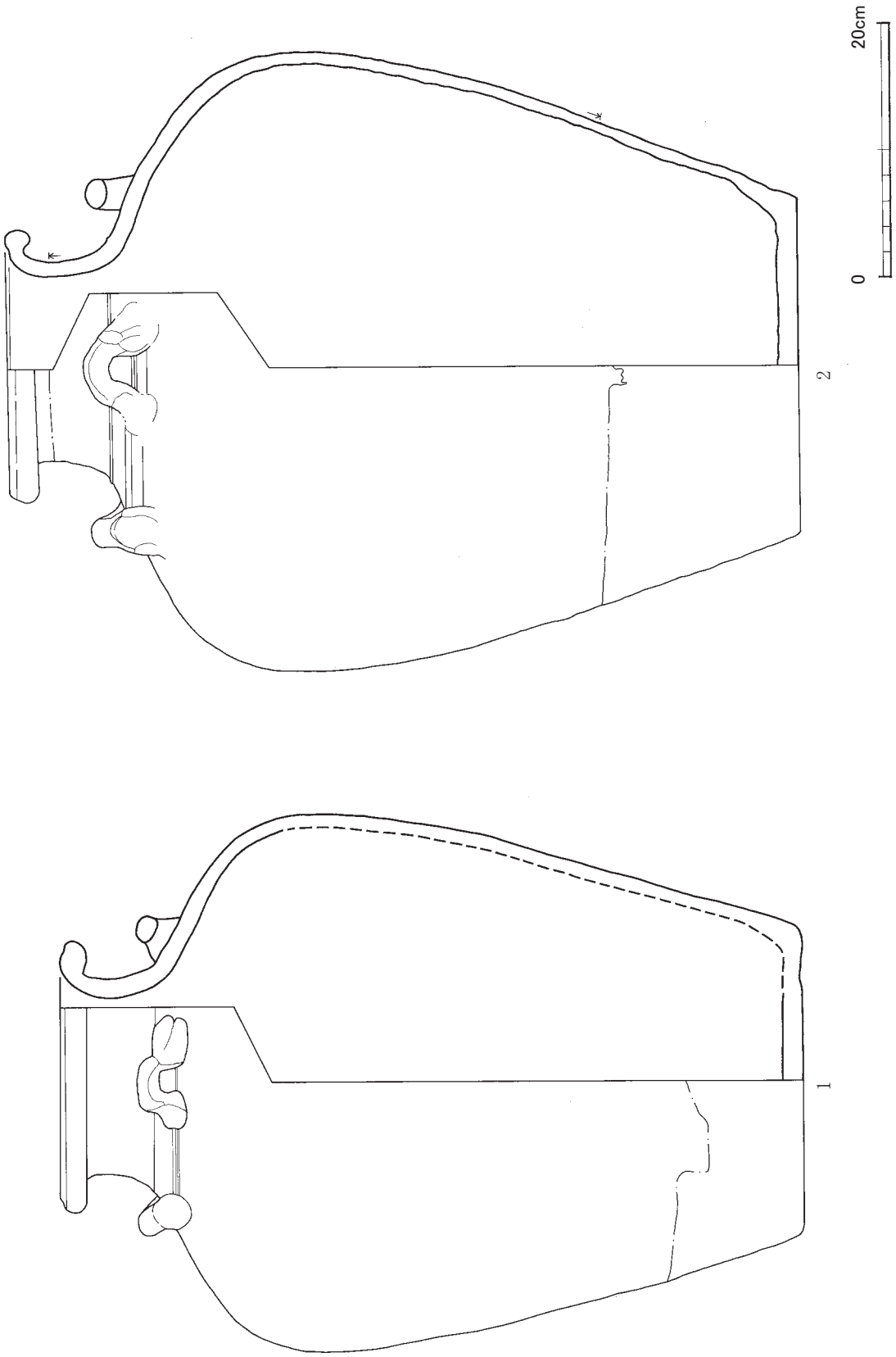
タイ産陶器（第 17 図１～７）

１・２は半練土器の蓋と体部の破片である。１はやや大振りの蓋と思われ、つまみ径 2.7 ㎝を測る。色調は全体に淡い橙褐色を呈するが、一部灰褐色である。２は体部の肩部片で、外面にギザギザの叩き痕が観察される。３は合子の蓋で、鉄釉によって格子文・直線文などが描かれている。蓋受け部から内面は露胎。４も合子の蓋と思われるもので、外面に二次焼成を受け釉薬が一部、灰褐色に変色し劣化が見られる。５は外面を褐釉、内面を白釉の掛分けた合子の底部である。底部はハの字状に開く。６は外反の著しい壺である。７も壺の底部で、やや失透ぎみの黒釉を厚く施されている。高台の内外面は厚く成形され安定感がある。また、内面にはろくろ痕、外底面に窯道具の痕が顕著に観察される。

産地不明（第 17 図８～11）

９は口縁部外面に綾を作りだす小皿で、内面に草文？が見られる。10 は筒形のもので、胴部に縦位に三条の凹線文が施されている。釉薬は蓋受け部のみ露胎にし、全体に施されている、釉薬自体は未発色で乳白色を呈している。

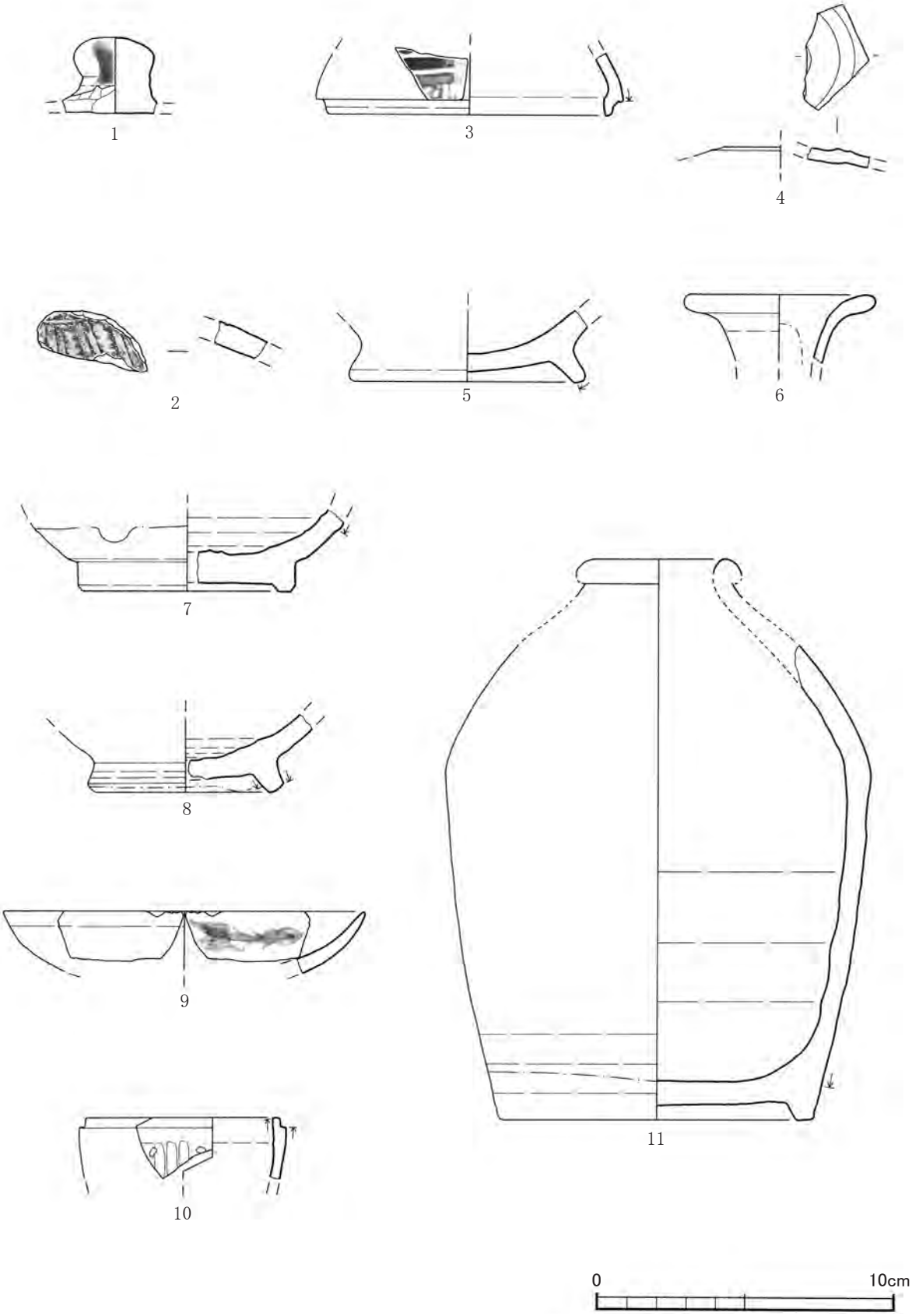
11 は全形を知り得る光沢のある茶褐釉を施した高台を持つ壺である。口縁部を玉縁状に成形し、そこから肩部を作り胴上部で最大径を持ち、緩やかに高台へ至る。赤褐色の胎土には、黒褐色の粒子が顕著に観察される。



第 16 図（図版 25） タイ産褐釉（埋甕遺構） 大型壺

第 13 表　タイ産陶器・産地不明観察一覧

挿図番号 図版番号	名称又は仮称	器種	口　径 器　高 高台径	素地	施釉	文様	釉色	貫入	その他	出土地点
第17図　1 図版26の１	タイ産	壺の蓋	― ― ―	淡桃褐色で粗粒子	なし	なし	淡灰色	なし	灰・茶褐色の粒子が散見	Ｃ－７第３号埋甕遺構内第２層一括
第17図　2 図版26の２	〃	壺の体部	― ― ―	内外は桃褐色 芯部は灰褐色 粗粒子	〃	〃	桃褐色	なし	〃	Ｃ－８ 第５層
第17図　3 図版26の３	〃	合子	9.4 ― ―	灰褐色で粗粒子	外面のみに施す。	格子文 圏線	淡白色	あり	黒い粒子が散見	Ｆ－６ 第５層
第17図　4 図版26の４	〃	〃の蓋？	― ― ―	〃	〃	不明	翡翠色	なし	〃	Ｅ－７ 第５層
第17図　5 図版26の５	〃	合子底部	― ― 8	〃	内外面に施す。畳付けまで及ぶ。	〃	茶褐色	なし	黒粒子が顕著	Ｄ－７ 第３号埋甕遺構（埋甕No.2）南側
第17図　6 図版26の６	〃	壺	6.4 ― ―	〃	口内から外面に施す。	〃	〃	〃	黒い粒子が散見	Ｃ－６ 第５層
第17図　7 図版26の７	〃	壺の底部	― ― 7.4	〃	高台脇まで。	〃	黒色	なし	〃	Ｄ－６ 第４層
第17図　8 図版26の８	産地不明	壺	― ― 6.6		外面に施す。底面は露胎。		黄緑	なし		Ｅ－６ 第４層
第17図　9 図版26の９	〃	皿	12.3 ― ―	灰褐色で粗粒子	内外面に施す。	内面に草文？	透明色	なし		Ｄ－５ 下層
第17図　10 図版26の10	〃	筒形	6.6 ― ―	淡い灰褐色 粗粒子	蓋受け部～内面は露胎。	凹線文	白色	〃		Ｃ－７ 第４層
第17図　11 図版26の11	〃	壺	4.4 19 10.7	桃白色で粗粒子	外面に施す。高台脇から露胎。	不明	茶褐色	なし	黒の粒子が散見	Ｃ－８ Ｄ－８ 第４層



第 17 図 (図版 26) タイ産陶器：蓋 (1)、壺 (2・6・7)、合子 (3 ～ 5)
産 地 不 明：壺 (8)、皿 (9)、筒形 (10)、壺 (11)

第２節　本土産陶磁器

本土産陶磁器は、合計 314 点を数えた。大別では、磁器 237 点、陶器 77 点（施釉 60 点、無釉 17 点）である。

器種としては、碗・小碗・皿・杯・小杯・瓶・急須・湯呑・香炉・灯明具・蓋・碍子（以上、磁器）、碗・小碗・皿・杯・壺・鍋・鉢・大鉢・擂鉢・火取（以上、施釉）、擂鉢・急須（以上、無釉）が確認された。

ここでは、主に第４・５層出土資料、遺構内出土資料、その他特徴的な資料の中から蓋・急須・壺・碗・火取・鉢・擂鉢を第 18・19 図に図示し、第 14 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

蓋（第 18 図１）

第 18 図１は、磁器製の蓋となる資料である。表面に「一味亭」の文字が見られる。同様な資料は、他にも数点が出土している。なお、本標品に付随すると考えられる身は、確認できていない。Ｄ－８グリッドにおいて、調査前に表採。

急須（第 18 図２・３）

胴図２は、口縁部が平坦で短い陶器製の急須。Ｅ－５グリッド第５層出土。胴図３は、取っ手が付く陶器製の急須。Ｃ－７グリッド第３号埋甕遺構（埋甕№.２埋土）出土。

壺（第 18 図４）

同図４は、口縁部が方形となる薩摩系の陶器製の壺である。第２号井戸の裏込め土から一括して出土した（図版７　３段目左）。

碗（第 19 図１・２）

第 19 図１は、口縁部が直口する磁器製の碗である。笹、草花文が呉須によって描かれる。Ｄ－８グリッド第３号遺物廃棄遺構（№.71）出土。２は、口縁部が外反する磁器製の碗である。文様構成は判然としない。E-5 グリッド第４層出土。

香炉（第 19 図３）

同図３は、口縁部は玉縁となる陶器製の香炉である。Ｅ－６グリッド第５層出土。

鉢（第 19 図４）

同図４は、陶器製の鉢である。口縁は外反し鍔状となる。褐色を呈する素地に白土を刷毛状の工具で装飾する。Ｅ－７グリッド第４層出土。

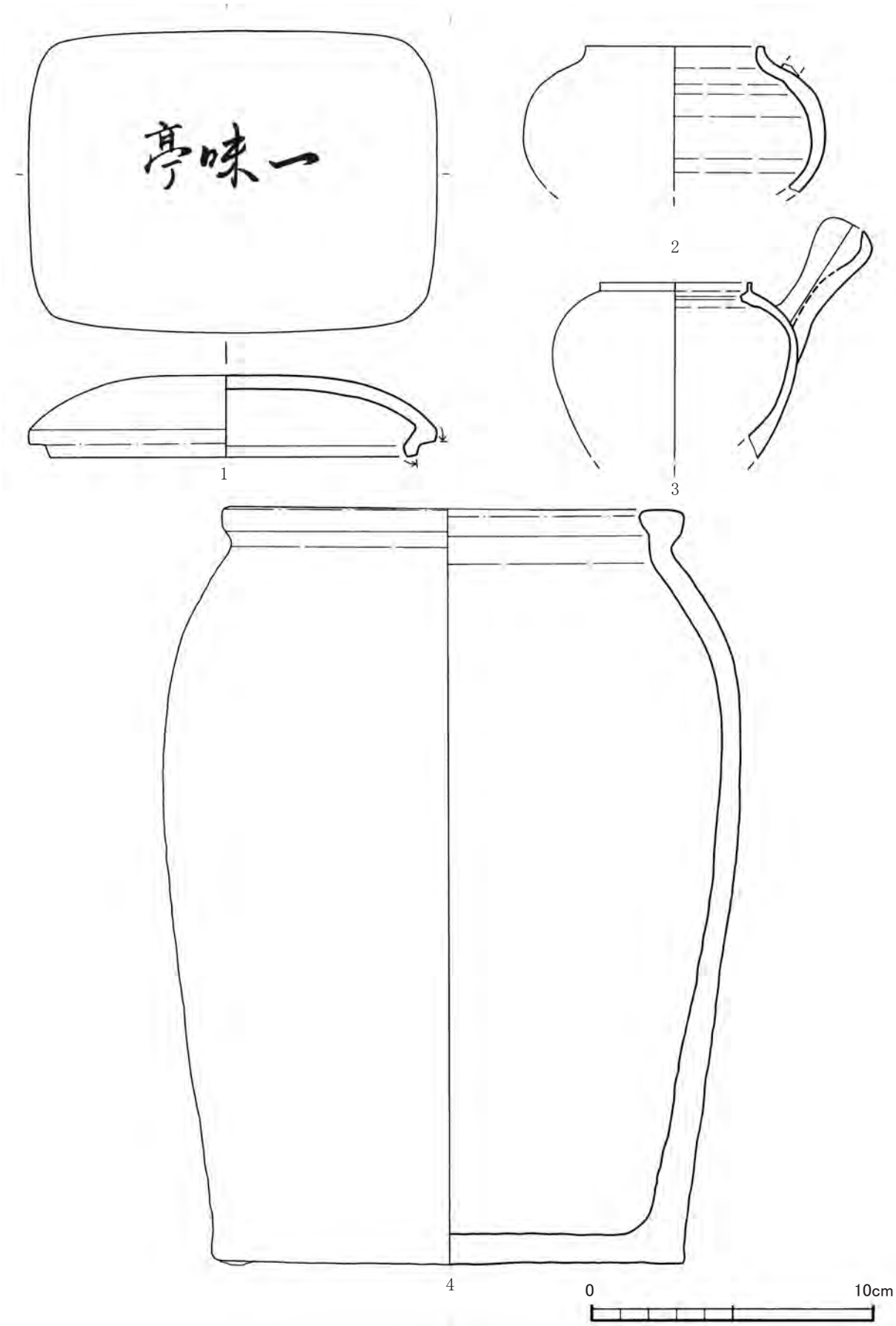
擂鉢（第 19 図５）

胴図５は、陶器製の擂鉢である。口縁部は、内湾し肥厚部を作る。Ｅ－７グリッド第５層出土。

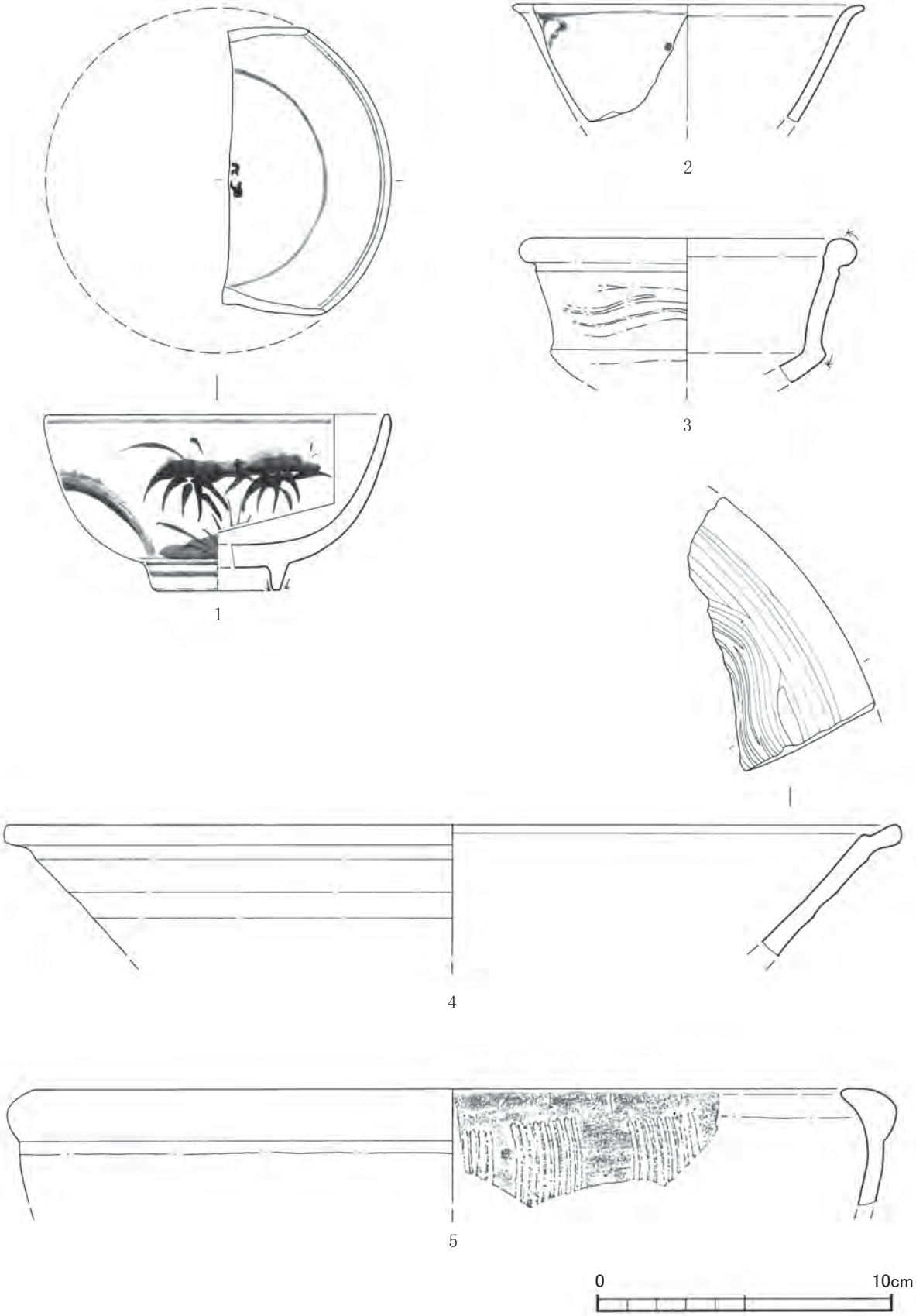
第 14 表　本土産陶磁器観察一覧

法量単位：cm

挿図番号	種類	器種	口径 器高 底径	色調	文様・特徴など	出土地点
第18図　1	磁器	蓋	横幅：14.6 縦幅：10.7 器高：2.9	外面：青緑色 内面：灰白色	隅に丸みのある長方形の蓋である。 内面の身にかかる部分は露胎になる。 外面に赤錆色で「一味亭」の文字が書かれる。	D-8 調査前表採
第18図　2	陶器	急須	6.4 — —	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	内外面ともに、無釉の急須である。 口縁は立上がり、頸部は短く、口唇は平坦。 胴部のほぼ中央に最大胴径（10.8cm）を測る。 内外面に成形時のﾛｸﾛ痕、調整痕が明瞭に見られる。	E-5　第5層
第18図　3	陶器	急須	5.4 — —	外面：赤褐色 内面：赤褐色	内外面共に、無釉の急須である。 残存の取っ手は先端は丸く、約1.0cmの孔を穿つ。 取っ手、内外面に煤跡が見られる。	C-7 第3号埋甕遺構 埋甕№2 埋土
第18図　4	陶器	壺	16.5 27.1 16.8	外面：暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色 内面：灰色	口縁は、内側に張り出す方形である。 口縁から頸部にくびれ、肩が弱く張り、そのままほぼｽﾄﾚｰﾄに底部に至る器形。 口縁上面と外底面以外は、施釉。 内面に、成形跡が明瞭に見られる。 素地は黒褐色で白色粒を多量に含む。	D-5、C-5 第2号井戸 周辺裏込石内
第19図　1	磁器	碗	11.8 6.0 4.4	外面：灰白色 内面：灰白色	口縁はほぼ直口で、口唇は丸みを持つ。 外面胴部には、呉須による笹、草文様が見られる。口縁と腰部に1本づつ、高台に2本の圏線を廻らす。 内面も呉須による圏線が口縁に2本、腰部に1本廻る。内底面にも文様が見られるが、図柄は不明。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №71
第19図　2	磁器	碗	11.8 — —	外面：灰白色 内面：灰白色	口縁は外反し内面に稜が明瞭、口唇は丸みを持つ。 外面胴部には、呉須による文様と口縁に圏線が1本廻る。 素地は灰白色で、黒色の微粒子を含む。	E-5　第4層
第19図　3	陶器	香炉	11.6 — —	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	口縁部は玉縁で、腰部は「く」の字に折れる。 口縁は玉縁部分を黒褐色釉で塗られる。 胴部も黒褐色釉を施し、その後刷毛状の施具により波状に釉を剥ぎ取り、文様を施す。	E-6　第5層 南北トレンチ
第19図　4	陶器	鉢	30.6 — —	外面：にぶい赤褐色 内面：淡黄色	口縁は外反し、内側に段を作る。口唇は丸みを持つ。 外面上部から内面にかけて、赤褐色の釉が施され、外面下部は無釉。 内面には、褐色釉の上に淡黄色の釉をかけてそれを、刷毛状施具により、剥ぎ取り、上部には2本の圏線、下部に波状文を描く。	E-7　第4層
第19図　5	陶器	擂鉢	30.4 — —	外面：にぶい赤橙色 内面：淡赤橙色	口縁は内湾し、口唇は舌状。口縁部外側に肥厚する。 口縁部のみ褐色釉を施される。 内面に、9本一組の櫛目が見られる。	E-7　第5層



第 18 図　本土産陶磁器①



第 19 図　本土産陶磁器②

第３節　沖縄産陶器

１．施釉陶器

沖縄産施釉陶器は、518 点を数えた。器種としては、碗・小碗・皿・杯・鉢・小鉢・大鉢・壺・小壺・瓶・鍋・急須・燭台・香炉・火炉・火取・蓋・取手・その他が確認できた。

ここでは、主に遺構内（第３号遺物廃棄遺構：D－８グリッド：第４層、第２号井戸：C・D－５グリッド：第１・２層）出土資料及び第４層出土資料の中から碗・皿・壺・急須・瓶を第 20 図に図示し、第 15 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

碗（第 20 図１～５）

第 20 図１～３は、灰釉を施す資料である。１は、口縁部がやや外反、２・３は直行するタイプである。同図４は、高台脇から体部にかけて丸みを帯びて膨らみ、口縁部でほぼ垂直に立ち上がる。高台以外は、黒褐色を帯びる釉薬を施す。同図５は、高台脇から体部にかけて丸みを帯びて膨らみ、口縁部で僅かに外反する。茶褐色と灰白色を帯びる釉薬を掛け分ける。見込みには、蛇の目状の釉剥ぎが施される。１～５とも第３号遺物廃棄遺構出土（１：№28、２：№27、３：№５、４：№77、５：№87）。

皿（第 20 図６）

皿の底部資料。腰部付近で段が見られ、その外面には凹みが一条回る。内面の見込み部分と外面の腰部以下を除き黄白色の釉薬が施される。第３号遺物廃棄遺構（№78）出土

急須（第 20 図７）

急須の上半部資料。胴部が大きく膨らみ全体に丸みを帯びる。口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。口唇部は平らに仕上げられ露胎となる。外面と内面の一部に緑褐色の釉薬が施される。第３号遺物廃棄遺構（№53）出土。

壺（第 20 図８）

壺の口縁部資料。口縁部は方形となり内外面とも褐色の釉薬を施す。Ｄ－８グリッド第４層出土。

瓶（第 20 図９）

外面の肩部に一対の取手が付く瓶。高台は削りだして成形される。外面は緑褐色、内面は褐色の釉薬が施される。第２号井戸（裏込め石内）出土。

２．無釉陶器

沖縄産無釉陶器は、1763 点を数えた。器種としては、碗・皿・杯・猪口・鉢（水鉢、小鉢を含む）・大鉢・擂鉢・壺（徳利を含む）・小壺・水甕・急須・蓋・鍋・灯明皿・火炉・香炉・人形・その他が確認できた。

ここでは、主に遺構内（第３号遺物廃棄遺構：D－８グリッド：第４層）出土遺物及び第４・５層出土資料の中から壺（徳利）・鉢（水鉢、小鉢）・擂鉢を第 21・22 図に図示し、第 16 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

壺（第 21 図１・２）

第 21 図１は、口縁部が肥厚する壺の破片である。第３号遺物廃棄遺構（№66）出土。同図２は、最大径を胴部に持ち、ほぼ丸形を呈する壺の胴部資料である。Ｃ－７グリッド・遺物集中部（№28）出土。

鉢（第 21 図３・４、第 22 図１～３）

第 21 図３は、頸部をつくり口縁部を折り曲げて折縁状にする水鉢である。外面は無文である。Ｆ－５グリッド第４層出土。同図４は、底部から胴部にかけてやや曲線を持って「ハの字」状に口縁部に至る小鉢である。Ｅ－６グリッド第５層出土。

第 22 図１は、口縁部から胴部にかけての資料である。口縁部は、「逆Ｌ字」状に折り曲げる折縁口縁である。同図２・３は、底部から胴部にかけての資料である。底部から胴部に立ち上がる部分は、ヘラ等の工具による丁寧な調整痕が残る。第 22 図１～３は第３号遺物廃棄遺構出土（１：№84、２：№85．３：№69）。

擂鉢（第 22 図４）

同図４は、脚台をもつタイプで、穿孔が見られるものである。第３号遺物廃棄遺構（№13）出土。

第 15 表　沖縄産施釉陶器観察一覧

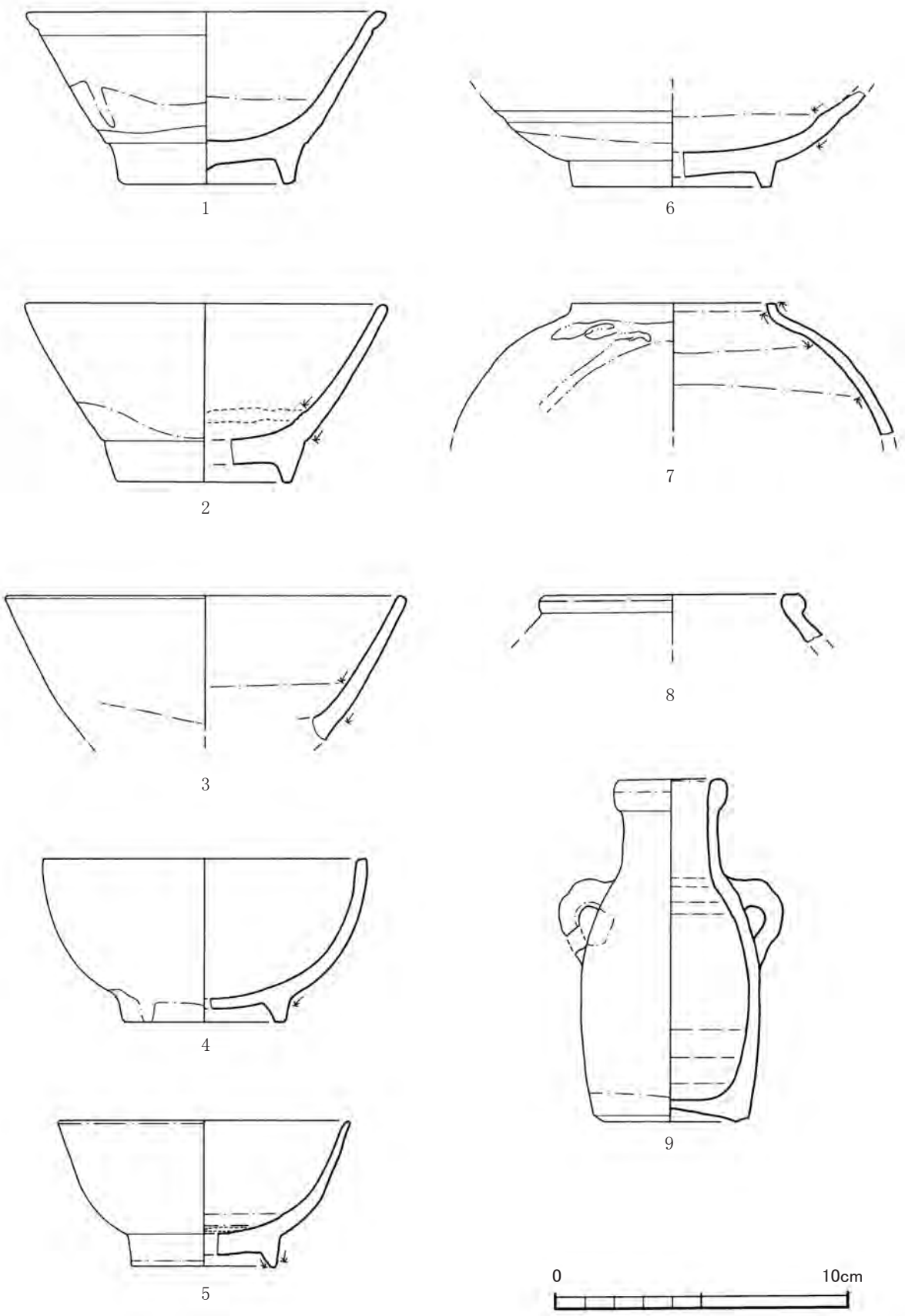
法量単位:cm

挿図番号	器種	口径 器高 底径	釉色	文様・特徴など	出土地点
第20図　1	碗	12.4 5.9 6.0	外面:淡灰色 内面:淡灰色	内外面共に、腰部より下部は露胎となる。 口縁は、外反し先端は丸みを持つ。 外口縁に、凹線を廻らす。 内底と畳付に砂が付着。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №28
第20図　2	碗	12.4 6.1 6.0	外面:灰ｵﾘｰﾌﾞ色 内面:灰ｵﾘｰﾌﾞ色	内外面共に、腰部より下部は露胎となる。 口縁は、ほぼ直口し先端は丸みを持つ。 内底と畳付に砂が付着。 露胎、素地ともに灰白色を呈す。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №27
第20図　3	碗	13.4 ― ―	外面:灰ｵﾘｰﾌﾞ色 内面:灰ｵﾘｰﾌﾞ色	内外面共に、腰部より下部は露胎となる。 口縁は、ほぼ直口し先端は丸みを持つ。 口縁部の資料である。 露胎、素地ともに灰白色を呈す。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №5
第20図　4	碗	11.1 5.6 5.6	外面:暗褐色 内面:暗褐色	内面から外面の高台際まで施釉。 口縁は直口し、腰部に丸みを持つ。 露胎はにぶい橙色、素地は灰白色を呈す。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №77
第20図　5	碗	10.0 5.0 5.0	外面:ｵﾘｰﾌﾞ黒色 内面:灰色	口唇で、内外に掛け分けになる。 外面は畳付けのみ露胎。 内底には蛇の目が施され、砂の付着が見られる。 素地は灰色を呈す。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №87
第20図　6	皿	― ― 6.8	外面:灰白色 内面:灰白色	内外面とも、腰部までの施釉と思われる。 外面腰部に凹線を廻らし、その内面側は稜となり段を作る。 内面胴部に鉄釉？が見られる。 露胎は淡黄色。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №78
第20図　7	急須	7.0 ― ―	外面:暗ｵﾘｰﾌﾞ色 内面:暗ｵﾘｰﾌﾞ褐色	口縁を立ち上げ、先端は平らになる。 外面残存部は施釉。口縁先端、内胴部中央付近は露胎。 内面に成形痕が明瞭に残る。 素地は黄灰色を呈す。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №53
第20図　8	壺	9.0 ― ―	外面:黒褐色 内面:黒褐色	口縁形は方形の口縁部資料である。 内外面共、施釉されるが口縁上面はまだらに露胎が見られる。 素地は浅黄橙色。	D-8　第4層
第20図　9	瓶	3.4 11.8 4.6	外面:明青灰色 内面:極暗褐色	口縁に約幅1cmの帯を廻らし肥厚させる。 外面は緑釉を厚く掛け、白濁し色調は一定でない。 内面は褐釉を施す。掛け分けである。 外面肩部に一対の把手が付く。 素地は褐灰色を呈す。	第2号井戸 裏込め石内

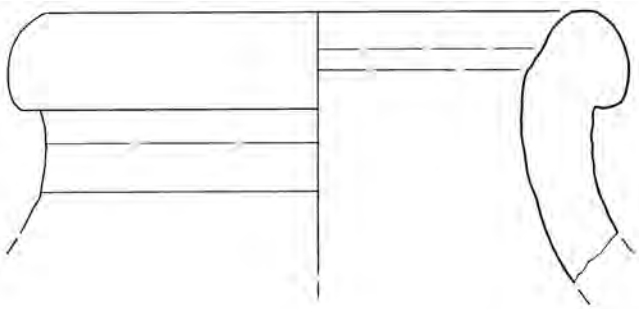
第 16 表　沖縄産無釉陶器観察一覧

法量単位:cm

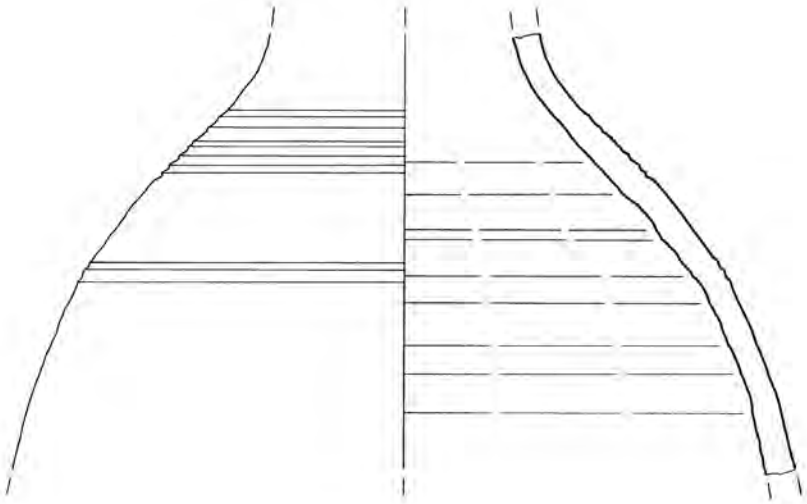
挿図番号	器種	口径 器高 底径	色調	文様・特徴など	出土地点
第21図　1	壺	15.0 — —	外面:暗赤褐色 内面:赤褐色	口縁部は玉縁状に肥厚する。 外面は光沢があるが、内面には無い。 口縁の先端に溶着様な痕が見られる。 素地は暗赤褐色で白色粒の混入が確認できる。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №66
第21図　2	壺	— — —	外面:暗赤褐色 内面:褐灰色	頸部で窄まる壺の胴部片である。 頸部に8本の沈線と間をあけその下に2本の沈線が施される。 内面はロクロ痕が明瞭に残る。 素地はにぶい赤褐色を呈す。	C-7　第4層 遺物集中部 №28
第21図　3	鉢	14.1 7.5 8.0	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	底部から逆「ハ」の字に立ち上がり、胴部中央より上で最大胴径に至る、そこから口縁部に向けて内湾する器形。 口縁は外側に三角形状に肥厚する。 素地も内外面同様、明赤褐色で混入物は見られない。	F-5　第4層
第21図　4	鉢	14.7 6.3 6.2	外面:灰赤色 内面:灰赤色	底部から逆「ハ」の字に立ち上がり、そのまま口縁径が最大径となる器形。 外面はやや光沢があり、一部黒色が見られる。口唇は平坦だが丸みがある。 素地はにぶい赤褐色を呈す。	E-6　第5層
第22図　1	鉢	31.0 — —	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	口縁は逆「L」字状になる。 口縁上面に沈線が1本廻る。 内外面にはロクロ痕が明瞭。 素地は赤褐色で、白色微粒子が見られる。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №84
第22図　2	鉢	— — 10.8	外面:明赤褐色 内面:明赤褐色	底部から逆「ハ」の字に立ち上がる。 外面下部と外底面にヘラ削りによる調整痕が明瞭に残る。 素地は明赤褐色で、白色微粒子が見られる。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №85
第22図　3	鉢	— — 16.8	外面:明赤褐色 内面:褐灰色	底部から逆「ハ」の字に立ち上がる。 外面下部と外底面にヘラ削り調整痕が明瞭に残る。内底面にはヘラなでによる調整痕が見られる。 素地は明赤褐色で、白色粒子が見られる。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №69
第22図　4	擂鉢	— — 14.4	外面:褐灰色 内面:赤黒色	脚部が付く擂り鉢の底部である。 脚部には、内面から外面に向かって3ケの孔が穿たれる。 内面全体に、櫛目が施されるが、内底面に16本組で幅3.5cmの櫛目が一つ確認できる。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №13



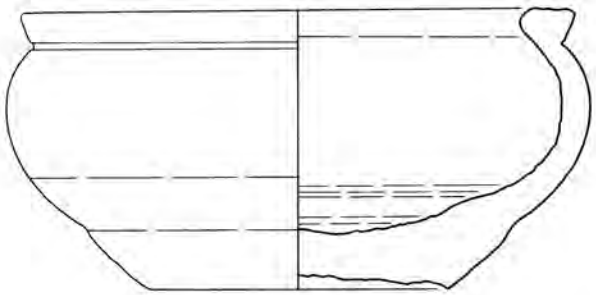
第 20 図　沖縄産施釉陶器



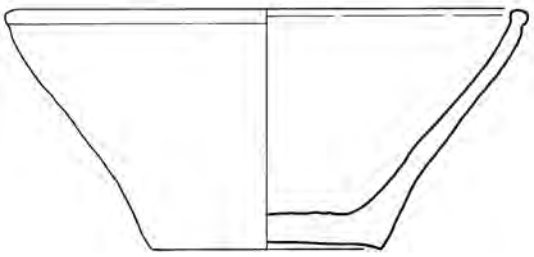
1



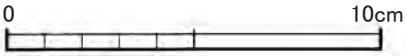
2



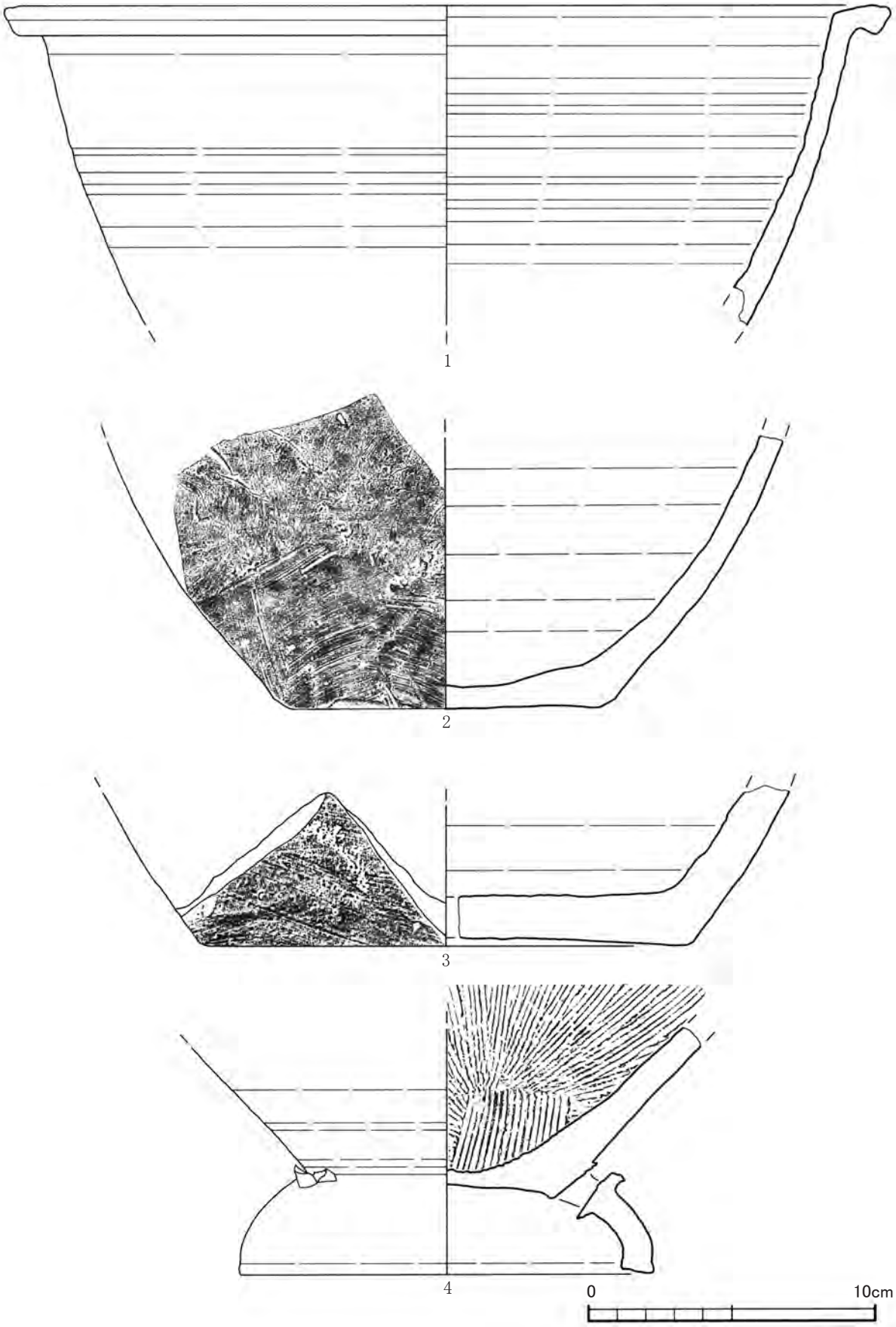
3



4



第 21 図　沖縄産無釉陶器①



第 22 図　沖縄産無釉陶器②

第４節　陶質土器

陶質土器は、76 点を数えた。器種としては、瓶・鉢・鍋・急須・火炉・燭台？・蓋・土鈴・その他が確認できた。ここでは、第４号埋甕（C－７グリッド：第３層）とした資料を第 23 図に図示し、第 17 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

鍋（第 23 図１・２）

第 23 図１は蓋、同図２は身のセットで出土した（図版５　１段目右）。１の蓋はほぼ完形。２の身は、口縁部から胴上部を欠損する。器壁は、５㎜程度とかなりの薄手である。なお、残存する部位には、煤痕は認められない。当該資料は、当初、上層の遺構である建物跡に付随する遺構と考えられた。しかし。第３層を掘り下げ中に出土したことから、下層の遺構に含めた。今後、詳細を検討したい。

第５節　瓦質土器

瓦質土器は、87 点を数えた。器種としては、鉢・浅鉢・こね鉢・擂鉢・灯明皿・香炉・炉・その他が確認できた。ここでは、遺構内（第１号井戸：C－７グリッド：第１・２層）出土遺物及び第４層出土資料の浅鉢と擂鉢を第 23 図に図示し、第 17 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

浅鉢（第 23 図３）

第 23 図３は、底部からほぼ直線的に立ち上がって口縁部に至る。器壁は、２㎝程度の厚みを持ち、器高 6.3 ㎝の浅い鉢形を呈する。

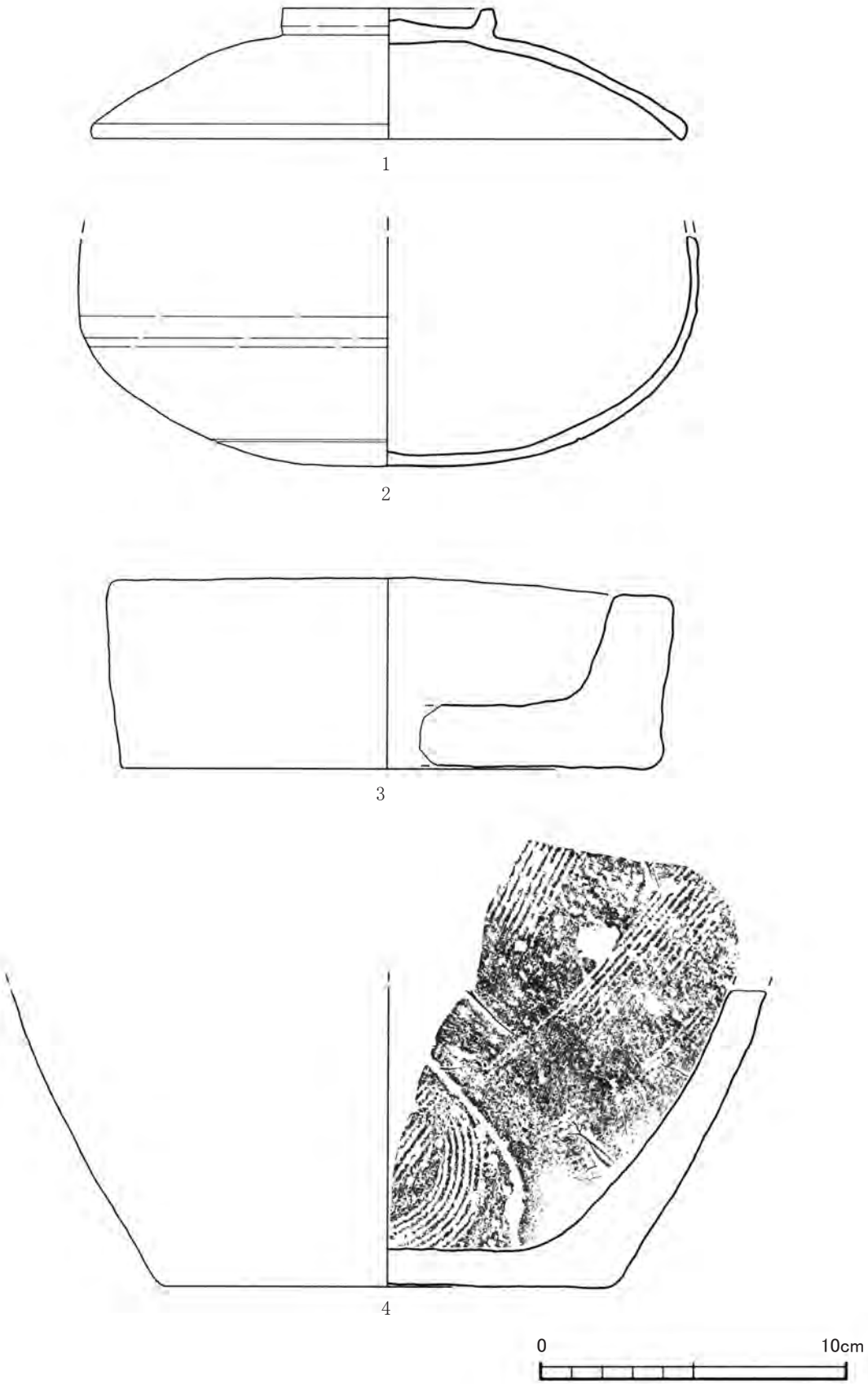
擂鉢（第 23 図４）

同図４は、底部からハの字状に立ち上がって口縁部に至る。口縁部は、欠損する。内面は摩耗が著しく、擂り目の痕跡も明瞭ではない。

第 17 表　陶質土器・瓦質土器観察一覧

法量単位：㎝

挿図番号	種類	器種	口径 器高 底径	色調	文様・特徴など	出土地点
第23図　1	陶質土器	鍋の蓋	19.6 4.3 7.0	外面：橙色 内面：橙色	皿を伏せた形状の蓋である。 口縁は内湾し先端は舌状。 畳付けに糸切り痕が見られる。	C-7 建物外　第3層
第23図　2	陶質土器	鍋	― ― 5	外面：橙色 内面：にぶい橙色	鍋の底部資料である。丸底で、接地面は少ない。 内外面に、ロクロ成形、ヘラ調整などの痕が明瞭に見られる。	C-7 建物外　第3層
第23図　3	瓦質土器	浅鉢	18.5 6.3 17.6	外面：褐灰色 内面：白灰色	ベタ底から胴部に向かい「L」字状に立ち上がる。 口縁はそのまま、直口し端部は平らになる。 底部から口縁までほぼ同じ厚み（2.0～2.2cm）から成る。 全体にナデ調整がなされ、口縁には煤痕が見られる。	F-6　第4層
第23図　4	瓦質土器	擂鉢	― ― 15.0	外面：灰白色 内面：灰白色	ベタ底から逆「ハ」の字状に立ち上がる。 内面には8～9本一組の櫛目が確認できる。 全体にナデ調整が施されている。	C-5　攪乱 第1号井戸 重機掘削時埋土



第 23 図　陶質土器、瓦質土器

第６節　瓦

瓦は、10360 点を数えた。種類としては、灰色瓦（平瓦 232 点、丸瓦 77 点、不明 6264 点、軒平瓦７点、軒丸瓦５点、軒瓦不明 16 点）、赤色瓦（平瓦 125 点、丸瓦 75 点、不明 3548 点、軒平瓦２点、軒丸瓦２点、軒瓦不明７点）が確認できた。

ここでは、遺構内（第１号井戸：C－７グリッド：第１・２層）出土遺物及び第４層出土資料の丸瓦と軒平瓦を第 24 図に図示し、第 18 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

軒平瓦（第 24 図１・２）

平面形が略三角形を呈するものである。両資料とも牡丹をモチーフにしている。同図１・２は、上原氏分類の「草花文側視１型　第１文様系Ａ式Ｃ類」に類似する。なお同類は、「平面形が楕円形の花芯に格子状の刻みが入る。花弁は三対の肉厚の花弁が配される。側面の葉は葉脈と枝脈が鮮明で、輪郭に細かい切込みが明瞭に認められる。茎は二本線で表現され左側に曲がる。」ものとされる。

丸瓦（第 24 図３～５）

第 24 図４は灰色、５は赤色を呈する丸瓦である。同図３は、灰色を呈し、凸面に叩きに伴う縄目と草花文様、凹面には、布目痕と紐状痕が見られる。また、右端部はヘラ等の工具により調整されるなどの特徴から、大和系瓦の範疇に入るものである。

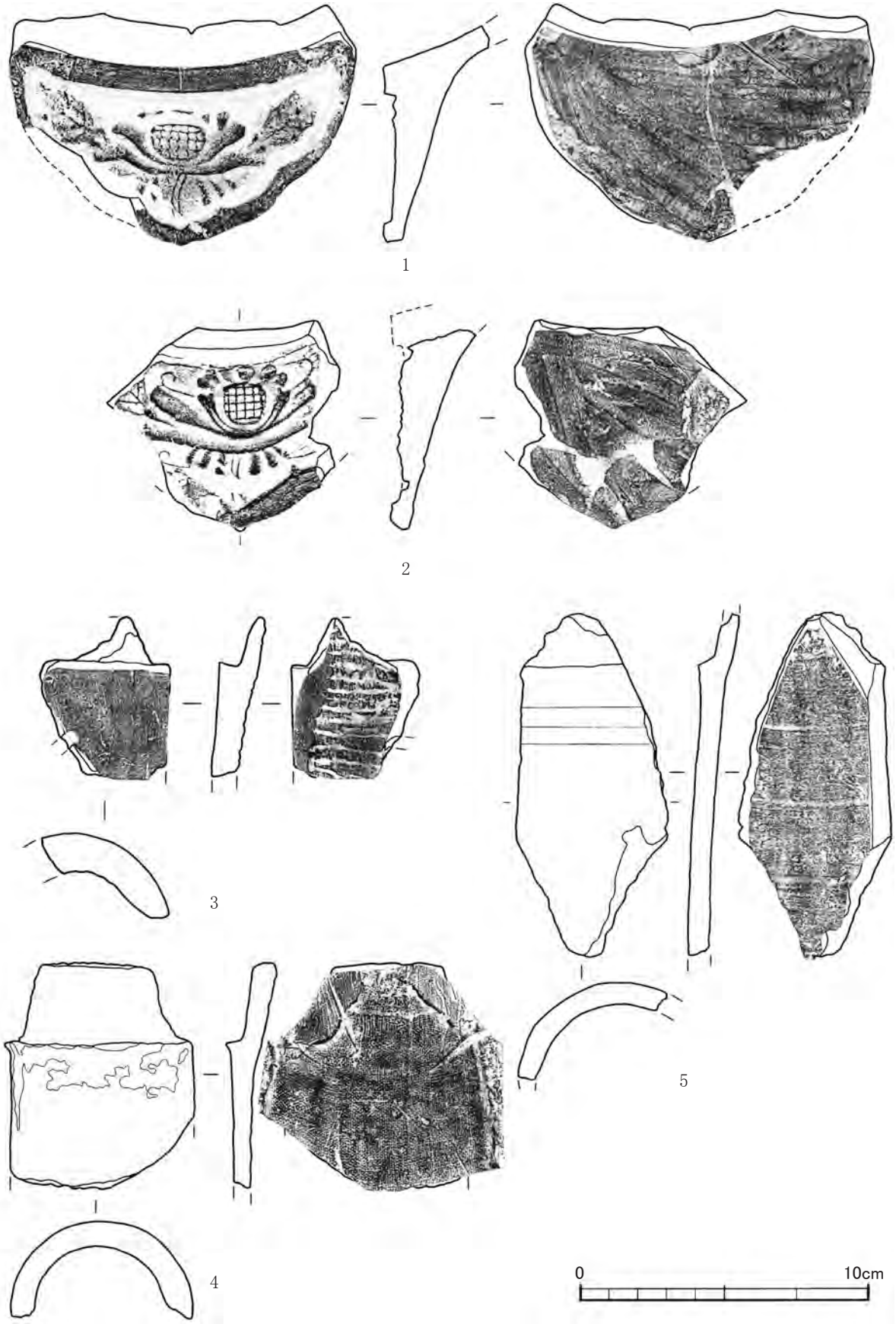
参考文献

上原　静　「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学　総合学術研究紀要』第 11 巻　第２号　2008 年１月
沖縄国際大学　総合学術学会

第 18 表　瓦観察一覧

法量単位：cm

挿図番号	種類	器種	長さ 幅 厚さ	色調	文様・特徴など	出土地点
第24図　1	明朝系 (灰色瓦)	軒平瓦	12.5 23.3 0.9～4.5	外面：灰色 内面：灰色	軒平瓦の瓦当資料である。 瓦当の文様は大きく開く花弁の中に上向きの花弁、花芯は楕円で格子状である。 葉と葉脈も確認できる。裏面はﾅﾃﾞ調整が施される。 瓦当縁の幅上部：1.8cm、下部：1.1cmを測る。	C-7　第4層 遺物集中部 №30
第24図　2	明朝系 (灰色瓦)	軒平瓦	― ― 1.0～3.5	外面：褐灰色 内面：褐灰色	軒平瓦の瓦当資料である。 瓦当の文様は大きく開く花弁の中に上向きの花弁、花芯はやや円形で格子状である。 破損しているが、葉と葉脈も確認できる。 裏面はﾅﾃﾞ調整が施される。	C-7　第4層 遺物集中部 №12
第24図　3	大和系 (灰色瓦)	丸瓦	― ― 2.0	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	丸瓦の玉縁部破片資料である。 表面には縦位の縄目と、細沈線による草花模様が見られる。 裏面には布目と約1cm間隔の横位の紐痕が明瞭に見られる。	D-8　第4層
第24図　4	明朝系 (灰色瓦)	丸瓦	― 13.1 1.7	外面：灰色 内面：灰色	丸瓦の玉縁部の資料である。 玉縁の長さ5.6cmを測る。 表面は縦位のﾅﾃﾞと上端に漆喰の痕が見られる。 裏面には布目痕が明瞭に残る。	C-7　第4層 遺物集中部 №18
第24図　5	明朝系 (赤色瓦)	丸瓦	― ― 1.5	外面：明赤褐色 内面：にぶい赤褐色	丸瓦の玉縁が僅かに残る破片資料である。 表面は縦位のﾅﾃﾞ痕が明瞭に見られる。 裏面は布目と約5.5cm間隔の横位の凹線が見られる。	D-8　第4層 第3号遺物廃棄遺構 №63



第 24 図　瓦

第７節　円盤状製品

円盤状製品は、179 点を集計した。特徴的な資料を第 25 図に図示し、第 19 表に特徴を記す。使用されている素材は、中国産陶磁器（白磁・青磁・青花・褐釉陶器など）、本土産磁器、沖縄産陶器（施釉陶器・無釉陶器・陶質土器）、瓦などである。その中で、瓦を利用したものが最多で 90 点であった。その他、沖縄産無釉陶器を利用したもの 38 点、褐釉陶器を利用したもの 17 点と続く。層序別にみると、第４層で 84 点、第５層で 43 点、第２層で 24 点、第３層で 14 点であった。重量は、１ｇ台から 150ｇ台の資料が得られている。その中で、20ｇ台のものが最多で 47 点、10ｇ台のものが 41 点、30・40ｇ台のものがそれぞれ 21 点、10ｇ未満のものが 15 点で全体の約 81％を占める。続いて、50・60ｇ台がそれぞれ 10 点、70ｇ台が５点、80ｇ台が４点、100ｇ台が２点、90・110・150ｇ台がそれぞれ１点であった。一方、重量が 10ｇ以下のものは、多種多様な素材の胴部を利用している。最大径は、１㎝から９㎝台の資料が得られている。その中で４㎝台のものが最多で 54 点、３㎝台のものが 48 点、５㎝台のものが 37 点で全体の約 77％を占める。続いて、６㎝台のものが 14 点、２㎝台のものが 13 点、７㎝台のものが９点、１㎝台のものが３点、９㎝台のものが１点であった。

第８節　煙管

煙管は、20 点を数えた。種類としては、沖縄産施釉陶器製２点（雁首２点）、沖縄産無釉陶器製 15 点（雁首 15 点）、金属製３点（雁首１点、吸口１点、延べ煙管１点）が確認できた。ここでは、遺構内（第２号埋甕：F－６グリッド：第３層）出土遺物及び第４・５層出土資料、第１層等の資料を第 26 図に図示し、第 20 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

沖縄産無釉陶器製（第 26 図１～４）

出土した資料はすべて雁首である。『ナーチュー毛古墓群』の分類を参考に、大きく２つのタイプに大別できる。Ⅰ．直線的で火皿部や首部を円形に形成するもの（２）。Ⅱ．直線的で火皿部や首部を八角形に面取りするもの（１・３・４）。

沖縄産施釉陶器製（第 26 図５・６）

出土した資料はすべて雁首である。図示した資料は、いずれも全体に丸みを帯び、首部が太いタイプである（『ナーチュー毛古墓群』Ⅰのタイプ）。

金属製（第 26 図７～９）

金属製の煙管は、３点図示した。第 26 図７は、雁首で首部の湾曲がなくなり、火皿が小さくなるもの（『ナーチュー毛古墓群』Ⅱのタイプ）。８は、吸口でラウ接合部から吸口部にかけて直線的に窄まるもの（『ナーチュー毛古墓群』Ⅲのタイプ）。９は、長さ 20.1 ㎝を測る延べ煙管である。

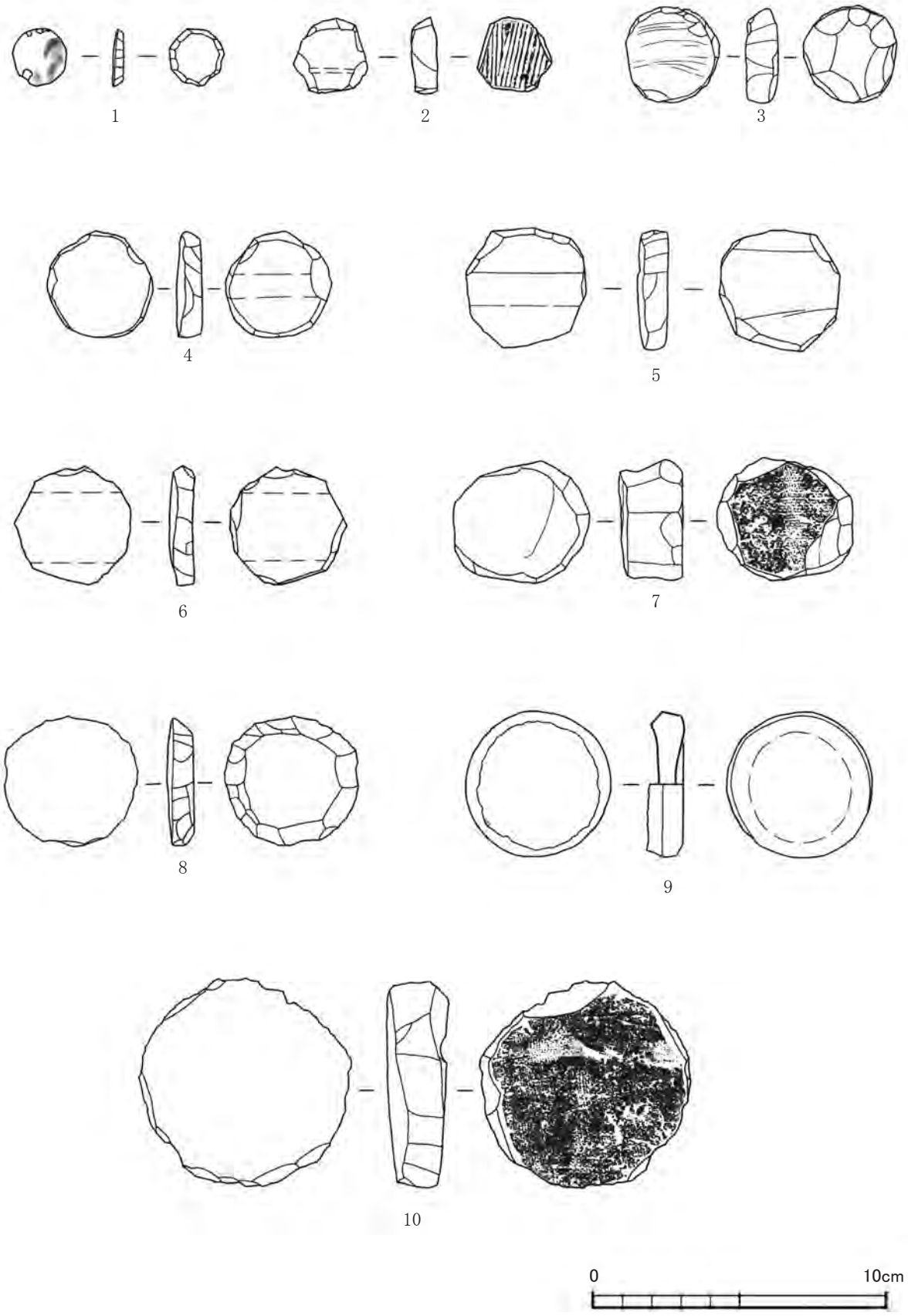
参考文献

玉城　京子　第 13 節　煙管　『ナーチュー毛古墓群』　那覇市教育委員会　2000 年３月

第 19 表　円盤状製品観察一覧

法量単位:cm、g

挿図番号	種類	部位	完／破	法量				特徴	出土地点
				縦	横	厚さ	重さ		
第25図　1	磁器	胴部	完	2.0	1.9	0.3 ～ 0.4	1.5	碗の胴部を使用。 打割調整は細かく、円形を呈する。 外面に呉須による文様が見られる。	E-4　第3層 第1号井戸掘方造成土 東西畦除去時
第25図　2	無釉陶器	胴部	完	2.6	2.5	0.9	7.2	擂鉢の胴部を使用。 打割が雑で角が残る。 内面櫛目が見られる。	F-6　第5層
第25図　3	砂岩(泥岩)?	―	完	3.3	3.1	1.0	10.4	打割調整が摩耗のため判然としない。 形状はほぼ円形。	C-8　第5層
第25図　4	土器	胴部	完	3.7	3.7	0.9	10.1	土器の胴部を使用。 摩耗か摩痕か周辺は丸くなる。 形状は円形。全体に白色粒が混入しｱﾊﾞﾀも見られる。	C-6　第5層
第25図　5	褐釉陶器	胴部	完	4.0	4.1	1.0	21.9	褐釉陶器の胴部を使用。 打割調整はやや雑で、角が残る。 形状は方形に近い円形。	F-6　第4層
第25図　6	無釉陶器	胴部	完	4.0	4.0	0.9	16	無釉陶器の胴部を使用。 打割調整は丁寧である。 形状はほぼ円形。	E-7　第5層
第25図　7	瓦	胴部	完	4.2	4.6	2.1	44.5	灰色瓦の胴部を使用。 裏面に布目痕がみられる。 形状は楕円形。	E-7　第4層
第25図　8	無釉陶器	胴部	完	4.5	4.5	0.9	21.5	無釉陶器の胴部を使用。 打割調整は細かく丁寧である。 形状は円形。	F-5 第1号遺物廃棄遺構内
第25図　9	黒釉陶器	底部	完	5.0	5.0	1.2	29.3	碁笥底の底部をそのまま使用。 打割調整痕は判然としない。 形状は円形。	E-7　第5層上面
第25図　10	瓦	胴部	完	7.1	7.2	1.49	103.9	灰色瓦の胴部を使用。 裏面に布目痕がみられる。 形状はほぼ円形。	D-6　第4層

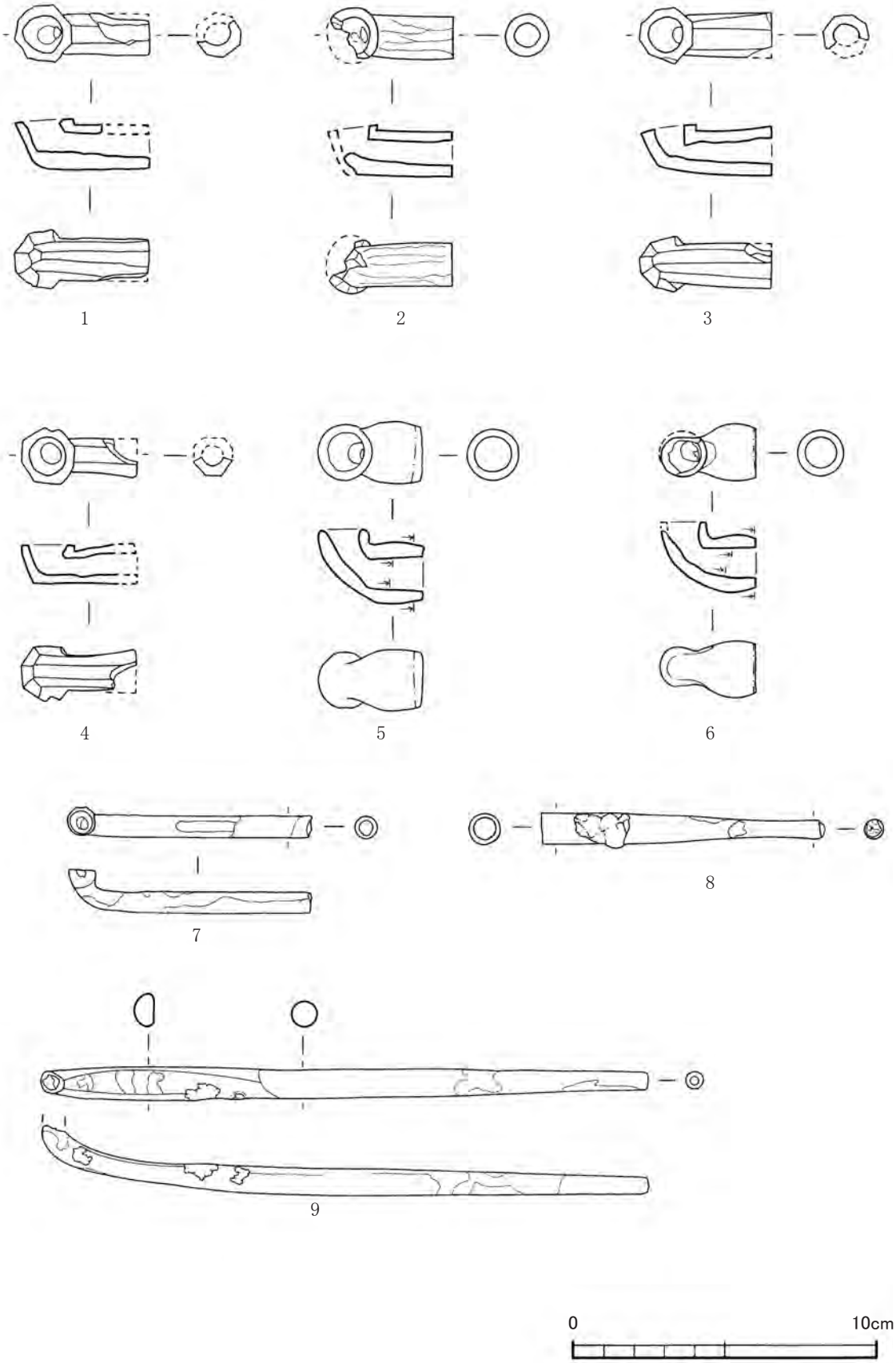


第 25 図　円盤状製品

第 20 表　煙管観察一覧

法量単位:cm

挿図番号	種類	器種	法　量				特徴	出土地点
			火皿又は吸口径	長さ	接続部径	重さ		
第26図　1	無釉陶器	雁首	1.8	4.5	―	9.8	八角形に面取りされる。 火皿内部に調整痕が明瞭に見られる。 自然釉で艶がある。	F-6　第3層 第2号埋甕遺構 (炭層)
第26図　2	無釉陶器	雁首	1.7	4.2	1.4	9.2	ヘラ削り調整が、多重に施され、丸みを帯びる。 ヘラ削り痕は明瞭で、端部は平坦。 色調:赤褐色	F-6　第3層 第2号埋甕遺構 炭集中土層
第26図　3	無釉陶器	雁首	1.8	4.5	―	8.7	八角形に面取りされる。 器体に窯着の痕が見られる。 自然釉で、艶が見られる。	E-7　第5層
第26図　4	無釉陶器	雁首	1.7	3.8	―	5.6	八角形に面取りされる。 火皿内部は反時計回りに、円錐状に抉られる。 自然釉だが、あまり艶はない。	E-7　第4層
第26図　5	施釉陶器	雁首	1.8	3.5	1.8	13.2	器形は釣鐘状を呈し、飴釉を施す。	C-6　攪乱
第26図　6	施釉陶器	雁首	1.5	3.1	1.6	9.2	器形は釣鐘状を呈し、灰釉を施す。 接続部には砂の付着が見られる。	D-4　表面精査時
第26図　7	金属製	雁首	0.8	8.0	―	7.2	木口部分が破損する。錆・砂などが全体に付着する。	D-5　東側溝周辺
第26図　8	金属製	吸口	0.6	9.3	0.9	12.0	吸口は僅かに開く形。 器全体は褐色の錆が見られる。表面に石灰様の付着。 吸い口部分に充填物があるが、材質は不明。	F-6 東西トレンチ 上層1(焼土層)
第26図　9	金属製	延べ煙管	吸口:0.6	20.1	―	33.2	火皿が欠損するものの、ほぼ完形の延べ煙管である。 火皿の近くは潰れ楕円となる。 全体には、錆、石灰などが付着している。	E-6　第1層



第 26 図　煙管

第９節　簪

簪は、５点を数えた。種類としては、頭部の形の分類で花形１点、耳かき形３点、不明１点が確認できた。第 27 図に図示し、第 21 表に特徴を記す。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

花形（第 27 図１）

第 27 図１は、頭の飾り部の外郭が尖り、花弁が６枚みられるもので『ナーチュー毛古墓群』の分類を参考にすると、花形Ａ類にあたる。

耳かき形（第 27 図２～４）

同図２～４は、全体に短めのもので『ナーチュー毛古墓群』の分類で耳かき形Ａ類にあたる。

不明（第 27 図５）

同図５は、頭部が欠損している資料である。

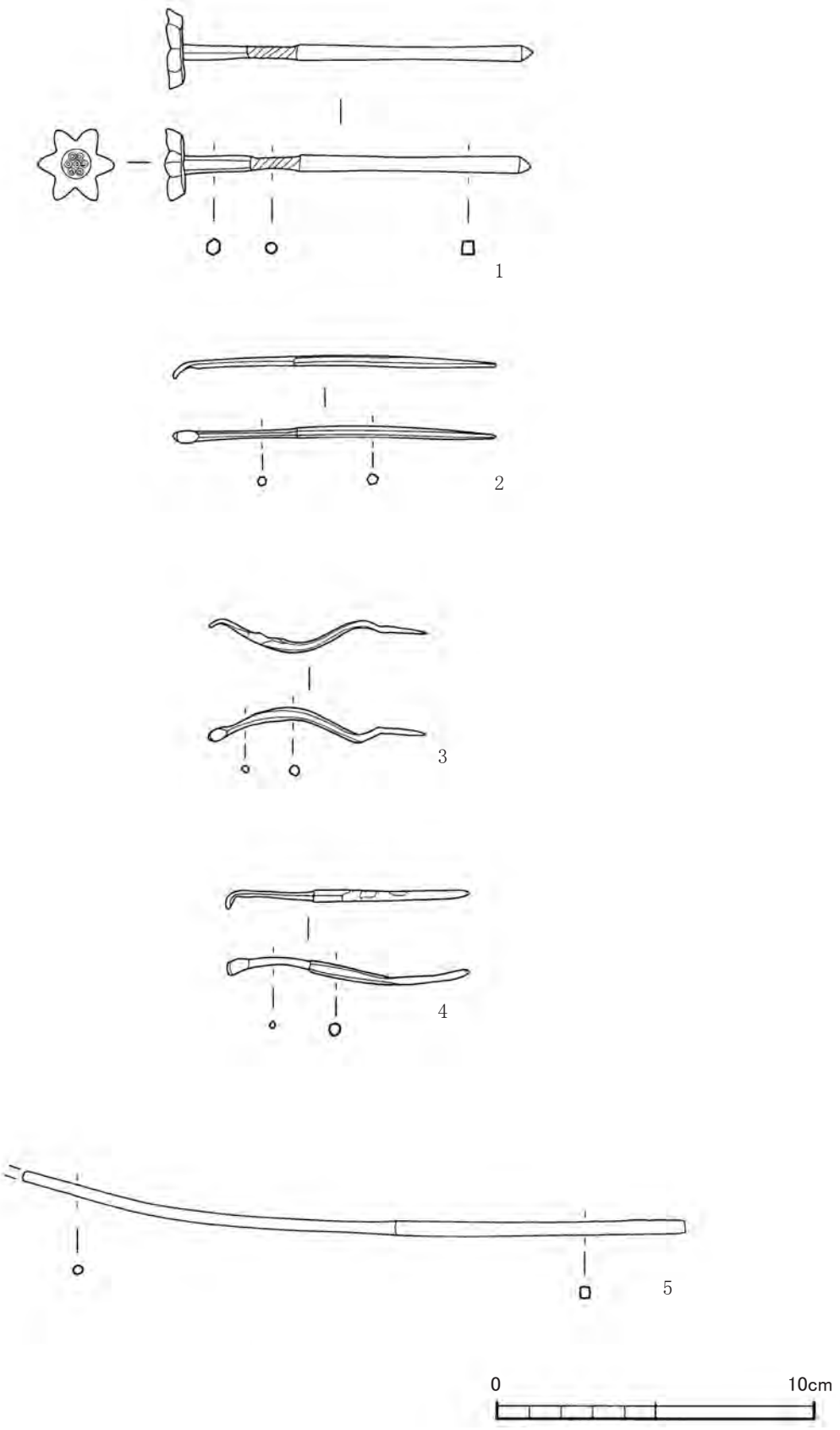
参考文献

玉城　京子　第 14 節　簪　『ナーチュー毛古墓群』　那覇市教育委員会　2000 年３月

第 21 表　簪観察一覧

法量単位：cm、g

挿図番号	形状	完／破	長さ	頭幅	厚さ	重さ	特徴	出土地点
第27図 1	花形	完形	11.6	2.45	0.55	21.5	花弁は6枚、花芯は線彫りによる丸形を7つ配す。首部は六角形、竿部は四角形で、ムディ部の捻りが見られる。	C-7　下層
第27図 2	耳かき形	完形	10.2	0.4	0.35	4.4	首部は丸形、竿部は六角形を呈している。	E-6　下層（1．2）南北トレンチ
第27図 3	耳かき形	完形	6.8	0.4	0.4	2.3	首部の形状は錆や屈曲により不明だが、竿部は六角形を呈している。	E-6　第4層
第27図 4	耳かき形	完形	7.7	0.45	0.4	2.7	首部は丸形、竿部は六角形を呈している。完形だが屈曲している。	D-8　第4層
第27図 5	不明	破損	21.0	—	0.45	15.7	両端が破損し全形は不明。残存の40%弱は四角形、残りは丸形を呈している。	F-5 第1号遺物廃棄遺構（掘方）



第 27 図　簪

第10節　銭貨

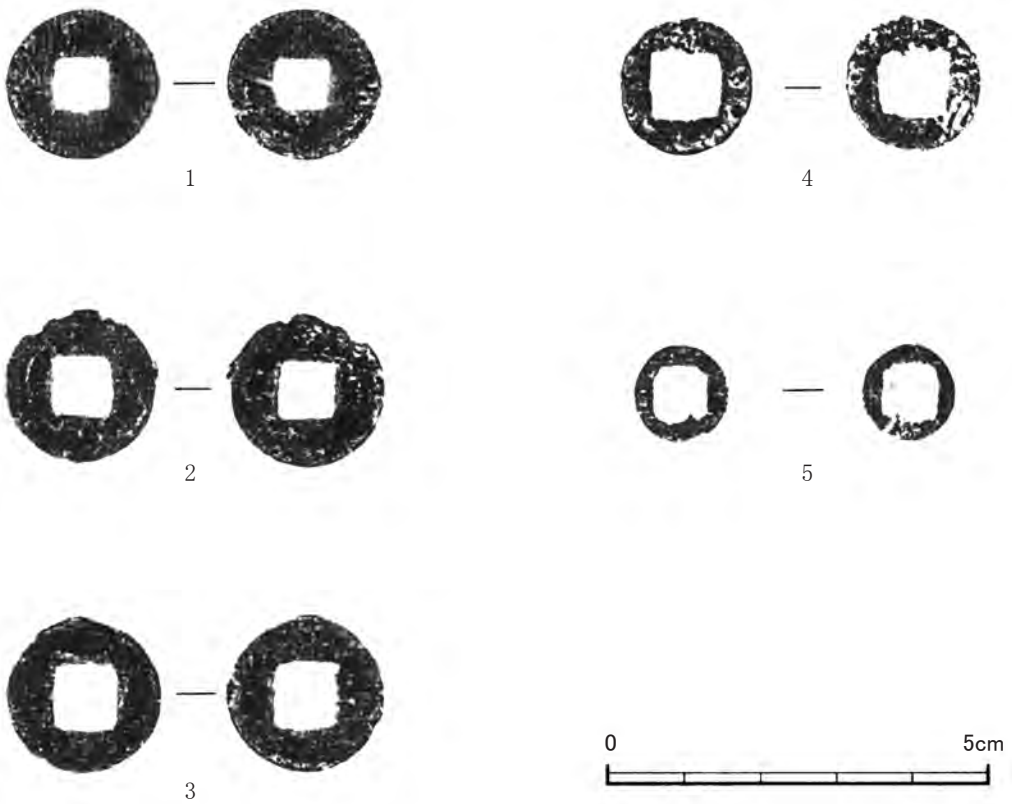
銭貨は、62点を集計した（第22表）。その内訳は、開元〇寶１点、天聖元寶１点、元豊通寶１点、洪武通寶２点、永楽通寶２点、康熙通寶１点、寛永通寶26点、銭種不明７点、無文銭12点、一銭６点、五銭１点、〇銭１点、百円１点であった。第４層および第５層からは、中世以前の銭貨（開元〇寶、天聖元寶・元豊通寶・洪武通寶・永楽通寶）及び無文銭が主体で、第３層で近世の寛永通寶が主体、第１・２層では、寛永通寶を含むが近代銭が主に出土する傾向になる。

初鋳年代を見ると、開元通寶の621年、天聖元寶の1023年から昭和17年の一銭まで多種の資料が得られている。中でも最も多いのは、26点の寛永通寶で群を抜く。続いて無文銭の12点、一銭の６点、銭種不明の７点である。この中で一銭は、明治、大正、昭和年間のもので、昭和17年の資料が最新資料である。

ここでは、集計した62点の内、無文銭を５点（第28図）、古代・中世銭・近世銭を14点（第29図）図示する。なお、個々の資料の計測値を第23表に示す。

参考文献

永井　久美男　『日本出土銭騒乱　1996年版』　兵庫埋蔵銭調査会　1996年



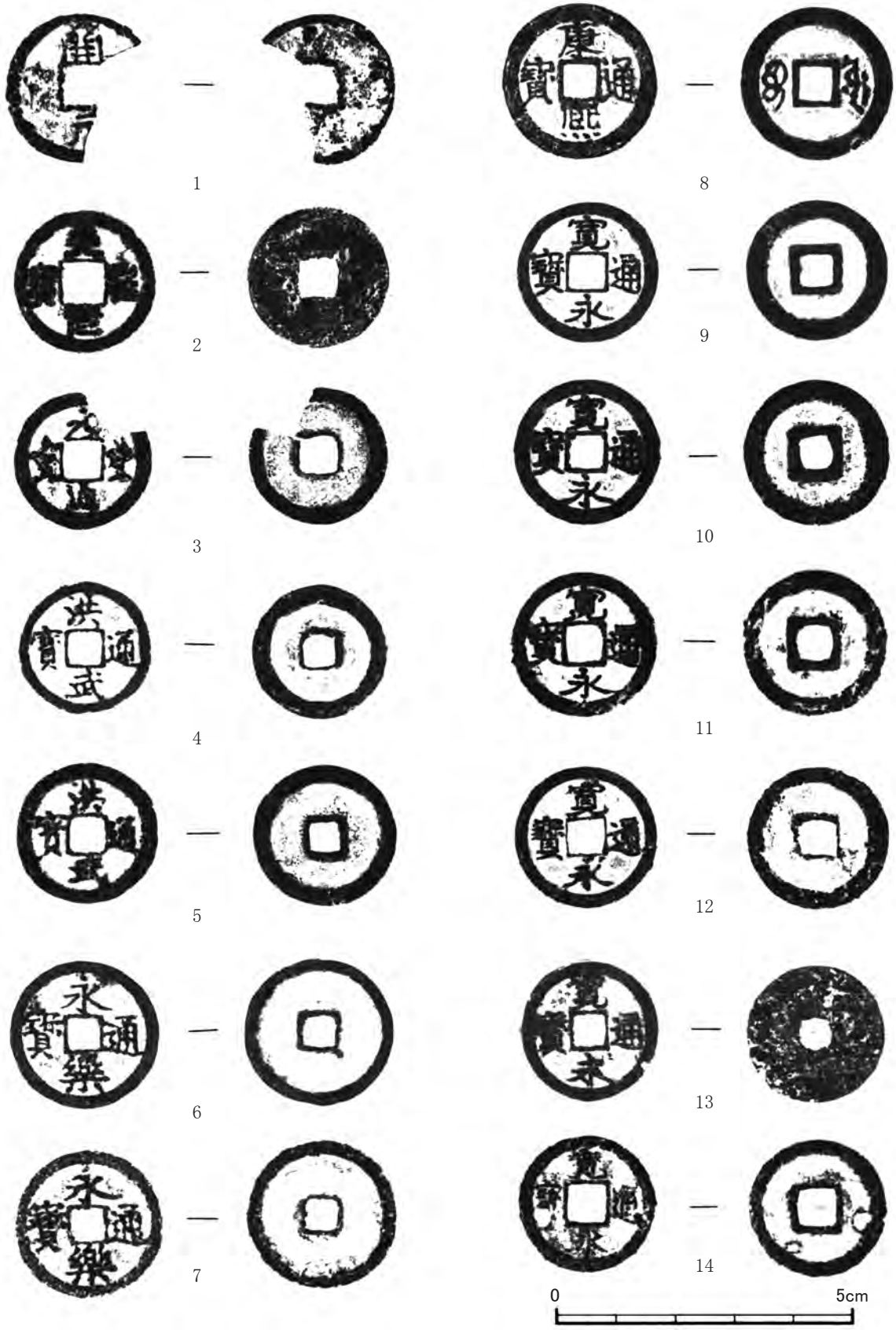
第28図　銭貨①

第 22 表　銭貨出土一覧

出土地点			開元○寶	天聖元寶	元豊通寶	洪武通寶	永楽通寶	康熙通寶	寛永通寶				銭種不明	無文銭		一銭	五銭	○銭	100円	合計
グリッド	層序	遺構等	初鋳621年	初鋳1023年	初鋳1078年	初鋳1368年	初鋳1408年	初鋳1662年	古	背文「文」	新	不明		完	半					
									初鋳1636年	初鋳1668年	初鋳1697年									
E－6	第1層										4	3	1							8
E－7	第1層 ⑤															2				2
F－6	第1・2層								1											1
F－5	第2層	第1号遺物廃棄遺構　石積下												1						1
E－4	第2層	第1号遺物廃棄遺構　周辺瓦敷き集中部一括											1							1
E－7	第2層															1		1		2
F－6	第2層									1										1
E－4	第3層	東西畦除去時									2	1	1							4
E－7	第3層	東西畦除去時									1									1
D－5	第3層	掘り込み8東西畦							1											1
D－5	第3層												1							1
E－7	第3層								1			1	1							3
C－7	第4層	骨集中部												1						1
C－7	第4層	遺物集中部				1														1
D－6	第4層													1	1					2
D－8	第4層												1		1					2
E－7	第4層								1		2	1								4
F－6	第4層													1						1
E－5	第5層	東西畦					1													1
D－5	第5層	東西トレンチ																		0
C－8	第5層													1						1
D－4	第5層						1													1
D－5	第5層							1												1
D－6	第5層													2						2
D－8	第5層		1	1		1									1					4
E－6	第5層				1															1
D－5	上層										1									1
D－5	上層	東西トレンチ								1				1						2
D－6	上層	東西トレンチ														1				1
D－6		溝内　表面精査時																	1	1
D－5		西側溝内														1				1
D－5		撹乱（第2号井戸　重機埋土）															1			1
D－8		撹乱												1						1
E－6		撹乱（H鋼脇）								2	1					1				4
E－7		撹乱											1							1
		第2号井戸　裏込め石内							1											1
		合計	1	1	1	2	2	1	5	4	11	6	7	9	3	6	1	1	1	62

第 23 表　銭貨計測一覧

連番	挿図番号	出土地点			銭名	完/破	法量(cm・g)				備考
		グリッド	層序	遺構等			外径	孔径	厚さ	重量	
1	第28図1	D-6	第5層		無文銭	完	2.08	0.64	0.13	1.0	
2	第28図2	D-6	第5層		無文銭	完	2.02	0.72	0.06	1.0	
3	第28図3	C-8	第5層		無文銭	完	2.07	0.80	0.12	1.8	
4	第28図4	D-6	第4層		無文銭	完	1.84	0.90	0.05	0.5	
5	第28図5	F-6	第4層		無文銭	完	1.27	0.70	0.10	0.2	
6		F-5	第2層	第1号遺物廃棄遺構 石積下	無文銭	完	1.94	0.77	0.08	0.8	
7		C-7	第4層	骨集中部	無文銭	完	2.09	0.65	0.08	1.7	
8		D-6	第4層		無文銭	半	1.76	0.70	0.10	0.6	
9		D-8	第4層		無文銭	半	1.98	0.86	0.10	0.8	
10		D-8	第5層		無文銭	半	-	-	0.13	1.3	
11		D-5	上層	東西トレンチ	無文銭	完	0.90	0.46	0.14	0.1	
12		D-8	攪乱		無文銭	完	1.76	0.84	0.10	0.8	
13	第29図1	D-8	第5層		開元○寶	半	2.62	0.67	0.14	2.3	
14	第29図2	D-8	第5層		天聖元寶	完	2.44	0.66	0.13	3.5	
15	第29図3	E-6	第5層		元豊通寶	少し欠	2.38	0.62	0.12	2.5	
16	第29図4	C-7	第4層	遺物集中部	洪武通寶	完	2.25	0.53	0.12	2.9	
17	第29図5	D-8	第5層		洪武通寶	完	2.44	0.51	0.15	3.8	
18	第29図6	E-5	第5層	東西畦	永楽通寶	完	2.56	0.52	0.14	4.1	
19	第29図7	D-4	第5層		永楽通寶	完	2.54	0.52	0.14	3.7	
20	第29図8	D-5	第5層		康熙通寶	完	2.66	0.55	0.10	3.6	背文有り
21	第29図9			第2号井戸 裏込め石内	寛永通寶	完	2.41	0.56	0.12	3.4	古
22	第29図10	F-6	第1・2層		寛永通寶	完	2.50	0.58	0.14	3.9	古
23	第29図11	D-5	第3層	掘り込み8東西畦	寛永通寶	完	2.48	0.64	0.11	3.1	古
24	第29図12	E-7	第4層		寛永通寶	完	2.44	0.60	0.15	3.0	古
25	第29図13	E-7	第3層		寛永通寶	完	2.40	0.53	0.10	3.1	古
26	第29図14	E-7	第4層		寛永通寶	完	2.34	0.64	0.12	2.1	新　穿孔あり
27		F-6	第2層		寛永通寶	完	2.54	0.55	0.15	3.7	新　背文「文」
28		D-5	上層	東西トレンチ	寛永通寶	完	2.52	0.58	0.12	3.7	新　背文「文」
29		E-6	攪乱(H鋼脇)		寛永通寶	完	2.52	0.57	0.12	3.5	新　背文「文」
30		E-6	攪乱(H鋼脇)		寛永通寶	完	2.55	0.60	0.12	3.6	新　背文「文」
31		E-6	第1層		寛永通寶	完	2.33	0.58	0.12	2.0	新
32		E-6	第1層		寛永通寶	完	2.50	0.60	0.17	3.9	新
33		E-6	第1層		寛永通寶	完	2.48	0.60	0.12	3.3	新
34 ~ 36		E-6	第1層		寛○通○	3枚？	2.40	ふさがっている	0.79	11.4	新
37		E-4	第3層	東西畦除去時	寛○通○	少し欠	2.49	0.54	0.22	2.9	新
38		E-4	第3層	東西畦除去時	○永○○	完	2.36	0.59	0.15	2.7	新
39		E-7	第3層	東西畦除去時	寛永通寶	完	2.44	0.57	0.11	2.9	新
40		D-5	上層		寛永通寶	ほぼ完	2.38	0.58	0.14	2.8	新
41		E-6	攪乱(H鋼脇)		寛永通寶	完	2.44	0.56	0.12	3.0	新
42		E-7	第4層		寛永通寶	完	2.32	0.63	0.13	2.9	新？
43		E-6	第1層		寛永通寶	完	2.35	0.64	0.16	2.6	？
44		E-4	第3層	東西畦除去時	○永通○	完	2.48	0.60	0.18	3.7	？
45		E-7	第3層		寛永通寶	完	2.54	0.57	0.13	3.6	？
46		E-7	第4層		寛永通寶	完	2.44	0.59	0.14	3.2	？
47		E-6	第1層		銭種不明	少し欠	2.25	0.48	0.22	2.5	
48		E-4	第2層	第1号遺物廃棄遺構 周辺瓦敷き集中部 一括	銭種不明	完	2.34	0.54	0.14	1.7	
49		D-5	第3層		銭種不明	半	2.37	0.64	0.14	2.3	
50		E-4	第3層	東西畦除去時	銭種不明	少し欠	2.44	0.60	0.16	2.1	
51		E-7	第3層		銭種不明	完	2.17	0.58	0.16	3.0	
52		D-8	第4層		銭種不明	3/4	2.33	0.69	0.18	2.2	
53		E-7	攪乱		銭種不明	完	2.36	0.64	0.14	2.6	
54		E-7	第2層		一銭(明治十年)	完	2.80	－	0.20	6.9	
55		E-6	攪乱(H鋼脇)		一銭(大正十年)	完	2.30	－	0.12	3.5	
56		D-6	上層	東西トレンチ	一銭(昭和十六年)	完	2.32	－	0.13	3.7	
57		E-7	第1層⑤		一銭(昭和十六年)	完	1.60	－	0.15	0.6	アルミ製
58		E-7	第1層⑤		一銭(昭和十七年)	完	1.60	－	0.15	0.6	アルミ製
59		D-5		西側溝内	一銭	完	2.30	－	0.12	3.4	
60		D-5	攪乱	第2号井戸 重機埋土	五銭	完	1.90	0.38	0.16	2.4	穴は丸
61		E-7	第2層		○銭	完	2.24	－	0.14	3.3	
62		D-6		溝内　表面精査時	100円(昭和55年)	完	2.25	－	0.17	4.9	



第 29 図　銭貨②

第11節　ガラス製小玉

今回の調査で得られたガラス製品は小玉２点で、第30図に示した。

同図１は完形品。最大径1.3㎝　高さ1.1㎝　孔径0.2㎝の円型で、重量2.7ｇの大型製品である。透明度は低く、色調は若草色で横筋が観察される。Ｄ－７グリッド、第３層（第３号埋甕遺構内の甕№２南側）から出土した。同図２も完形品で横筋があり気泡が観察される。透明度はなく、色調は濃い青色で、最大径0.9㎝　高さ0.6㎝　孔径0.2㎝の割合大きいサイズで、重量は0.5ｇ。Ｅ－７グリッド、第５層出土。

第12節　石製品

石製品は、12点を数えた。種類としては、磨石１点、球状製品10点、おもり状製品１点が確認できた。

第30図に図示する。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

磨石（第30図３）

第30図３はやや縦長の楕円形を呈する。表裏面及び周縁に敲打痕が顕著に観察される。長軸7.4㎝、短軸6.3㎝、厚さ4.3㎝、重さ300.2ｇ。C－８グリッド、第５層出土。

球状製品（第30図４・５）

同資料10点は、そのほとんどがサンゴ石を利用しているものと見られる。大きさは、直径２㎝台が１点、３㎝台が３点、４㎝台が５点、５㎝台が１点。重さは、10ｇ台が２点、20ｇ台が３点、30ｇ台が２点、40ｇ台が１点、80ｇ台が１点、140ｇ台が１点である。出土層序は、下層（第４層から３点、第５層から３点）からの出土が６点と過半数を占めている。

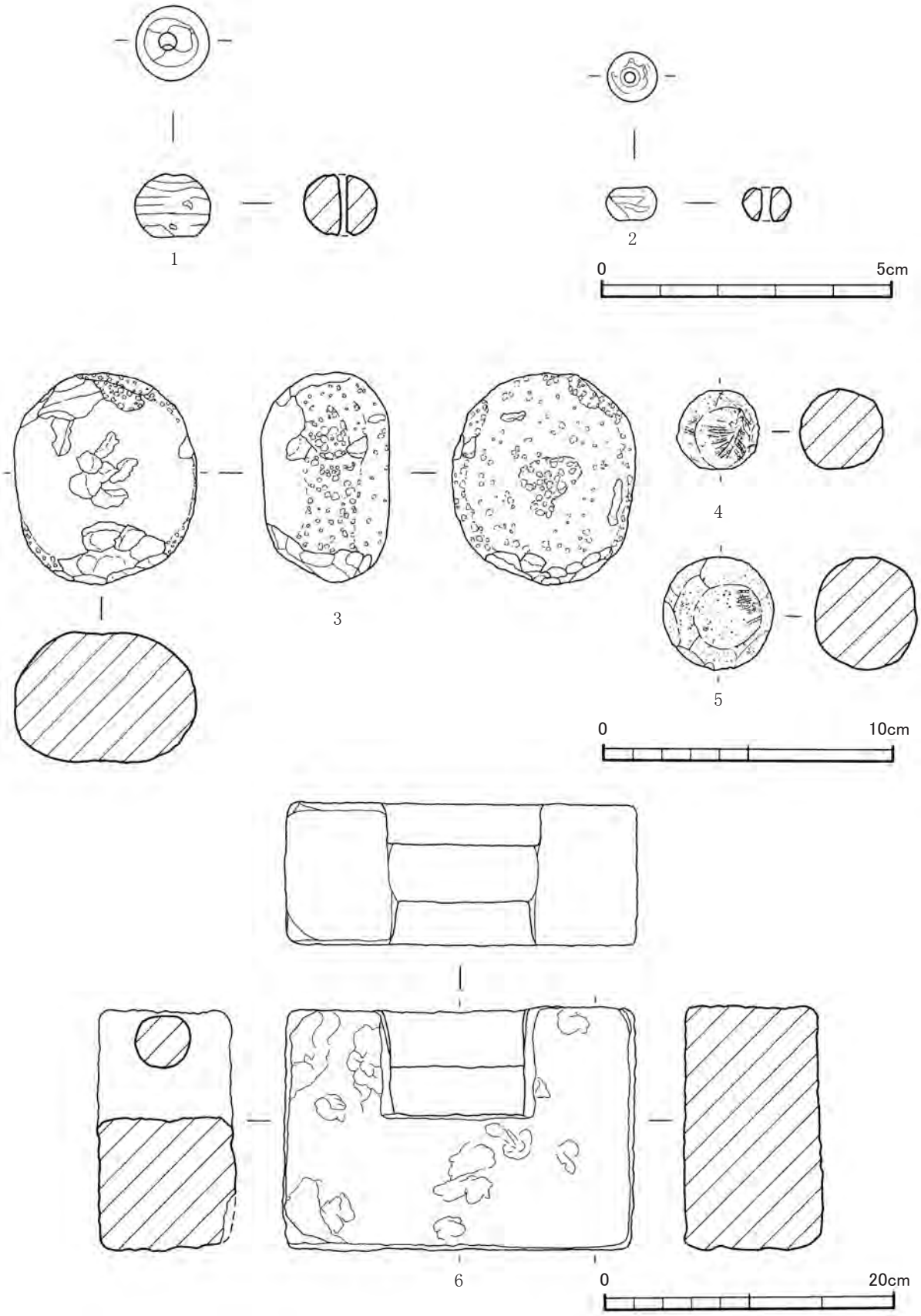
第30図４は、直径2.8㎝を測るほぼ円形を呈する。重さは12.8ｇ。D－５グリッド、第５層出土。同図５は、やや縦長の楕円形を呈する。長軸4.0㎝、短軸3.8㎝、重さ29.1ｇ。E－６グリッド第４層出土。

錘状製品（第30図６）

第30図６は、横長の長方形を呈する。横24.4㎝、縦16.4㎝、厚さ9.4㎝、重さ9.0ｋｇ。上部は、取手状になっており手で掴めるようになっている。D－５グリッド、第２号井戸周辺での表採資料。同資料は、沖縄空手道・古武道などの鍛錬道具「石錠」に酷似している。他の類例資料を待ちたい。

参考文献

『空手道・古武道基本調査報告書』沖縄県教育委員会　平成６年３月



第 30 図　ガラス製小玉、石製品

第13節　貝製品

本遺跡の貝製品は62点を集計した（第24表）。その中で実用品と考えられるのが匙製品４点、匙状製品３点、螺蓋製敲打器26点　利器１点、貝錘16点、碁石３点の合計53点。その他に未製品４点、有孔製品４点、文字入り製品１点の合計９点である。

螺蓋製敲打器

一番多く出土したのが、ヤコウガイのフタを利用した螺蓋製敲打器である。出土状況は、第４層11点、第５層から13点、第３～５層一括１点、第１層１点である。

貝錘

二番目に多いのが貝錘で、ハナマルユキダカラ製で13点、ハナビラダカラ製１点とホシダカラ製２点である。出土状況は第４層から11点、第５層から５点の出土。

匙製品・匙状製品

次に匙製品と匙状製品を合わせた７点である。本遺跡出土の匙製品は、明確な匙製品はなく４点全部が未製品である。二つの違いは、匙製品は体層部（結節部を２列）を利用しており、匙状製品は側面に削りがあり匙製品よりも幅が細い点である。第31図１に匙製品を図示した。やはり未製品であるが、形状が匙状を呈している。出土地はC－８グリッド、第４層遺物集中部一括。

利器

クモガイの突起を利用している。

碁石

全て第１層から得られている。表面は丁寧な研磨がなされ３点共ほぼ同じサイズで、径は2.2㎝、重量2.7ｇ　中央部の厚さは0.4㎝で縁は0.1㎝のレンズ状の形状を呈している。貝の種類は判らないが、貝にみられる独特の横筋状の模様がある。

未製品

未製品としたのは、ヤコウガイの体層部を切りとった製品である（第31図２　Ｅ－７グリッド、第５層出土）。

有孔製品

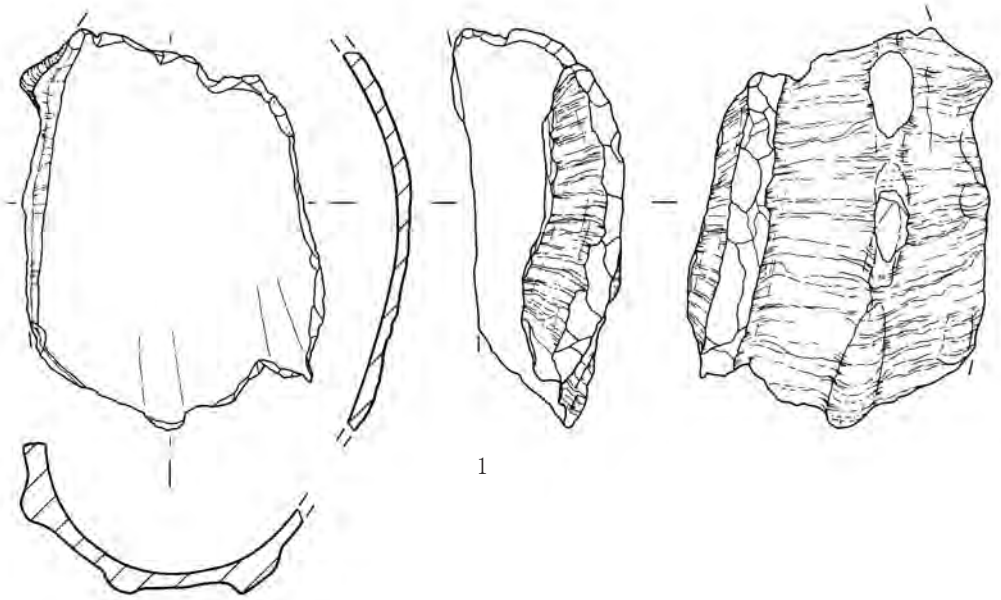
有孔製品はヤコウガイ３点、ホシダカラ製１点でその利用目的がわからない製品である。大きさも大小あり、形も丸や変形のもみられる。

文字入り製品

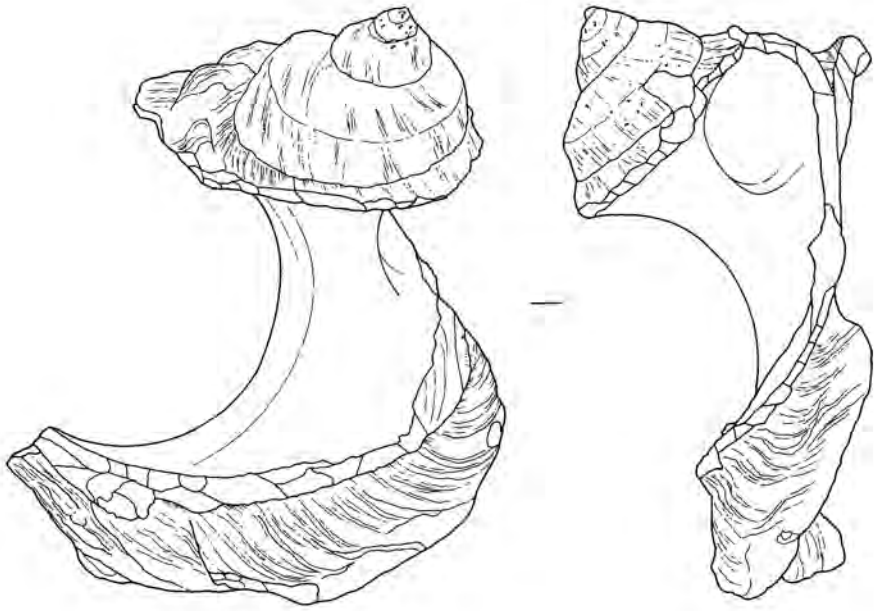
ウラキツキガイの右殻に墨書きで「地」の文字が見られる。

第 24 表　貝製品出土一覧

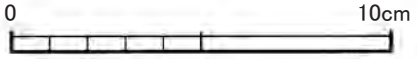
グリッド		分類	ヤコウガイ製					ホシダカラ製	クモガイ製	ウラキツキ製	ハナビラ ハナマルユキ・ホシダカラ	碁石	合計
			匙製品	匙状製品	未製品	有孔製品	螺蓋製敲打器	有孔製品	利器	文字入り貝製品	貝錘		
C－5	第1号井戸	撹乱　重機埋土					1						1
C－6	第2号井戸	溝掘り方	1					1					2
C－7	第4層						2		1		1		4
C－7	第4層	遺物集中部				1	2						3
C－7	第5層										1		1
C－8	第4層										4		4
C－8	第4層	遺物集中部一括	1										1
D－4	第1号井戸	周辺										1	1
D－5	第1号井戸	調査前表採										2	2
D－5	第1号井戸	掘り方造成土		1									1
D－5	第2号井戸	撹乱　重機埋土	1										1
D－5	第5層						4						4
D－6	第4層			1			1						2
D－6	第4層	建物脇トレンチ				1							1
D－6	第4層	南北トレンチ			1								1
D－6	第5層										1		1
D－6	第5層	建物脇トレンチ					1						1
D－7	第4層										2		2
D－7	第5層										1		1
D－8	第4層						5				1		6
D－8	第5層			1			5				1		7
D－8	第5層	埋め甕周辺					1				1		2
E－4	第2層	第1号遺物廃棄遺構（シーリ） 周辺瓦敷き集中部								1			1
E－6	第4層										1		1
E－6	第4層	東西畦除去時									1		1
E－6	第5層	東西畦除去時					1						1
E－6	下層	南北トレンチ					1						1
E－6	下層1・2	南北トレンチ（－20cm以下）			1								1
E－7	第4層										1		1
E－7	第5層				2		1						3
E－8		東西トレンチ　褐色粘質土（－20cm以下）	1										1
F－6	第4層					1	1						2
	合計		4	3	4	3	26	1	1	1	16	3	62



1



2



第 31 図　貝製品

第 14 節　貝類遺殻

巻貝 22 科 68 種、二枚貝 16 科 34 種を集計した。出土状況をみると巻貝はチョウセンサザエやマガキガイ、ハナビラダカラ、ハナマルユキダカラ、サラサバテイ、ギンタカハマが際立って得られた。イモガイ科が 15 種類とさまざまな種類が出土した。ウミニナ科イトカケヘナタリ、イボウミニナ、オニノツノガイ科クワノミカニモリの小さな部類が多数見られた。サラサバテイやギンタカハマはなど大型のサイズが目立った。二枚貝はウラキツキ、アラスジケマンガイ、オキシジミが多かった。近接する湧田古窯跡と主体貝も貝の種類も、ほとんど変わらない出土状況である。

ヤコウガイとフタを『湧田古窯跡Ⅳ』に習って、以下のように分類した。

ヤコウガイは 90 点出土して、完形は小形１点である。破片を「体層部欠（殻頂なし）」「殻頂～次体層」「殻口のみ」「外唇部」「体層部」「体層＋殻軸」「破片」にわけて分類した。体層部欠４点、殻頂～次体層が 17 点あることから、完形と合わせて 22 点と個体の推測ができる。破片ばかりなのは匙などの製品にしたのであろう。

ヤコウガイのフタは全部で 137 点得られている。完形品は 17 点、螺蓋製の製品は 26 点で、その他の 70%は破片である。『湧田古窯跡Ⅳ』と比較すると、分類に多少の違いはあるがヤコウガイもフタも残存比率はほとんど同じ結果であった。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

参考文献

『湧田古窯跡Ⅰ』　沖縄県教育委員会　1993 年３月

『湧田古窯跡Ⅳ』　沖縄県教育委員会　1999 年３月

第 15 節　節足・脊椎動物遺体

本遺跡における脊椎動物遺体は節足動物カニ、軟骨魚網サメ、硬骨魚網魚類、爬中網ウミガメ、鳥網ニワトリ、トリ、哺乳網ネズミ、イヌ、ジュゴン、ウマ、ブタ、ウシ、ヤギの 13 種類を確認した。なお、出土一覧及び遺物写真図版は割愛した。

カニ

脚の破片１点のみである。

サメ

椎骨のみが５点得られた。ネズミザメ類、メジロザメ類の２種類であった。魚類で種類のわかったものはハマフエフキ、ハタ類、ブダイであった。いずれも数点の標本が得られただけである。

ウミガメ

腹甲板と不明の２点だけである。

ニワトリ

上腕骨が得られた。

ネズミ

脛骨が得られた。

ジュゴン

肋骨が得られた。１点は炭が付着している。

ネコ

上腕骨の１点である。

イヌ

７点と少量だが、犬歯を初め第４層では上顎骨が出土している。頭骨の出土もなく層序もまばらなことから埋葬の可能性は低いと思われる。

ウマ

下顎骨にＰ２～M3 歯が付着した状態で資料が得られた。上腕骨が２点出土していることから、少なくとも２頭は存在したであろう。

ブタ

本遺跡で一番多く得られたのがブタで、頭蓋骨から四肢骨まで出土した。頭蓋骨も 10 点で、個体数を算定すると少なくとも 5 頭は推定できる。頭頂骨に大きい骨やまた、小さい骨が見られることから大型や小型のブタが存在していたと思われる。出土量は第４・５層にまとまっている。切断痕を持つ資料も頭蓋骨２点、上腕骨に２点など 10 点あり、その他に焼骨も２点ある。

ウシ

ウシ骨も頭蓋骨から四肢骨まで出土した資料である。ウシの最小個体数は１～２頭程である。上腕骨に遠位骨端はずれや乳歯が１・２点あることから小型のウシの存在も考えられる。出土量の割に切断のキズ跡が橈骨や上腕骨、大腿骨、頸骨に多くみられた。

ヤギ

ヤギは十数点出土している。肩甲骨に大型のサイズがあることから、大きなヤギも存在していたと思われる。

今回の出土状況は前節同様、近接する「湧田古窯跡」の調査結果とほぼ同様でブタ、ウシが主体であった。また、得られた動物遺体も魚類、ニワトリ、イヌ、ネコなどで、新しい種類の動物の出土は見られなかった。

第Ⅶ章　まとめ

前章までに発掘調査の成果について述べた。ここでは、今一度整理してまとめとしたい。

遺跡の立地について

本遺跡に隣接して「湧田古窯跡」が知られる。一帯は、沖縄における「窯業」の始まりの地として諸文献にでてくる地域で、前述の「湧田古窯跡」の発掘調査は、大きな関心を集めた。

また、琉球王府時代の重要な遺跡が立地する。特に、「渡地村跡」は、王府時代の貿易港と考えられている。発掘調査の成果は、琉球王府時代における那覇港の重要さを改めて知らしめた貴重なものとなっており、渡地村跡に近接し、浮島と称される「那覇四町」一帯や久茂地川を挟んだ本遺跡及びその周辺に位置する諸遺跡の発見・調査成果についても、今後、より一層重要性が増していくものと考える。

さて、本遺跡は、那覇市新庁舎建設工事における遺跡の発見が発掘調査の契機となった。第Ⅰ章でも述べたとおり、旧那覇市役所は、「1965（昭和 40）年に建設され、築 44 年近くが経過し、建物の老朽化、狭小性が著しく、バリアフリー・高度情報化への対応にも改善では限界があることなどから、現在地に新庁舎を建設する」こととなった。

今後、同地域周辺における諸開発の動向が注意されるが、市街地における開発計画には、埋蔵文化財の取り扱いに留意して進められていくことを望みたい。

層序について

今回は、大きく７枚に分層して報告した。

第１層・第２層は、大きな火災を想起させる焼土層（第１層）と上層検出遺構の造成土と考えられる土層（第２層）である。標高約 2.4m付近で遺構面が検出されている。

第３層は、調査区のほぼ全体に堆積する。堆積の状況から「上層の遺構」が構築される前の堆積土であることが確認できた。出土遺物の傾向から本層を境にして上層と下層に大きく時代区分ができそうである。

第４・５層は、調査区のほぼ全体に堆積する。締りがあり粘性も強い。本遺跡の上限を示す堆積層である。

第６層は、無遺物層である。遺跡の南側の一部（Ｅ－４～７グリッド）に堆積する。「陶土」の可能性が示唆されたものの科学分析の結果は否定的であった（附篇２参照）。

第７層は、標高約 1.9m付近に露頭する琉球石灰岩の地山である。

遺構について

今回報告した遺構の名称については、以下のとおりである。

「埋甕遺構」とした遺構については、埋め込まれた資料は甕だけではなく、「壺」や「鍋」もある。今回便宜上、「埋甕」の名称を使用した。

「遺物廃棄遺構」とした遺構については、土坑状に掘り込まれた場所に遺物が集中するものを主に

対象とした。

遺構は、大きく上層と下層に分けて報告した。

上層検出の遺構は、建物跡、第１・２号井戸、第１号遺物廃棄遺構、第１号埋甕遺構である。

その中で、第１号遺物廃棄遺構は、琉球石灰岩の切石を用いた方形状を呈する遺構である。今回便宜上、同遺構についても「遺物廃棄遺構」の名称を使用した。第Ⅴ章で述べたとおり、第１号遺物廃棄遺構は、人頭大の琉球石灰岩礫を方形に積み上げたもので、「方形枠組遺構」「シーリ」と称して調査を実施していた。建物跡からの排水や食料残滓等の廃棄用として考えられたもので、遺構内に堆積する土壌について科学分析を実施した。分析結果としては、「トイレ遺構として利用した可能性があるものの、ゴミ穴としての利用とも考えられ、あるいは、両方の機能を有していた可能性も挙げられる。（中略）今後、同一遺構内や周辺の同様の遺構の分析事例を蓄積して、評価・検証をしていくことが望まれる。」との報告を頂いた（附篇２参照）。

下層検出の遺構は、第２・３・４号埋甕遺構、第２・３号遺物廃棄遺構である。

その中で第３号埋甕遺構は、長軸 2.5m×短軸 1.2mを測る楕円形を呈する土坑の中にタイ産褐釉陶器壺を２個体据え置くものである。甕№.１とした資料の底部から胴部立ち上がりにかけて、「縄」が巻き付いて検出されたことは注目された。その「縄」などについて保存処理及び科学分析を実施した（附篇１参照）。

遺物について

遺物の特徴として、中国産陶磁器は、15 世紀後半～16 世紀後半～19 世紀にかけての資料が得られている。

銭貨の出土状況をみると、第４・５層では、中世銭以前の銭貨と無文銭が主体で、第３層で近世の寛永通寶、第１・２層では寛永通寶と近代銭が出土する傾向にあった。

貝類では、巻貝 22 科 68 種、巻貝 16 科 34 種、獣骨類は、13 種が確認できた。主体貝や貝種及び獣骨の主体は、隣接する「湧田古窯跡」の出土傾向と同様であることが指摘された。

その他の資料（本土産陶磁器・沖縄産陶器・陶質土器・瓦質土器・瓦・円盤状製品・煙管・簪・ガラス製小玉・石製品・貝製品）は、主に第４・５層及び遺構内出土資料から特徴的なものだけを紹介した。

本遺跡の下層である第４層（Ｃ－７グリッド）で遺物集中部が確認できた（第６図　図版 15）。

なお、今回報告した遺物は、主に遺構出土資料及び第４・５層出土資料であるが、外国産陶磁器と銭貨、貝製品を除く資料については、その出土一覧及び遺物写真図版を割愛せざるを得なかった。また、第１～３層出土資料については、その大部分が未報告である（第 25 表に示す資料）。今後、再整理を行い、改めて報告する機会を設けたい。

遺跡の年代観

出土遺物から本遺跡の年代観を考察すると以下のとおりとなる。

①下層の第４・５層で概ね 15 世紀後半～18 世紀（中国産陶磁器・瓦（灰色）・銭貨など）

②間層である第３層で 18・19 世紀（中国産陶磁器・瓦（灰色・赤色）・銭貨など）

③上層の第１・２層で 19 世紀～近代（本土産磁器・沖縄産陶器・瓦（赤色）・銭貨など）

以上のことから、15 世紀後半に遺跡の基礎があり、18 世紀代および 18～19 世紀にかけて、集落域が拡大する。そして近代以降の村（町）へと発展していく姿が見て取れよう（第３・32 図）。昭和 17 年の一銭が最新銭貨であることや水道メーター（図版５）が埋設されていたことなどから（生産者別標示記号付き本土産磁器も出土している）、遺跡の年代は、昭和 20 年前後が下限と想定できる。これは、第Ⅳ章層序でも触れたとおり、第１層の焼土は、火災による建物の焼失と考えられ、先の大戦による遺跡の被災が遺跡の終末時期として想起できる。

今後の課題

本遺跡の調査を契機に以下のような課題が浮かびあがった。

①「湧田古窯跡」周辺における集落遺跡の展開

②鍵層となる焼土層などの広がりの確認・検討

③特徴的な遺構についての類例資料の収集

④文献史・資料の活用方法の確立

⑤近代遺物の分類・集成・研究。

最後に、本遺跡の発掘調査では、上層の「建物跡」「井戸跡」をはじめ、下層の「埋甕遺構」「遺物廃棄遺構」など往時の生活に伴う多種多様な遺構・遺物が得られた。「湧田古窯跡」との関連性を含め、中世から近世、近代にまで至る「湧田村跡」を考える上で多くの示唆に富む成果を上げられたことは大きな成果であった。

これまでに得られた調査成果の集成・整理を行い、今後の集落研究の発展に向けて、他地域の集落遺跡との比較・検討をより一層充実させていきたい。

参考文献

『湧田古窯跡Ⅰ』　沖縄県教育委員会　1993 年３月

『湧田古窯跡Ⅱ』　沖縄県教育委員会　1995 年３月

『湧田古窯跡Ⅲ』　沖縄県教育委員会　1997 年３月

『湧田古窯跡Ⅳ』　沖縄県教育委員会　1999 年３月

『渡地村跡』　沖縄県立埋蔵文化財センター　平成 19（2007）年７月

『埋蔵文化財発掘調査概要　渡地村跡』　那覇市教育委員会　2009 年３月

『渡地村跡』　那覇市教育委員会　平成 24（2012）年３月

『沖縄大百科事典』　沖縄タイムス社　1983 年４月

第 25 表　遺物洗浄業務委託遺物数量一覧

遺物種別		遺物点数計	占有率
焼物	沖縄施釉	1, 243	6.00%
	沖縄無釉	3, 057	14.76%
	陶質土器	152	0.73%
	瓦質土器	17	0.08%
	土器	15	0.07%
	本土陶器	285	1.38%
	本土磁器	2, 495	12.04%
	外国陶器	234	1.13%
	外国磁器	870	4.20%
	瓦ﾚﾝｶﾞ（赤）	3, 609	17.42%
	瓦, 塼（灰）	4, 627	22.34%
その他	石製品	212	1.02%
	簪	7	0.03%
	煙管	18	0.09%
	銭貨	35	0.17%
	金属類	651	3.14%
	ガラス	1, 028	4.96%
	獣骨	623	3.01%
	貝	1, 094	5.28%
	その他	442	2.13%
点数		20, 714	100. 00%

第 32 図　泉崎・湧田民俗地図

附篇１

湧田村跡出土資料保存処理等業務委託　報告書

湧田村跡出土資料保存処理等業務委託　報告書

株式会社文化財サービス

1.　処理前状況

保存処理を行った遺物は褐釉陶器に伴って出土した撚縄で、運搬するために容器の形状に沿って巻かれたものである。陶器と土砂によって密閉された環境にあったため、原位置で、なおかつ形状を保った状態で出土した。状態を保つために土ごと取り上げられ、定期的に水分を与えて湿った環境を保ったまま搬入された。

撚縄は形状を保っているものの触れると表面がボソボソと崩壊する状況で、乾燥すると指で簡単に折れるほど脆い。そのため樹脂による強化を行うことが望ましいと判断した。

写真１　搬入時の状況

２．保存処理工程

保存処理は以下の工程で行った。

・観察　→　洗浄（土砂の除去）→　脱水（水分の置換）→　強化→　支持台設置

①　観察

撚縄は 2 本、および 3 本の束で撚られたものを 1 単位として編まれている。繊維は茶褐色、もしくは黒色を呈する。黒色が経年変化によるものかは判断できない。繊維は 1 本 1 本が太く、強度のある植物質の繊維で編まれていることがわかる。しかし腐食が進行した部分もあり、欠損も見られる。乾燥すると撚りが簡単にほぐれる状況で強度は保たれていない。

詳細な観察はマイクロスコープを使用した。撚縄は 0.18mm 幅の繊維と 0.3mm 幅の繊維を撚り合わせている。断面を観察すると繊維内部は空洞化しておらず、良好な状態で残存していることがわかった。

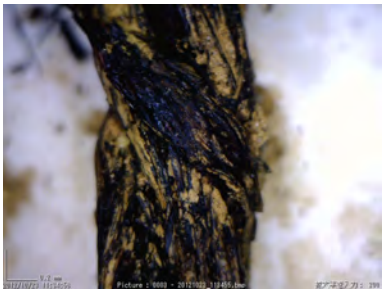


写真２　撚りの状況

写真３　繊維の拡大

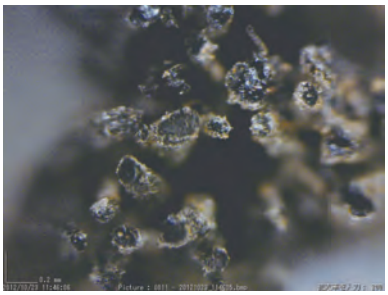


写真４　繊維の断面

② 洗浄

筆やスポンジ、竹串を使用して水道水で洗浄を行った。表面に付着した土砂の除去と、撚縄の形状を保っている土砂の除去も試みた。撚縄が土砂を取り除いても崩壊しないことを確認し、すべての土砂を除去していった。洗浄後は撚縄の撚りや編み方、巻きの状態がよく観察できる状態となった。

洗浄中、埋土中よりヤコウガイの蓋１点、巻貝２点、青磁の破片１点、鉄製品１点が検出された。

写真２　洗浄作業

② 脱水

急激な乾燥は遺物の損傷を招くため、エタノールの塗布により徐々に水分を置換する作業を行った。霧吹きで全体を湿らせ、細かい部分は筆で塗布した。約 1 カ月間エタノールによって湿らせ、脱水作業を完了した。

写真３　洗浄後

写真４　エタノール塗布

また、脱水作業と並行して撚縄を褐釉陶器に巻かれた状態で保管するために支持台の作成を行った。撚縄が巻かれていた褐釉陶器の胴下半部に画仙紙を水張りし、表面に発泡ウレタンを塗布して型取りを行った。乾燥後ウレタンフォームを取り外し、カッターなどで整形後表面に不織布を張り込んだ。

写真５　型取りした支持台

③ 強化

脆弱化した撚縄の強化を図るため、パラロイド B-72・20%キシレン溶液を作製し樹脂塗布を行った。浸透の具合を確認しながら塗布→乾燥を 2 度繰り返した。

撚縄の感触を確認し、繊維の強度や乾燥の様子で処理の完了を判断した。繊維そのものは良好な状態を保っている。

今後の保管については、乾燥剤や綿を同梱することや過度な密閉を避けることが望ましい。新聞紙で覆うことも避けることが無難である。急激な温湿度の変化を避けて保管するべきである。

写真６　処理後の撚縄の状態

３．分析

はじめに

分析を行ったのは木杭 1 点と撚縄 1 点である。その素材を明らかにするために、杭の樹種同定と撚縄の顕微鏡観察を実施する。また、埋甕内土壌を水洗選別して得られた微細物を対象として、内容物を明らかにするための分類を行い、種実については同定を実施する。

①杭の樹種

1.試料

試料は、C-7 埋甕遺構から出土した杭 1 点(木杭№2)である。

2.分析方法

剃刀を用いて木口（横断面)・柾目（放射断面)・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Richter 他(2006)を参考にする。

3.結果

杭№2 は、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10 細胞高。

4.考察

杭は、針葉樹のマツ属複維管束亜属に同定された。複維管束亜属には、アカマツ、クロマツ、リュウキュウマツがあるが、本地域の現植生を考慮すれば、沖縄本島に広く分布するリュウキュウマツの可能性が高い。リュウキュウマツは、軽軟で加工は容易で、強度や保存性も比較的高いが、シロアリには弱いとされる。今回の結果から、保存性の高いマツ属複維管束亜属(リュウキュウマツ)を杭として利用したことが推定される。

②撚縄の観察

1.試料

試料は、C-7 埋甕遺構から出土した撚縄 1 点である。撚縄は、細い繊維が集合した状態のものと、解れた状態の繊維とがある。今回の分析では、解れた繊維を利用する。

2.分析方法

繊維を水洗した後、超音波洗浄機で表面の泥を除去し、ガムクロラールで封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡及び落射蛍光顕微鏡で表面の模様や細胞等を観察する。

3.結果

繊維は、大きさにバラツキがあり、試料採取時の実体顕微鏡観察結果では、断面形態は不定形である。生物顕微鏡による透過光観察では黒色不透明である。落射蛍光顕微鏡による観察では、表面に細胞の配列や繊維細胞と考えられる組織構造が認められるが、土壌の付着が著しく、詳細な観察はできない。

4.考察

繊維表面には、細胞の配列や繊維細胞と考えられる組織構造が確認できることから、植物由来の繊維と考えられる。繊維は比較的太く、断面形状は不定形で、実体顕微鏡観察では丸棒状や薄板状の繊維が確認できる。こうした状況から、繊維は何らかの植物体を割いて作られている可能性がある。今後、樹脂で包埋して、断面形状の詳細、横断面での組織構造や配列、束ねている繊維の数などを観察する必要がある。

③埋甕遺構内の土壌

1.試料

試料は、C-7 埋甕遺構内の土壌を水洗選別して得られた植物遺体等の微細物である。

2.分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体を拾い出す。種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施する。

3.結果

結果を表 1 に示す。種実遺体は、草本のオヒシバの種子が 1 個同定された。以下に形態的特徴を述べる。

・オヒシバ(*Eleusine indica* (L.) Gaertn.)　イネ科オヒシバ属

種子は灰褐色、長さ 1.0㎜、径 0.7㎜ 程度の三稜状狭倒卵体。種皮は薄く、表面には 20 数個の細い隆条が基部の臍から放射状に配列する。路傍や空き地など、日当たりの良い乾いた場所に生育する雑草類である。

種実以外では、炭化材が 51 個(1.1g)、植物片(縄状繊維)が 7 個以上(1.02g)、骨片が 3 個(1.0g)、巻貝類が 91 個(1.5g)、陶磁器片が 16 個以上(1.5g)確認された。これらは大まかな分類にとどめ、種実の結果と共に表 1 に示す。

表１　種実同定結果

試料情報			オヒシバ種子		炭化材			植物片(細状繊維)		魚類の鱗?			骨片			巻貝類			貝類			陶磁器片			分析残渣	備考
			個	g	個	g	mm	個	g	個	g	mm	個	g	mm	個	g	mm	個	g	mm	個	g	mm	g	
浮	炭化物	0.05g	–	–	30	1.001	4	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1.41	残渣:昆虫の肢を含む
浮	炭化物膜状	0.02g	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	0.99	残渣:昆虫類を含む
浮	繊維状	0.03g	–	–	–	–	–	7+	1.02	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	
浮	貝類	0.07g	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	50	1.37	4	–	–	–	–	–	–	–	
浮	骨?	0.03g	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3	0.99	8	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	残渣:植物片(2),泥塊(1)
浮	残	1.43g	1	<0.01	12	<0.01	3	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1.43	オヒシバ:混入の可能性,残渣:植物片主体,昆虫類
沈	炭化物他	1.2g	–	–	4	<0.01	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	0.1	残渣:骨片?を含む
沈	貝類	1.22g	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	15	0.16	6	–	–	–	–	–	–	–	巻貝類:別種
沈	骨類?	1.04g	–	–	–	–	–	–	–	1	<0.01	4	–	–	–	–	–	–	1	<0.01	3	–	–	–	<0.01	残渣:植物片を含む
沈	陶器	2.42g	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	10+	1.37	22	–	陶磁器片
沈	残	38g	–	–	5	0.09	2	–	–	–	–	–	–	–	–	26	<0.01	2	–	–	–	–	–	–	35.31	残渣:サンゴ片,ウニ類の棘を含む
断面観察用				–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	15.08	層状堆積物?(1点)
底面より採取				–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3.209	残渣:植物片,昆虫類の翅,蛹?を含む

4.考察

確認されたオヒシバは、調査区周辺域の草地環境に順応する植物であるものの、炭化をしていないことから、後代の混入の可能性も考えられる。種実以外では、炭化材、植物片(縄状繊維)、骨片、巻貝類などが確認された。このうち少なくとも、骨片や魚類は食料残滓に由来する可能性が示唆される。

一方、分析試料を確認すると、甕には 2mm 弱の土壌が堆積しており、灰色と明黄褐色の互層を呈している。底面には、1～5mm 程度の大きさが主体となる石灰岩片が散在する。その様相からみると、何らかの目的をもって使用された痕跡とは考えにくい。さらに、明黄褐色層は、粘土質のシルトを呈し、微かながら葉理構造が見られ、水が関わるような堆積の可能性も示唆される。しかし、試料からも埋甕の使用履歴にかかわるような直接的な証拠を得ることが出来ない。

引用文献

石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

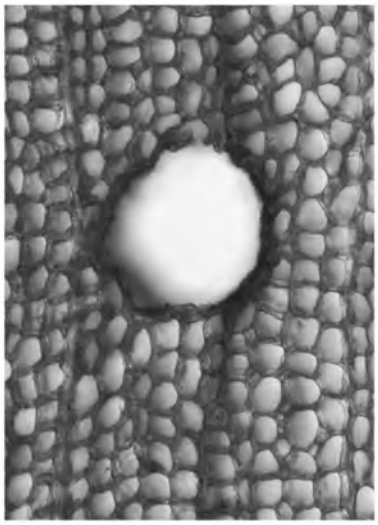
中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

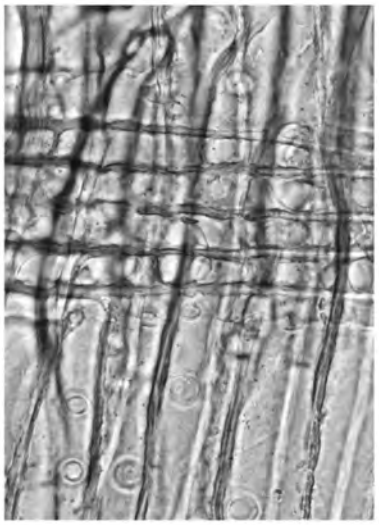
島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

顕微鏡写真

１．木杭



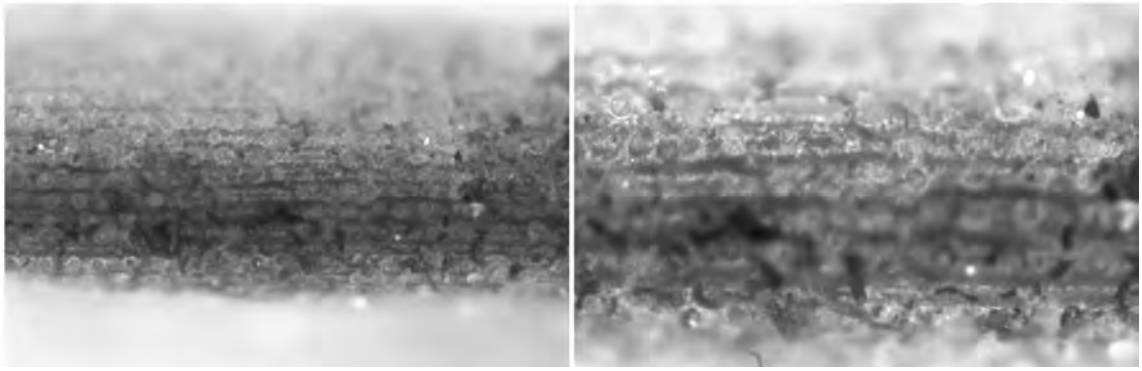
木口



柾目

板目

２．撚縄



附篇２

湧田村跡の自然科学分析　報告書

湧田村跡の自然科学分析　報告書

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

湧田村跡は、沖縄県那覇市に所在する、現在の県庁付近にあった陶器の生産地跡である。調査区からは、方形枠組遺構が検出されており、覆土下部には炭層を含む有機物混入土壌が確認されている。

本報告では、調査区内より検出された陶器に使用された可能性のある粘土を対象に、その検証を目的として胎土薄片作製鑑定、蛍光 X 線分析を、方形枠組遺構を対象に、利用状況に関する情報を得ることを目的として寄生虫卵分析、微細物分析、土壌理化学分析、脂肪酸分析を実施する。

Ⅰ.粘土の分析

1.試料

試料は、F-6 グリッドの第 6 層より採取された陶土状土壌とされた堆積物 1 点である。試料名はコンテナ No.179 のサンプル土とされている。試料の外見は、黄灰色を呈する極細砂質シルトであり、手触りに粘性はほとんど感じられない。この試料 1 点について胎土薄片作製鑑定、蛍光 X 線分析を実施する。

2.分析方法

(1)胎土薄片作製鑑定

試料を樹脂で固化した後に、一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製する。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、試料中に含まれる鉱物片、岩石片および化石類などの種類構成を明らかにする。

砂粒の計数は、松田ほか(1999)が土器胎土分析に用いた方法を適用する。計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルト(Wentworth の粒度階区分)までの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパラート全面で行う。なお、径 0.5mm 以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数する。また、同時に基質と孔隙のポイントも計数する。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の 3 次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、砂粒・基質・孔隙の割合を示す棒グラフを呈示する。

(2)蛍光 X 線分析

主要化学組成は、ガラスビードを作製し、蛍光 X 線装置により測定する。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムの FP 定量法を使用し、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、T-Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O および P_2O_5 の主要 10 元素について定量分析を実施する。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学標準試料(JA-1,JA-2,JA-3,JB-1a,JB-2,JB-3,JCh-1,JF-1,JF-2,JG-1a,JG-2,JG-3,JGb-1,JGb-2,JH-1,JLk-1,JR-1,JR-2,JR-3,JSd-1,JSd-2,JSd-3,JSl-1,JSl-2,JSy-1)を用いる。

1)装置

(株)リガク製 走査型蛍光 X 線分析装置 ZSX PrimusⅢ+(FP 定量法アプリケーション)

2)試料作成

機械乾燥(110℃)した試料を、振動ミル(平工製作所製 TI100;10ml 容タングステンカーバイト容器)で粉砕・混合し、ガラスビードを以下の条件で作成した。

溶融装置;自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤及び希釈率；融剤（Spectroflux 100B)5.000g:試料 0.500g

剥離剤；LiI

溶融温度；1200℃,約 7min

3)測定条件

上記作成したガラスビードを専用ホルダーにセットし、上記走査型蛍光 X 線分析装置を用い、以下の条件で測定を実施した。

X 線管；Rh(50KV-50mA)

スペクトル；全元素 K_α

分光結晶；LiF,PET,RX25,Ge

検出器；F-PC,SC

表 1. 胎土薄片作製鑑定結果

試料	砂粒区分		砂粒の種類構成						合計
			鉱物片				岩石片		
			石英	カリ長石	斜長石	緑簾石	チャート	多結晶石英	
F-6グリッド 第6層 No.179 サンプル土	砂	細礫							0
		極粗粒砂							0
		粗粒砂					1		1
		中粒砂	14	2					16
		細粒砂	81	3	5			1	90
		極細粒砂	66	1	9	1			77
		粗粒シルト	9	1	3	2			15
		中粒シルト	1						1
	基質								451
	孔隙								15
	備考		基質はセリサイト、褐色粘土、緑泥石などで埋められるが、粒間が孔隙化している部分も多い。チタン石あり。						

3.結果

(1)胎土薄片作製鑑定

結果を表 1、図 1、2 に示す。砂粒のほとんどは、細粒砂径および極細粒砂径の石英の鉱物片によって占められ、石英は中粒砂径および粗粒シルト径も少量伴い、石英以外の砂粒としては、少量のカリ長石と斜長石の鉱物片と微量の緑廉石の鉱物片および極めて微量のチャートと多結晶石英の岩石片が含まれている。砂粒全体の粒径組成は、ほぼ石英の鉱物片の粒径組成と等しい。また、砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物が約 30%を占め、孔隙は数%であり、基質が 70%程度である。

(2)蛍光 X 線分析

結果を表 2 に示す。SiO_2 が約 85%を占め、次いで Al_2O_3 が約 6%、T-Fe_2O_3 が約 2%、K_2O が約 1%であり、他の元素は 1%未満である。

表2. 蛍光X線分析結果

試料名	F-6グリッド 第6層 No.179 サンプル土
SiO_2	85.15
TiO_2	0.61
Al_2O_3	6.11
T-Fe_2O_3	2.06
MnO	0.02
MgO	0.35
CaO	0.40
Na_2O	0.43
K_2O	1.10
P_2O_5	0.17
Total	96.40

（単位:mass%）

4.考察

湧田村跡の背後に分布する丘陵は、新第三紀中新世の島尻層群下部を構成する豊見城層の中の上部に堆積する小禄砂岩部層により構成されている(氏家・兼子,2006)。したがって、試料の採取された第 6 層を構成する堆積物は、小禄砂岩部層に由来する風化再堆積物であると考えられ、薄片で確認された多量の石英の鉱物片や少量の長石類の鉱物片およびチャートや多結晶石英の岩石片などは、砂岩を構成していた粒子であったと考えられる。

蛍光 X 線分析により得られた、SiO_2 が約 85%を占め、Al_2O_3 が約 6%という化学組成は、試料とされた堆積物が、ほとんど石英粒子によって構成されていることを示していると考えられる。薄片観察により、基質にはセリサイトや粘土鉱物などが認められたが、その割合は相対的に低く、前述したように実際に粘性のほとんど感じられない手触りもそのことを示唆している。したがって、今回の試料は、焼物の主原料である粘土にはなり得ないが、主原料の粘土の粘性を調整するなど、原材料の一部として使用されたか否かを検討することは可能である。

湧田古窯出土陶器の分析例は、パリノ・サーヴェイ株式会社(1996)に、6 点の甕の薄片観察と蛍光 X 線分

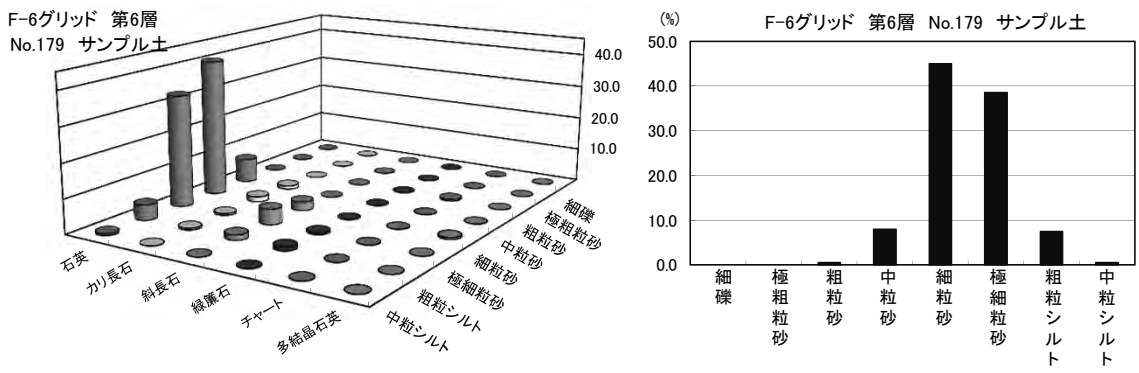


図 1. 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (%) および粒径組成

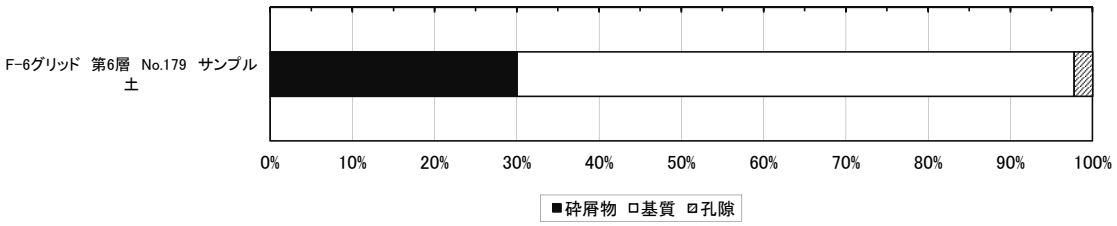


図 2. 砕屑物・基質・孔隙の割合

析の結果が示されている。陶器の薄片観察結果では、石英の鉱物片を主体とし、カリ長石と斜長石および緑廉石さらにはチャートの岩石片を含むなど、今回の試料における砂粒の種類構成と類似する結果が読み取れる。したがって、今回の試料が、湧田古窯で焼かれた陶器の原材料の一部として使用された可能性はあると考えられる。一方、陶器の蛍光 X 線分析の結果は、主原料である粘土の化学組成が強く反映されるため、今回の試料の化学組成とは、SiO_2 と Al_2O_3 の組成からして大きく異なっている(SiO_2 は 60～70%、Al_2O_3 は 20～25%)。したがって、化学組成からは、今回の試料の原材料としての可能性を検討することはできない。

Ⅱ.方形枠組遺構の分析

1.試料

試料は、F-5 グリッドで検出された方形枠組遺構内より採取されている。方形枠組遺構からは、有機物が混入する黒色土層が確認されており、ゴミ穴やトイレ遺構などに利用された可能性が指摘される。分析に用いるのは、この黒色土(サンプル土②)と、黒色土の上の層(サンプル土①)、下の層(サンプル土③)の、計 3 点である。これら 3 点について寄生虫卵分析、微細物分析、土壌理化学分析、脂肪酸分析を実施する。

2.分析方法

(1)寄生虫卵分析

試料 10cc を正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛, 比重 2.3)による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。同定に際しては、当社保有の現生標本の他、寄生虫卵は佐伯ほか(1998)、斉藤・田中(2007)等を、花粉化石は島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等を参考にする。

結果は、寄生虫卵については堆積物 1cc あたりに含まれる寄生虫卵の個数を一覧表として、花粉・胞子化石については同定および計数結果の一覧表として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。また、100 個体未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。また、寄生虫卵の密度と主要花粉化石群集の層位分布図としても表示する。なお、図中の寄生虫卵は堆積物 1cc あたりに含まれる個数を示し、花粉・胞子化石は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出した相対頻度で示す。なお、木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を＋で表示するにとどめておく。

(2)微細物分析

試料 75～150cc を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、種実や炭化材(主に径 4mm 以上)、骨貝類などの遺物をピンセットで抽出する。抽出物の個数と 70℃48 時間乾燥後の重量を求めて結果を一覧表で示す。炭化材は重量と最大径(mm)を表示する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保存する。

(3)土壌理化学分析

F-5 グリッドで検出された方形枠組遺構は、ゴミ穴やトイレ遺構として利用された可能性が考えられているため、本調査では尿中に含まれているであろう窒素、リン酸、カリウム、ナトリウム、塩素イオン、尿中のタンパク

質に含まれる硫酸イオン、硝酸イオンを中心に検討するために土壌の pH(H_2O)、電気伝導率、水溶性陽イオン(カルシウム・マグネシウム・ナトリウム・カリウム)と陰イオン(塩素・硫酸・硝酸)、有機炭素、全窒素、全リン酸について分析を実施する。pH(H_2O)はガラス電極法、電気伝導率は白金電極法、水溶性カルシウム・マグネシウム・ナトリウム・カリウムは水抽出－原子吸光法、水溶性塩素・硫酸・硝酸イオンは水抽出－液体クロマトグラフィー法、有機炭素はチューリン法、全窒素量は硫酸分解－水蒸気蒸留法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法(土壌標準分析・測定法委員会,1986;土壌環境分析法編集委員会,1997)に準ずる。以下に各項目の操作工程を示す。

1)試料調整

試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2)pH(H_2O)

風乾細土試料 10.0g を秤りとり、25ml の純水を加えてガラス棒で撹拌する。1 時間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pH 計(ガラス電極法)で pH 値を測定する。

3)電気伝導率[EC]

風乾細土試料 10.0g を秤りとり、50ml の純水を加えて 1 時間振とうする。振とう後、すみやかに電気伝導率計(白金電極法)で電気伝導率(dS/m)を測定する。

4)水溶性カルシウム・マグネシウム・ナトリウム・カリウムイオン[W-Ca^{2+}, Mg^{2+}, Na^{+}, K^{+}]

電気伝導度で抽出した水溶液をメンブランフィルターを用いて濾過した後、原子吸光法により各イオン濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの水溶性カルシウム・マグネシウム・ナトリウム・カリウム量を求める。結果は mg/kg で表示する。

5)水溶性塩素・硫酸・硝酸イオン[W-Cl^{-}, SO_4^{2-}, NO_3^{-}]

電気伝導率で抽出した水溶液をメンブランフィルターを用いて濾過した後、液体クロマトグラフィーにより各イオン濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの水溶性塩素・硫酸・硝酸イオン量を求める。結果は mg/kg で表示する。

6)有機炭素

粉砕土試料 0.100～0.700g を 100ml 三角フラスコに正確に秤とり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C 乾土%)を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量(%)を算出する。

7)全窒素

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤とり、分解剤約 3.0g と硫酸 10ml を加え加熱分解する。分解後、蒸留水約 30ml を加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量(T-N%)を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

8)リン酸含量

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO_3)約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸($HClO_4$)約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。測定

値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P_2O_5mg/g)を求める。

(4)脂肪酸分析

分析は、坂井ほか(1996)に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール(2:1)を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸−メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム(ULBON,HR-SS-10,内径 0.25mm,長さ 30m)を装着したガスクロマトグラフィー(GC-14A,SHIMADZU)を使用した。注入口温度は 250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム (J&W SCIENFIC,DB-1,内径 0.36mm、長さ 30m)を装着する。注入口温度は 320℃、カラム温度は 270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

3.結果

(1)寄生虫卵分析

結果を表 3、図 3 に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。寄生虫卵は、サンプル土①から回虫卵が、サンプル土③から回虫卵、鞭虫卵、槍形吸虫卵近似種が検出されたものの、いずれも含量は少なく 1cc あたり 100 個未満であった。

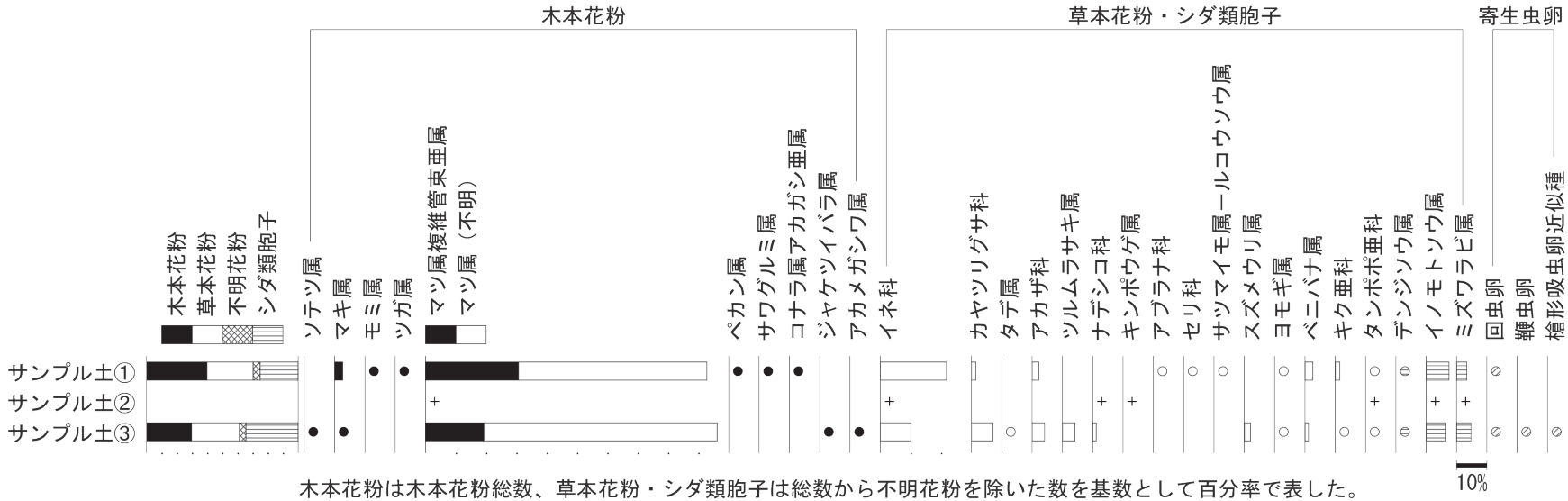
花粉化石の検出状況も良好といえず、サンプル土①および③から、かろうじて定量解析が行えるだけの個体数を得ることができた。保存状態も、花粉外膜が破損あるいは溶解しているなど、悪いものが多く認められた。花粉群集組成は、サンプル土①、③のいずれも類似しており、木本花粉ではマツ属が優占する。その他ではソテツ属、マキ属、モミ属、サワグルミ属、コナラ属アカガシ亜属、ジャケツイバラ属、アカメガシワ属等が認められる。草本花粉はイネ科が多く、カヤツリグサ科、アカザ科、ツルムラサキ属、ナデシコ科、スズメウリ属、ヨモギ属、ベニバナ属、キク亜科、タンポポ亜科等を伴う。また、水生シダ類のデンジソウ属、ミズワラビ属等も検出された。花

表 3. 寄生虫卵分析結果

種　類	F-5グリッド方形石囲遺構 サンプル土①	サンプル土②	サンプル土③
寄生虫卵[個/cc]			
回虫卵	<100	−	<100
鞭虫卵	−	−	<100
槍形吸虫卵近似種	−	−	<100
花粉・胞子数[個/cc]	200	<100	200
木本花粉			
ソテツ属	−	−	1
マキ属	3	−	1
モミ属	1	−	−
ツガ属	1	−	−
マツ属複維管束亜属	34	5	20
マツ属（不明）	69	7	80
ペカン属	1	−	−
サワグルミ属	1	−	−
コナラ属アカガシ亜属	1	−	−
ジャケツイバラ属	−	−	1
アカメガシワ属	−	−	1
草本花粉			
イネ科	58	11	34
カヤツリグサ科	4	−	24
タデ属	−	−	3
アカザ科	6	−	14
ツルムラサキ属	−	−	14
ナデシコ科	−	1	4
キンポウゲ属	−	1	−
アブラナ科	1	−	−
セリ科	1	−	−
サツマイモ属ールコウソウ属	1	−	−
スズメウリ属	−	−	7
ヨモギ属	1	−	3
ベニバナ属	7	−	4
キク亜科	4	−	2
タンポポ亜科	2	1	2
不明花粉			
不明花粉	13	1	15
シダ類胞子			
デンジソウ属	1	−	1
イノモトソウ属	20	5	21
ミズワラビ属	9	1	16
他のシダ類胞子	40	5	83
合　計			
木本花粉	111	12	104
草本花粉	85	14	111
不明花粉	13	1	15
シダ類胞子	70	11	121
合計(不明を除く)	266	37	336

1)寄生虫卵、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

2)<100：100個体未満。



木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。

○●は 1% 未満、+ は木本花粉 100 個未満の試料において検出された種類を示す。

図 3.　花粉化石群集・寄生虫卵

粉・胞子数は、いずれの試料も 1cc あたり約 200 個である。

サンプル土②は、花粉含量が少なく、花粉・胞子数は 1cc あたり 100 個未満であった。木本花粉ではマツ属が、草本花粉ではイネ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、タンポポ亜科が、シダ類胞子ではイノモトソウ属、ミズワラビ属がわずかに検出されるのみである。

(2)微細物分析

結果を表 4 に示す。サンプル土①～③の 3 試料を通じて、炭化材が 1.04g、不明炭化物が 39 個(0.07g)、動物遺存体が 75 個(0.16g)、磁着物質が 1 個(0.01g 未満)確認された。

炭化材は、サンプル土②で最も多く、サンプル土①が次ぎ、サンプル土③は少ない。炭化材の最大径は、10.4mm を測る。

表4. 微細物分析結果

	F-5グリッド方形石囲遺構			
	サンプル	サンプル	サンプル	
種類	土①	土②	土③	単位
炭化材	0.43	0.59	0.02	重量(g)
	7.8	10.4	4.5	最大径(mm)
不明炭化物	17	22		個
	0.02	0.05		重量(g)
動物遺存体				
巻貝類	9	1	2	個
	0.01	0.01	<0.01	重量(g)
貝類	18	8	17	個
	0.08	0.04	<0.01	重量(g)
骨片	4	7		個
	<0.01	0.02		重量(g)
魚類の鱗	7			個
	<0.01			重量(g)
ウニ類の棘	2			個
	<0.01			重量(g)
無機物				
磁着物質	1			個
	<0.01			重量(g)
分析残渣	65.5	9.6	6.9	重量(g)
分析量	150	75	110	容量(cc)
	257	97	147	重量(g)

動物遺存体は、サンプル土①で最も多く、サンプル土③が次ぐ。現時点では、巻貝類 12 個(0.02g)、貝類の破片 43 個(0.12g)、骨片 11 個(0.02g)、魚類の鱗 7 個(0.01g 未満)、ウニ類の棘 2 個(0.01g 未満)の分類にとどめている。

(3)土壌理化学分析

結果を表 5 に示す。土色は、サンプル土①で 2.5Y3/3 暗オリーブ褐、サンプル土②で 10YR2/1 黒、サンプル土③で 2.5Y4/2 灰黄褐である。野外土性(ペドロジスト懇談会編,1984)は、サンプル土①が HC(重埴土)であり、サンプル土②が SiC(シルト質埴土)、サンプル土③が HC と、サンプル土②を挟むように粘質な土壌である。また、試料全てにおいて、石灰岩の破片が混入しており、炭酸塩の反応も強石灰質を呈した。炭酸塩の反応とは、炭酸カルシウムや菱鉄鉱〈炭酸第一鉄〉などが希酸と反応して炭酸ガスを放ち発泡することを利用して炭酸塩含量の判定を行うことである。炭酸カルシウムは、わが国では、石灰岩土壌中に石灰岩の破片として出現する。

pH(H_2O)は、7.6～7.8 と弱アルカリ性を示した。電気伝導率は、サンプル土①で 0.34dS/m、サンプル土②で 0.48dS/m、サンプル土③で 0.40dS/m と比較的高い値を示している。

表 5. 土壌理化学分析結果

地点	試料名	土色		土性	pH(H_2O)	電気伝導率 EC (dS/m)	水溶性イオン(mg/kg) 陽イオン				陰イオン			有機炭素	腐植	全窒素	C/N	全リン酸 P_2O_5	備考
							Ca^{2+}	Mg^{2+}	Na^{+}	K^{+}	Cl^{-}	SO_4^{2-}	NO_3^{-}	(%)	(%)	(%)		(mg/g)	炭酸塩の反応
F-5グリッド方形枠組遺構	サンプル土①	2.5Y3/3	暗オリーブ褐	HC	7.8	0.34	133	5	158	36	39	273	97	1.28	2.21	0.12	11	14.4	強石灰質
	サンプル土②	10YR2/1	黒	SiC	7.6	0.48	263	11	213	49	97	434	156	1.76	3.03	0.11	16	27.9	強石灰質
	サンプル土③	2.5Y4/2	灰黄褐	HC	7.8	0.40	195	6	147	55	42	150	156	0.88	1.52	0.12	7	11.0	強石灰質

1) 土性：土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)の野外土性による。
HC･･･重埴土(粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%)
SiC･･･シルト質埴土(粘土25～45%、シルト45～75%、砂0～30%)
2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修,1967)による。
3) 腐植：有機炭素量×1.724
4) C/N：有機炭素量÷全窒素量
5) 炭酸塩の反応基準土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編,1984)

区分	基準
非石灰質	音によって発泡が認められない
弱石灰質	音によってのみ発泡が認められる
中石灰質	発泡が認められる
強石灰質	激しく発泡し、泡が薄い層を形成する
極強石灰質	非常に激しく発泡し、泡が厚い層を形成する

水溶性イオンは、サンプル土①において、カルシウムイオンが 133mg/kg、マグネシウムイオンが 5mg/kg、ナトリウムイオンが 158mg/kg、カリウムイオンが 36mg/kg、塩素イオンが 39mg/kg、硫酸イオンが 273mg/kg、硝酸イオンが 97mg/kg である。サンプル土②では、カルシウムイオンが 263mg/kg、マグネシウムイオンが 11mg/kg、ナトリウムイオンが 213mg/kg、カリウムイオンが 49mg/kg、塩素イオンが 97mg/kg、硫酸イオンが 434mg/kg、硝酸イオンが 156mg/kg である。サンプル土③では、カルシウムイオンが 195mg/kg、マグネシウムイオンが 6mg/kg、ナトリウムイオンが 147mg/kg、カリウムイオンが 55mg/kg、塩素イオンが 42mg/kg、硫酸イオンが 150mg/kg、硝酸イオンが 156mg/kg である。サンプル土①では、陽イオン種においてナトリウムイオン(Na^+)＞カルシウムイオン(Ca^{2+})＞カリウムイオン(K^+)＞マグネシウムイオン(Mg^{2+})となり、陰イオン種では硫酸イオン(SO_4^{2-})＞硝酸イオン(NO_3^-)＞塩素イオン(Cl^-)である。サンプル土②では、陽イオン種においてカルシウムイオン(Ca^{2+})＞ナトリウムイオン(Na^+)＞カリウムイオン(K^+)＞マグネシウムイオン(Mg^{2+})となり、陰イオン種では硫酸イオン(SO_4^{2-})＞硝酸イオン(NO_3^-)＞塩素イオン(Cl^-)である。サンプル土③では、陽イオン種においてカルシウムイオン(Ca^{2+})＞ナトリウムイオン(Na^+)＞カリウムイオン(K^+)＞マグネシウムイオン(Mg^{2+})となり、陰イオン種では硝酸イオン(NO_3^-)＞硫酸イオン(SO_4^{2-})＞塩素イオン(Cl^-)である。

腐植含量は、サンプル土①で 2.21%、サンプル土②で 3.03%、サンプル土③で 1.52%である。全窒素は、サンプル土①で 0.12%、サンプル土②で 0.11%、サンプル土③で 0.12%であり、C/N 比はサンプル土①で 11、サンプル土②で 16、サンプル土③で 7 である。

全リン酸は、サンプル土①で 14.4mg/g、サンプル土②で 27.9mg/g、サンプル土③で 11.0mg/g であり、全試料で高い値である。

(4)脂肪酸分析

脂質分析については、脂肪酸ならびにステロールともに未検出である。分析中、エバポレーターにて抽出に用いた溶媒を除去した際、ナス型フラスコに痕跡が認められなかったことから、土壌に脂質がほとんど含まれていなかったと考えられる。

4.考察

F-5 グリッドの方形枠組遺構内の黒色土(サンプル土②)、黒色土の上の層(サンプル土①)、下の層(サンプル土③)について寄生虫卵分析を実施した結果、黒色土の上の層と下の層から、寄生虫卵が検出された。検出された種類は、回虫卵、鞭虫卵、槍形吸虫卵近似種であるが、いずれも 1cc あたり 100 個体以下と少ない。また、花粉化石の含量も 1cc あたり 200 個体程度と少なく、保存状態の悪いものが多く含まれる。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998 など)。寄生虫卵の分解に対する抵抗性も花粉化石と同程度とされていることから(黒崎ほか,1993)、方形枠組遺構内に堆積した花粉・寄生虫卵は、経年変化により分解され、分解に強い種類が選択的に残された可能性がある。

微細物分析からは、黒色土およびその上下層の 3 試料を通じて、炭化材、不明炭化物、動物遺存体、磁着物質が確認された。炭化材は、黒色土で最も多く、黒色土の上の層が次ぎ、下の層は少ない。炭化材は、当時の本遺跡周辺域の森林に生育していた樹種に由来することが推定されるが、遺構内で炭化したのか、別の場所で炭化した木材が遺構内に廃棄されたのかについては、現段階で判断することはできない。今後、炭化材の樹種同定や周辺遺跡の類似事例の蓄積を行い、総合的に検討することが今後の課題である。

動物遺存体は、黒色土の上の層で最も多く、下の層が次ぐ。内容は、巻貝類、貝類の破片、骨片、魚類の鱗、ウニ類の棘などである。

一方、土壌の理化学性についてみると、水溶性イオンの総量では、黒色土で最も多く、黒色土の上下層はほぼ同様である。これは、粘質土である黒色土の上の層、下の層により塩基が溶脱しにくい環境であり、黒色土に蓄積したと考えられる。尿中に含まれているであろうカリウムイオン、ナトリウムイオン、塩素イオン、尿中のタンパク質に含まれる硫酸イオン、硝酸イオンを中心に評価すると、ナトリウムイオン、硫酸イオン、硝酸イオンが高いことが認められる。このことから、尿成分を排泄したなどの外的要因による可能性が考えられる。カルシウムイオンが高い値を示したが、この原因は試料が石灰質なためである可能性が高い。

C/N では、黒色土で 16 と高い値である。腐植酸量の分析を行ったところ、黒色土＞黒色土の上の層＞黒色土の下の層となり、腐植化の進行は下の層で最も進んでおり、上の層、および黒色土はほぼ同様の結果であった。このことから黒色土では、未分解有機物が多く含まれていることがわかる。これは、黒色土、上の層で炭化材が多く含まれる結果と一致する。窒素含量は全ての試料で 0.1%弱と腐植量に対しての変化はなく一般的な値であり、脱窒作用などにより減少したと考えられる。リン酸含量は、黒色土で他の試料より約 2 倍多い。ただし、沖縄土壌の一般的なリン酸含量の過去の類例(渡嘉敷,1993)と比較しても黒色土の上下層においてリン酸が高い値であることから、遺構内では糞尿成分やゴミ廃棄、遺体痕跡などによるリン酸の富化が起こった可能性が考えられる。

また、脂肪酸については、黒色土およびその上下層のいずれからも、検出されなかったことから、元々含まれにくかった、あるいは経年変化により消失した可能性が想定される。

方形枠組遺構は、調査所見からゴミ穴、あるいはトイレ遺構の可能性が指摘されている。トイレ遺構の検証については、1)寄生虫卵の多産、2)食物残渣(可食植物の種実遺体、骨など)の産出、3)昆虫遺骸の産出、4)土壌理化学性(リンなどの過多、未分解物質が多いなど)、5)脂肪酸分析(コプロスタノールなどの多産)、6)花粉分析(花ごと食べる種類の多産)、7)珪藻分析(海産物付着種などの多産)などの複数の分析項目を組み合わせることにより、より詳細な情報を得ることが可能となる。今回、これらの多くを実施した結果、寄生虫卵が検出されるものの多産とは言えず、食物残渣としては骨片や魚類の残渣が可能性としてあげられる。また、糞尿成分に含まれるイオンが高く保持されており、リン酸も多いものの、脂肪酸は全く含まれていない。これらのことを考慮すると、トイレ遺構として利用した可能性があるものの、ゴミ穴としての利用とも考えられ、あるいは両方の機能を有していた可能性も挙げられる。

今回の分析では残存状況が良好でないことから、ゴミ穴あるいはトイレ遺構のどちらかとしての利用については明言できなかったが、今後、同一遺構内や周辺の同様の遺構の分析事例を蓄積して、評価・検証をしていくことが望まれる。

周辺植生については、検出された花粉化石群集から、マツ属をはじめとしてソテツ属、マキ属、モミ属等の針葉樹、常緑のコナラ属アカガシ亜属、落葉または常緑のジャケツイバラ属、アカメガシワ属、落葉のサワグルミ属等の生育が窺える。なお、現在沖縄に生育していないツガ属や消滅種であるペカン属については、より広域からの飛来や再堆積の可能性がある。一方、草本植生については、林縁や開けた林床など明るい場所に生育するイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ツルムラサキ属、ナデシコ科、スズメウリ属、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などが検出されることから、遺跡周辺やその周りの林縁などに生育していたものに由来すると思われる。水生シダ類のデンジソウ属、ミズワラビ属が検出されることから、周囲にこれらが生育する水湿地の存在が指摘される。また、栽培の可能性があるベニバナ属が検出されることから、当時の栽培利用の可能性も想定される。

引用文献

土壌環境分析法編集委員会編,1997,土壌環境分析法.博友社,427p.

土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法.博友社,354p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

黒崎　直・松井　章・金原正明・金原正子,1993,糞便堆積物の分析　ー特に寄生虫卵分析についてー.日本文化財科学会第 10 回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会,115-115.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察ー岩石学的・堆積学的によるー.日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集,120-121.

三宅　尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.

中村　純,1967,花粉分析.古今書院,232p.

中村　純,1980,日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ(図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集,91p.

農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1996,第 6 章自然科学分析.汐留遺跡-汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書-(第 3 分冊),汐留地区遺跡調査会,103-278.

ペドロジスト懇談会,1984,野外土性の判定.ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック,博友社,39-40.

佐伯秀治・升　秀夫・早川典之,1998,臨床検査シリーズ　寄生虫鑑別アトラスーオールカラー版ー.株式会社メディカルサイエンス社,162P.

斉藤崇人・田中義文,2007,寄生虫卵殻の形態分類.徳永重元博士献呈論集,パリノ・サーヴェイ株式会社,407-416.

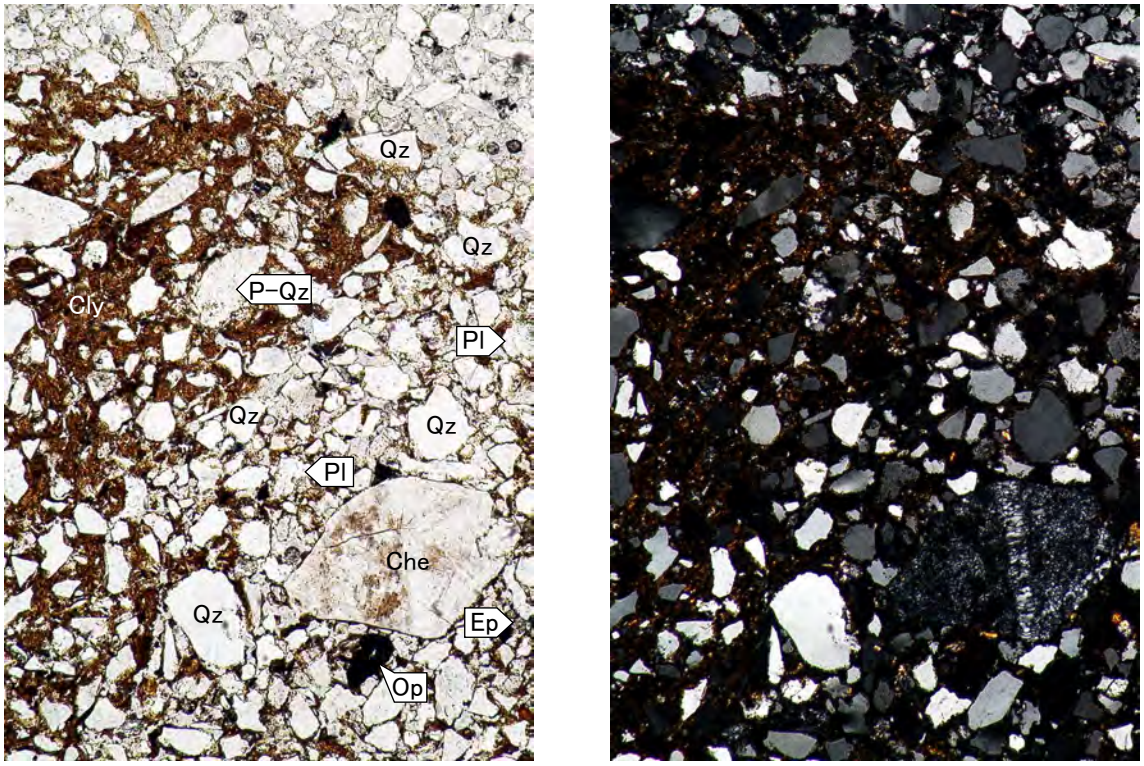
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄,1996,灯明皿の脂質分析.富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第 7 集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編) 第二分冊, 財団法人 富山県文化振興財団,24-37.

島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集,60p.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

氏家　宏・兼子尚知,2006,那覇及び沖縄市南部地域の地質.地域地質研究報告(5 万分の 1 図幅),産総研地質調査総合センター,48p.

図版1　土壌薄片



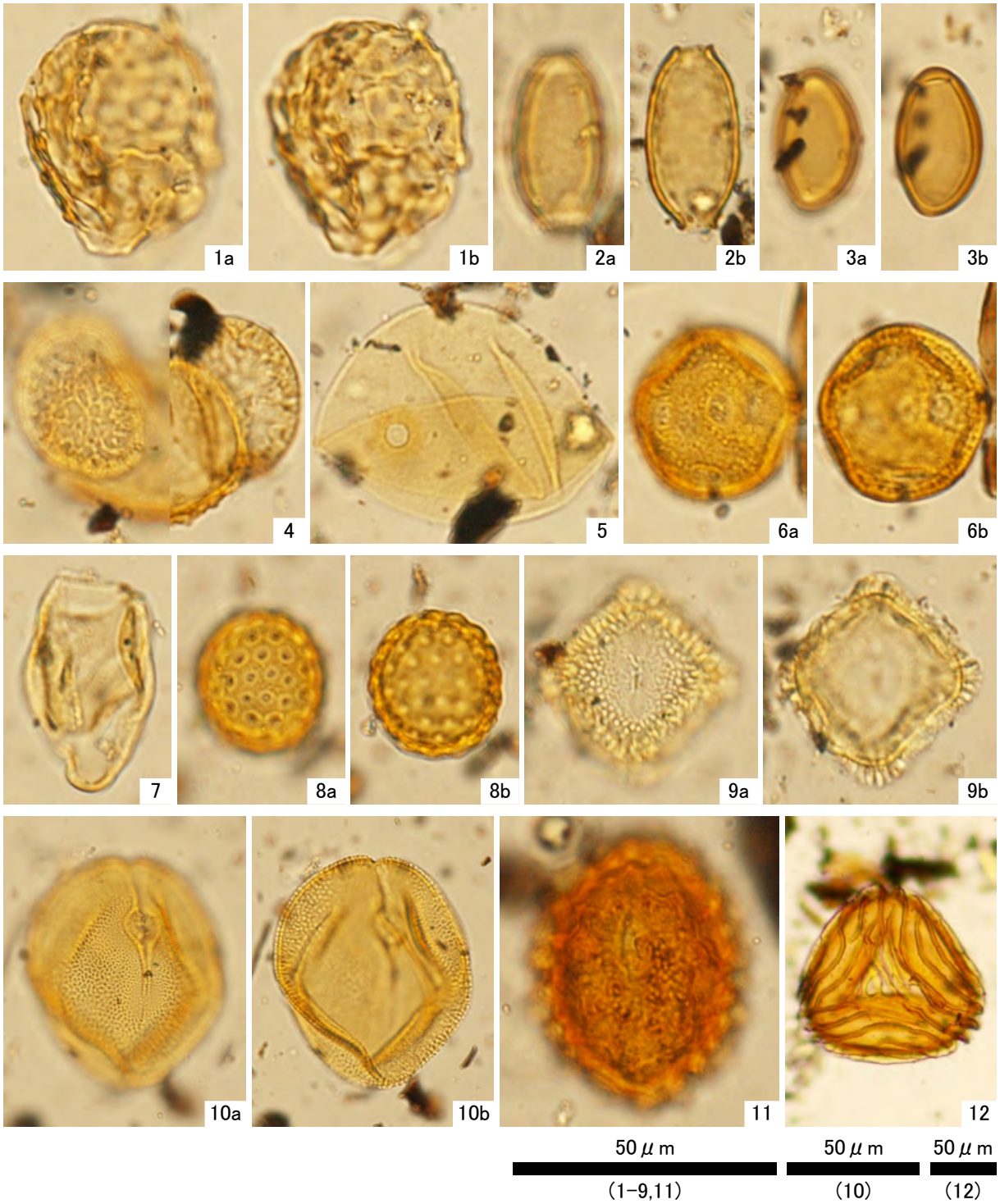
1. F-6グリッド　第6層　No.179　サンプル土

Qz:石英. Pl:斜長石. Ep:緑レン石. Op:不透明鉱物. Che:チャート.

P-Qz:多結晶石英. Cly:基質粘土.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図版2　寄生虫卵・花粉化石



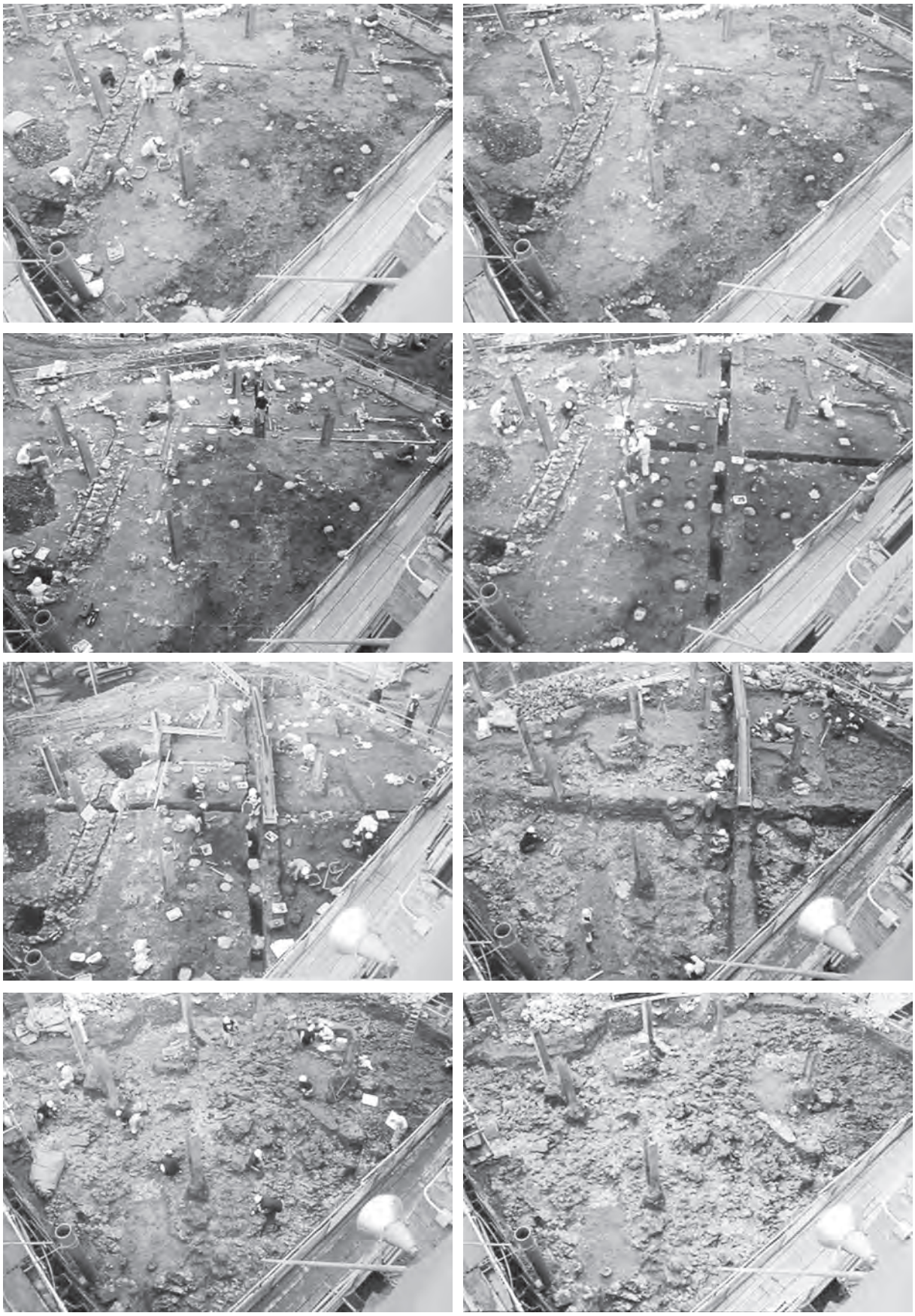
1．回虫卵(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
2．鞭虫卵(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
3．槍形吸虫卵近似種(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
4．マツ属(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土①)
5．イネ科(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
6．ナデシコ科(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
7．カヤツリグサ科(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土①)
8．アカザ科(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土①)
9．ツルムラサキ属(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
10．スズメウリ属(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
11．ベニバナ属(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)
12．ミズワラビ属(F-5グリッド方形石囲遺構;サンプル土③)

図　　版

図版1　調査の状況

1段目左：遠景（北から）
2段目左：遠景（北から）
3段目左：完掘の状況（南東から）
4段目左：調査終了後の状況（南から）

1段目右：遠景（北東から）
2段目右：遠景（北から）
3段目右：石製品の搬出状況
4段目右:調査終了後の状況（北西から）



図版2　遺跡の全景

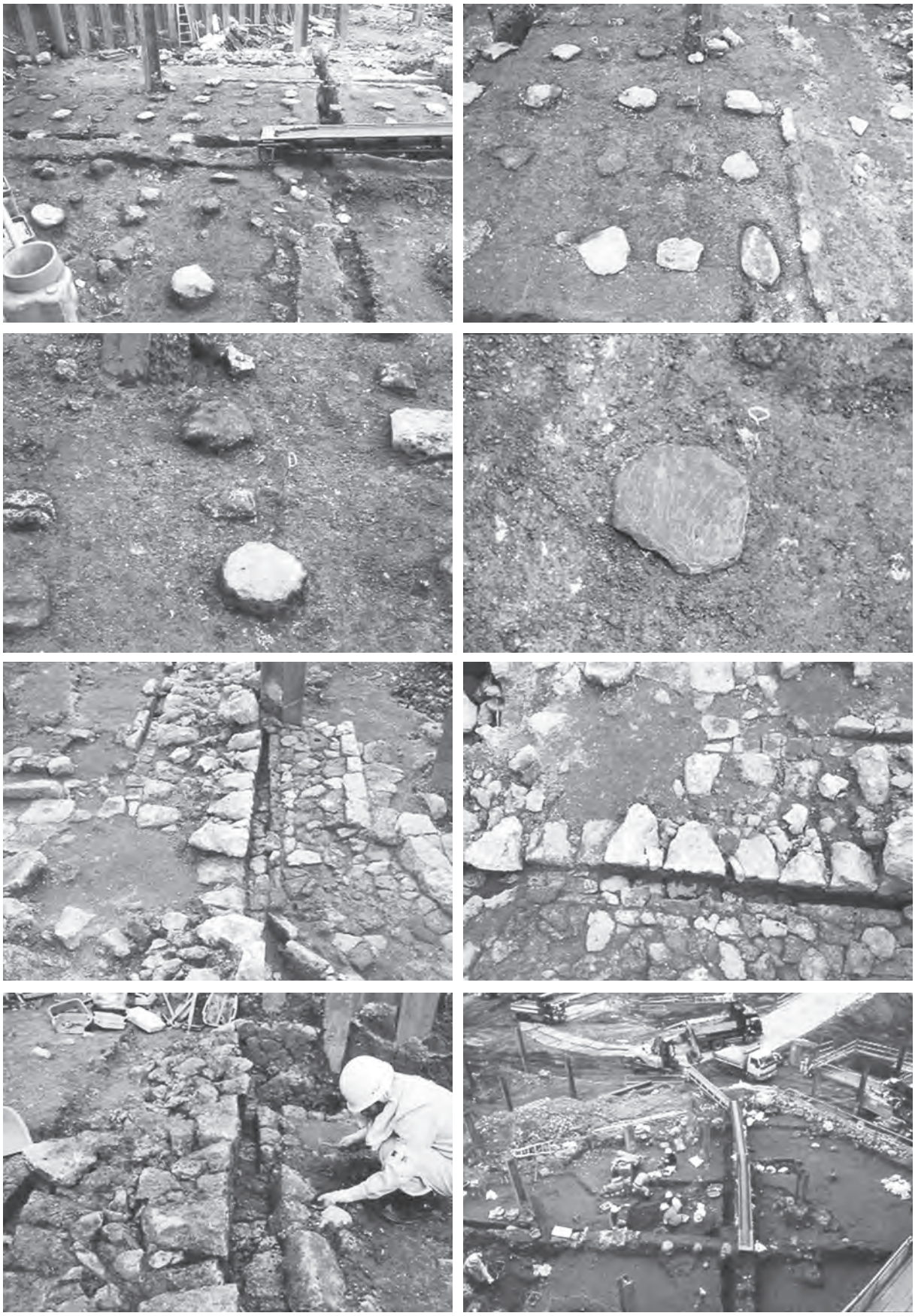
1段目左：遺構精査の状況
2段目左：遺構精査の状況
3段目左：遺構掘下げの状況
4段目左：完掘の状況

1段目右：遺構精査の状況
2段目右：礎石検出の状況
3段目右：遺構掘下げの状況
4段目右：完掘の状況

図版3　遺跡の層序

1段目左：基本ベルト設定状況
2段目左：E－6東西畦セクション
3段目左：E－5グリッド東畦実測作業状況
4段目左：C－7グリッド南北壁

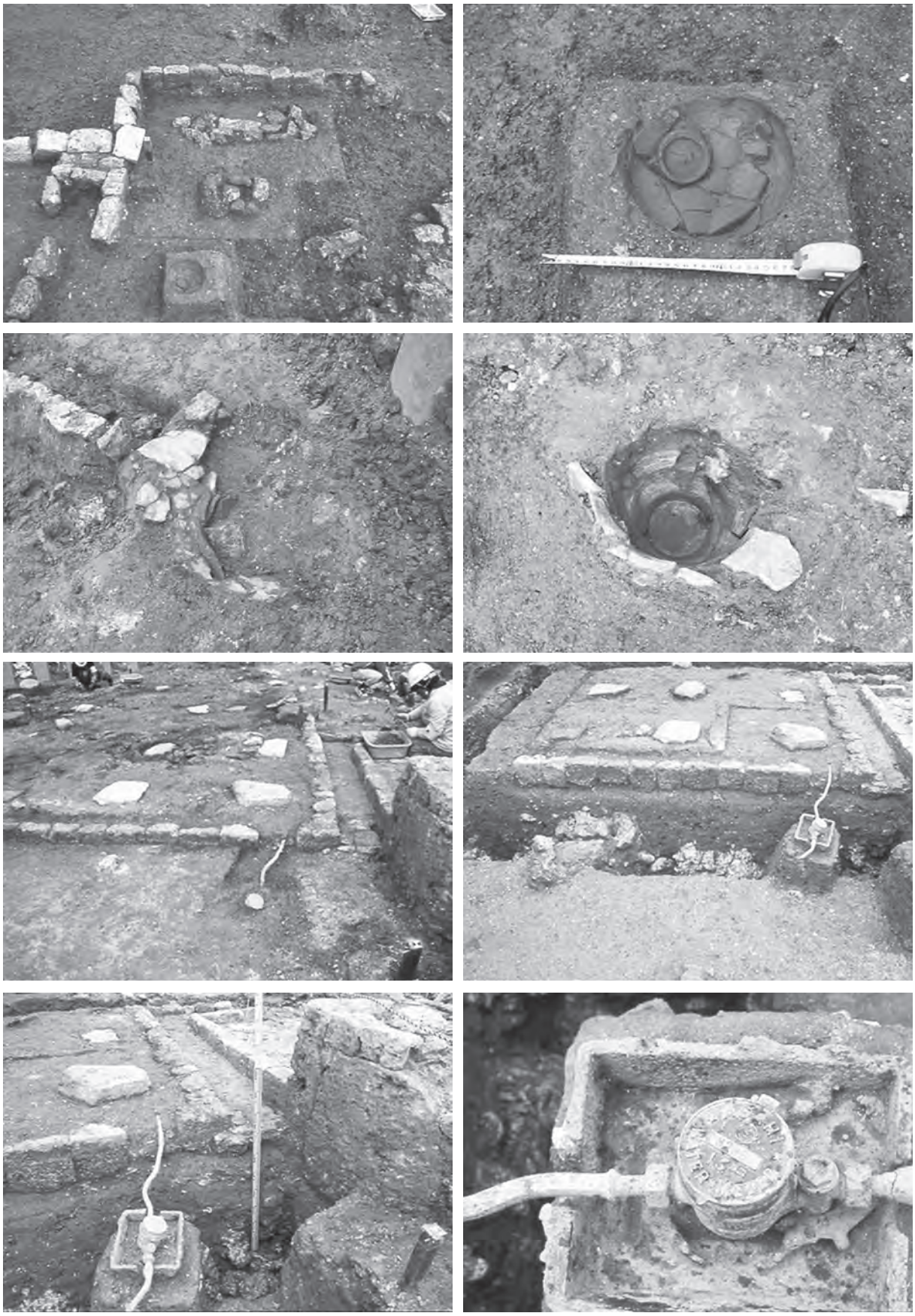
1段目右：基本ベルト設定状況
2段目右：E－5東西畦
3段目右：F・E－7南北壁
4段目右：E－7南北壁



図版4　建物跡の状況

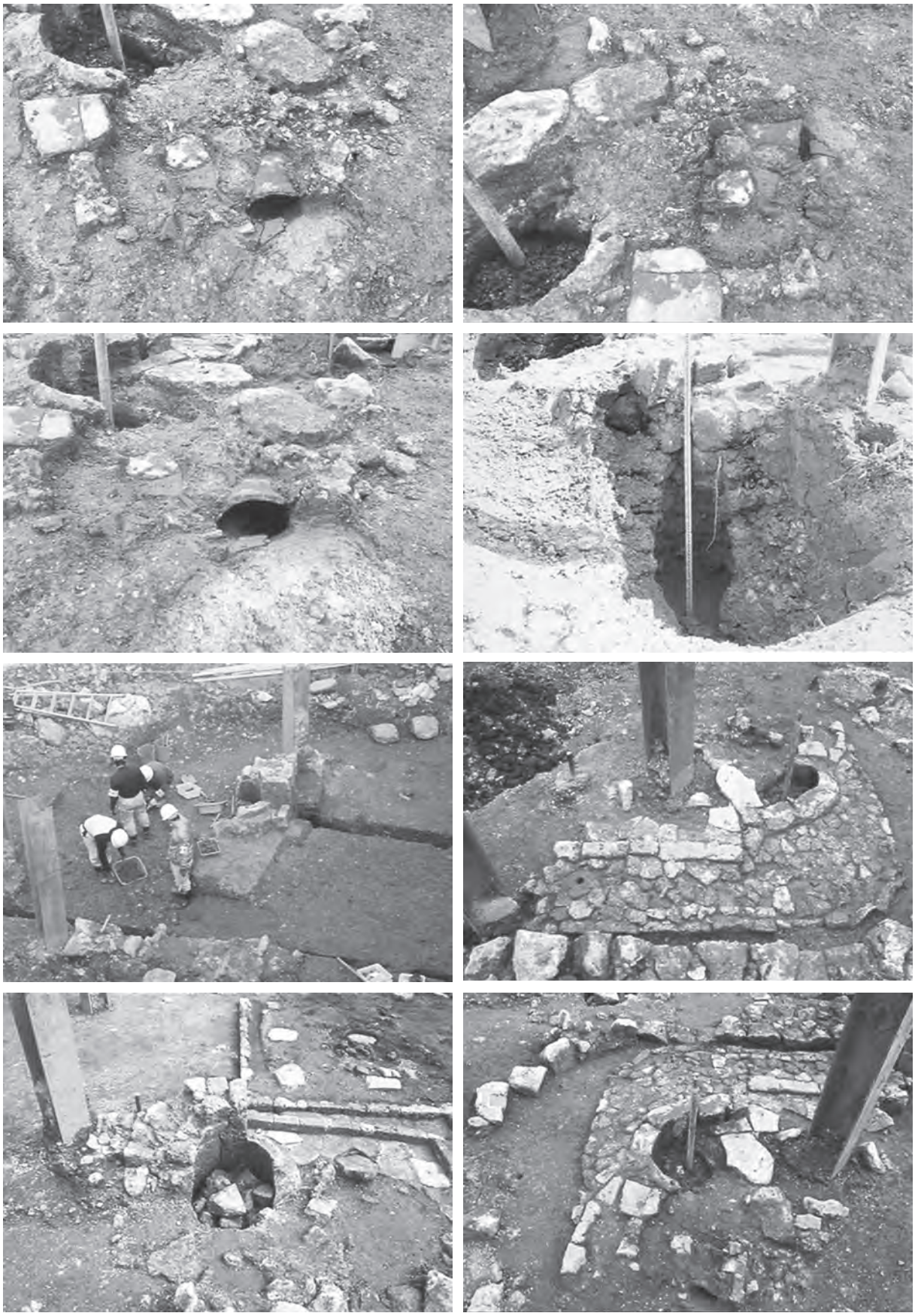
1段目左：礎石の近景
2段目左：礎石の近景
3段目左：排水施設の状況
4段目左：排水施設の状況

1段目右：礎石の近景
2段目右：礎石の近景（F－6グリッド）
3段目右：排水施設の状況
4段目右：建物跡の掘下げ状況



図版5　建物跡の状況及び第1・4号埋甕遺構

1段目左：第4号埋甕遺構（C －7）の出土状況　1段目右：第4号埋甕遺構（C －7）の出土状況
2段目左：第1号埋甕遺構（D－8）の出土状況　2段目右：第1号埋甕遺構（D －8）の完掘状況
3段目左：水道メーターの出土検出状況　3段目右：水道メーターの出土状況
4段目左：水道メーターの出土検出状況　4段目右：水道メーターの近景



図版6　第１号井戸及び第２号井戸の状況

1段目左:第1号井戸の検出状況（排水施設）
2段目左:第1号井戸の検出状況（排水施設）
3段目左：第1号井戸の全景
4段目左：第2号井戸の全景

1段目右：第1号井戸の検出状況
2段目右：第1号井戸の半裁状況
3段目右：遺構掘下げの状況
4段目右：第2号井戸の全景

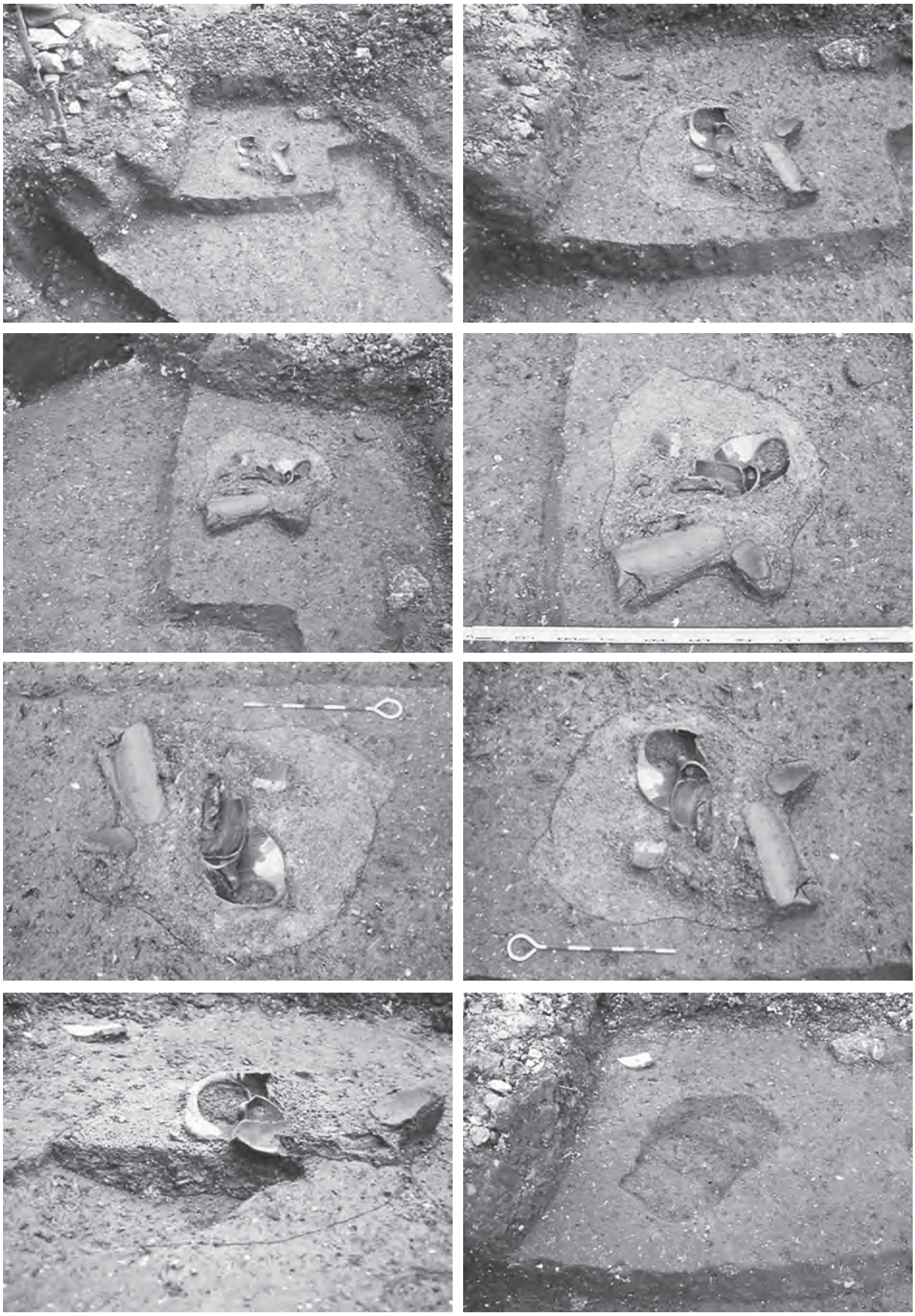
図版7 第2号井戸の状況

1段目左：第2号井戸の近景
2段目左：第2号井戸の近景
3段目左：第2号井戸の近景（遺物出土状況）
4段目左：第2号井戸の半裁状況

1段目右：第2号井戸№2の近景
2段目右：第2号井戸№2の近景
3段目右：第2号井戸の半裁作業状況
4段目右：第2号井戸№2の半裁状況

図版8　第1号遺物廃棄遺構の状況

1段目左：遺構の検出状況（右端）　1段目右：掘下げ作業の状況
2段目左：遺構の近景　2段目右：遺構の近景
3段目左：遺構の近景　3段目右：遺構の近景
4段目左：完掘の状況　4段目右：完掘の状況

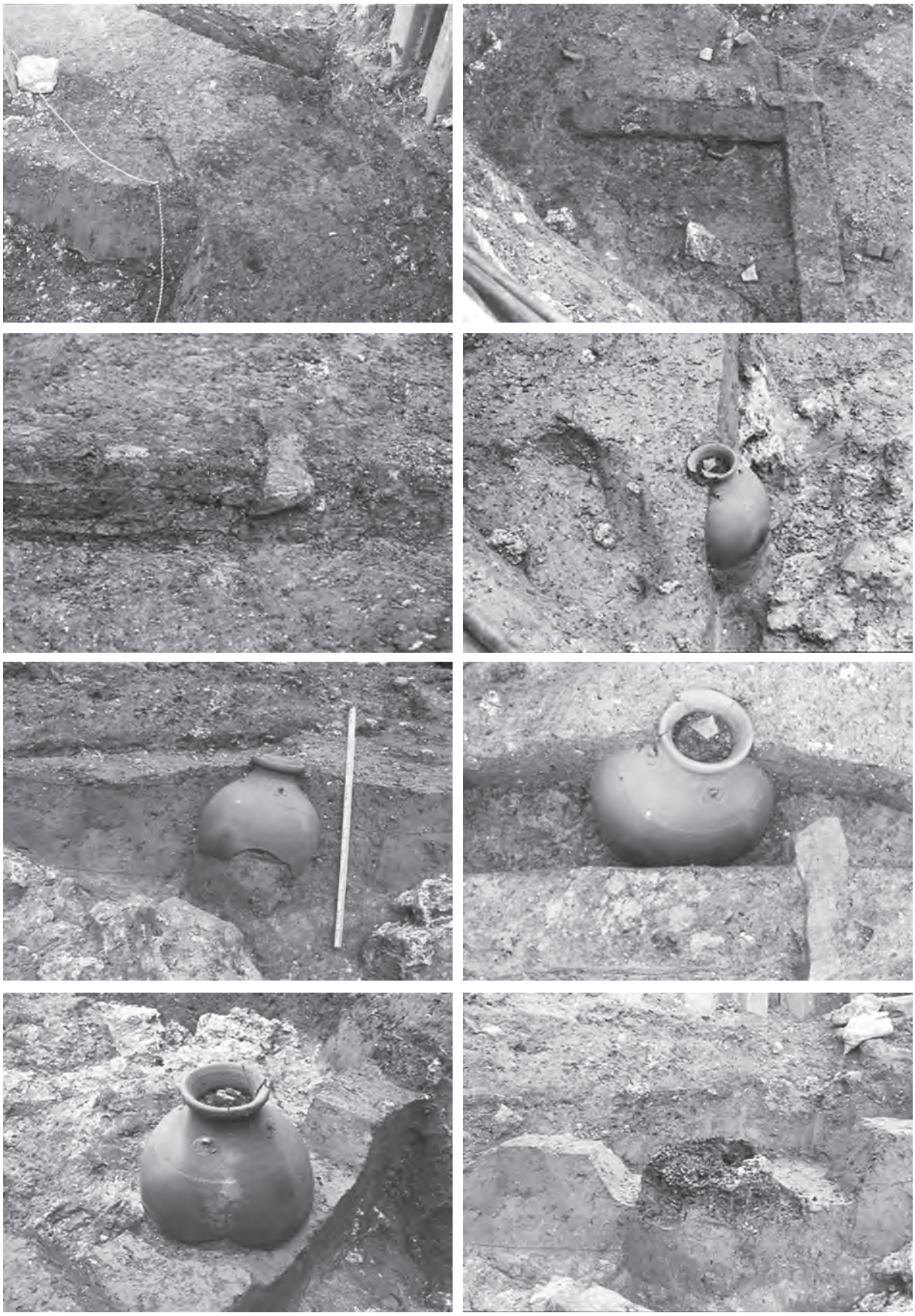


図版9　第2号遺物廃棄遺構の状況

1段目左：遺構の検出状況（南から）　1段目右：遺構の検出状況（南から）
2段目左：遺構の検出状況（東から）　2段目右：遺構の検出状況（東から）
3段目左：遺構の検出状況（北から）　3段目右：遺構の検出状況（南から）
4段目左：遺構の半裁状況（南から）　4段目右：完掘の状況

図版 10　第3号遺物廃棄遺構の状況

1段目左：遺構の検出状況（西から）　1段目右：遺構の検出状況（北東から）
2段目左：遺構の近景（北東から）　2段目右：遺構の近景（北東から）
3段目左：遺構の半裁状況（南から）　3段目右：遺構の半裁状況（西から）
4段目左：完掘の状況　4段目右：完掘の状況

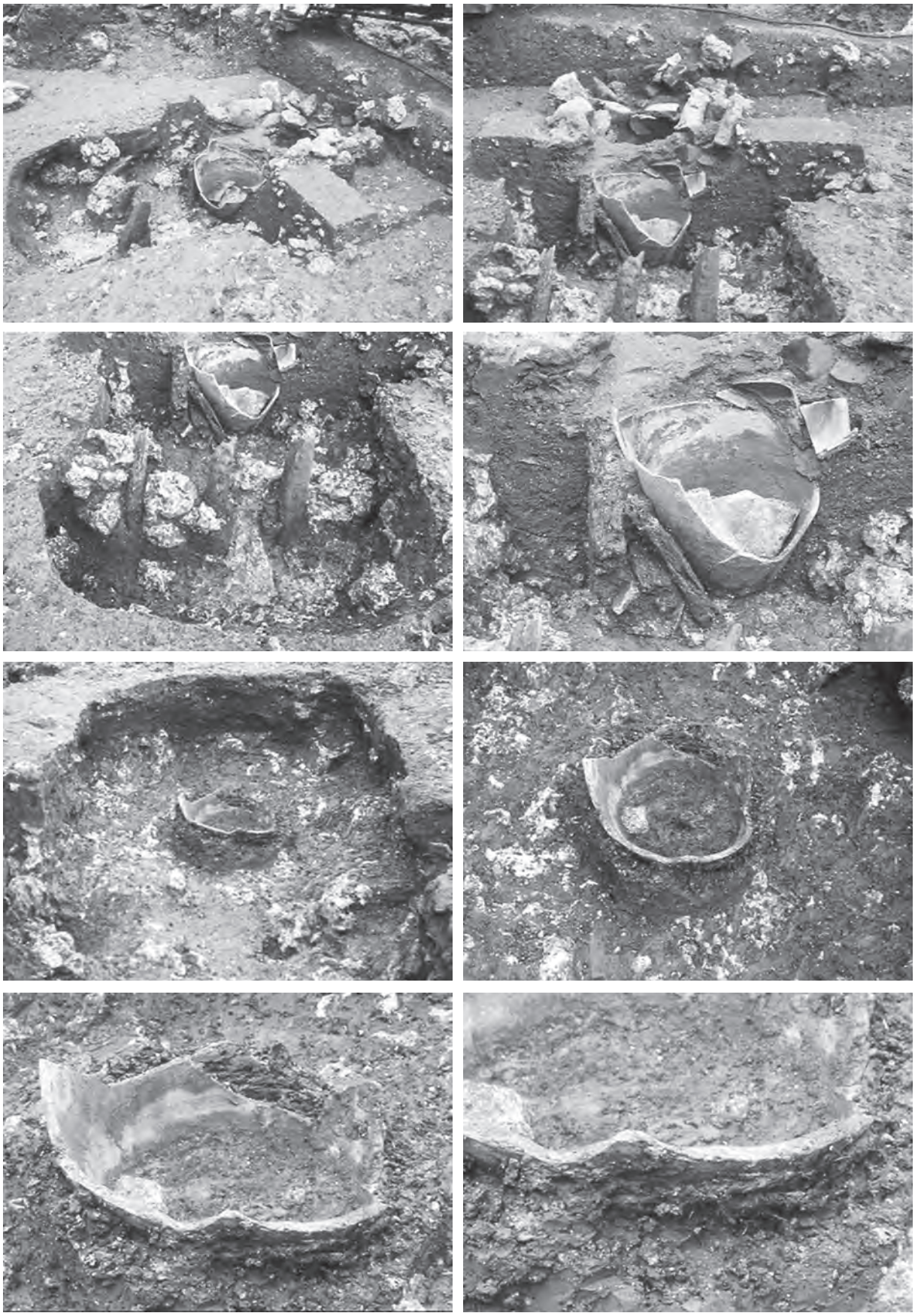


図版 11　第2号埋甕遺構の状況

1段目左：遺構の検出状況（西から）　1段目右：遺構の検出状況（南東から）
2段目左：遺構の半裁状況（北東から）　2段目右：遺構の半裁状況（南東から）
3段目左：遺構の半裁状況（北東から）　3段目右：遺構の半裁状況（北東から）
4段目左：遺構の近景（西から）　4段目右：完掘の状況

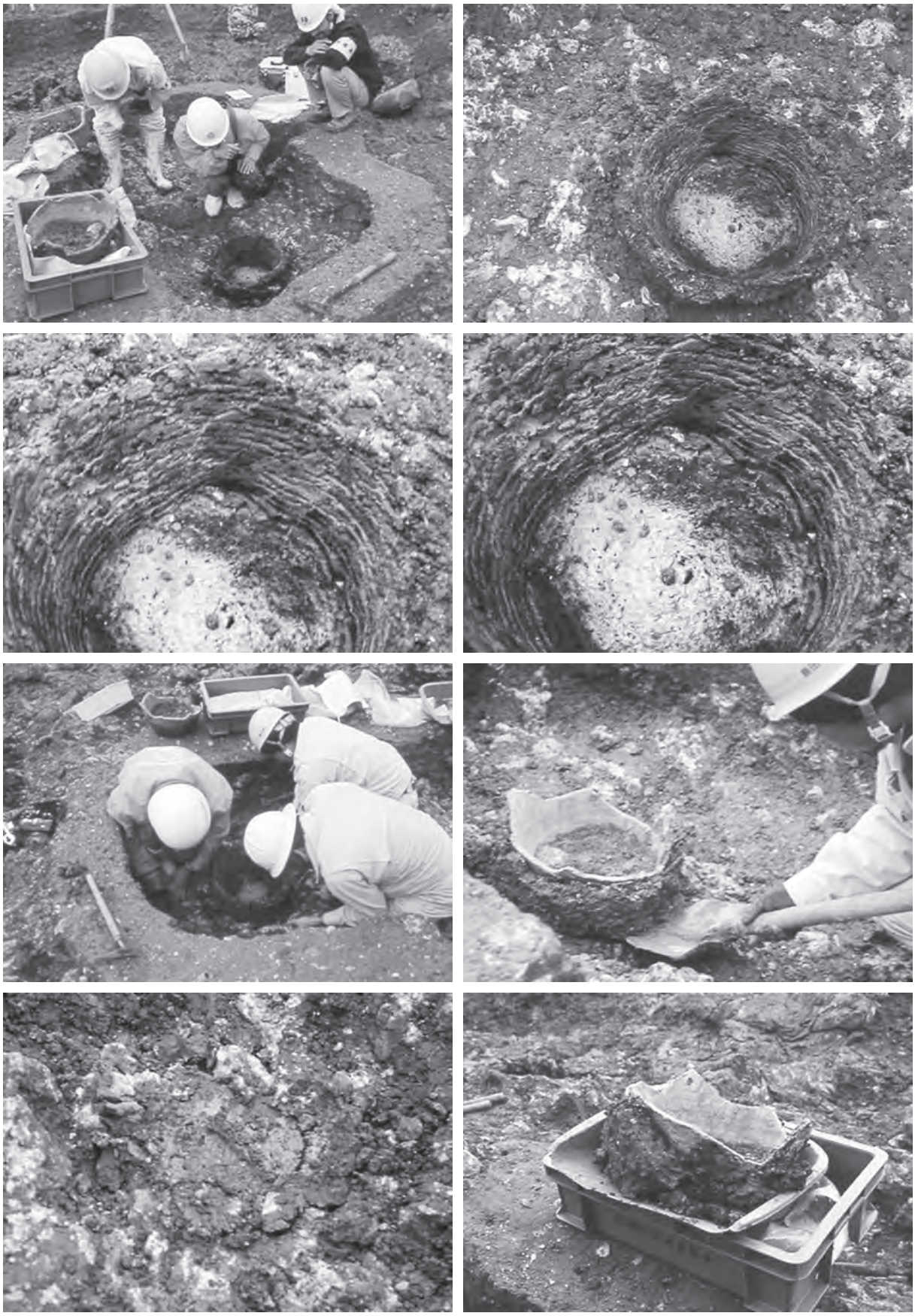
図版 12　第3号埋甕遺構の状況

1段目左：遺構の検出状況（南西から）　1段目右：遺構の近景（南東から）
2段目左：遺構の近景（南西から）　2段目右：遺構の近景（南西から）
3段目左：遺構の近景（南東から）　3段目右：遺構の近景（北東から）
4段目左：遺構の全景（北東から）　4段目右：遺構の撮影作業状況



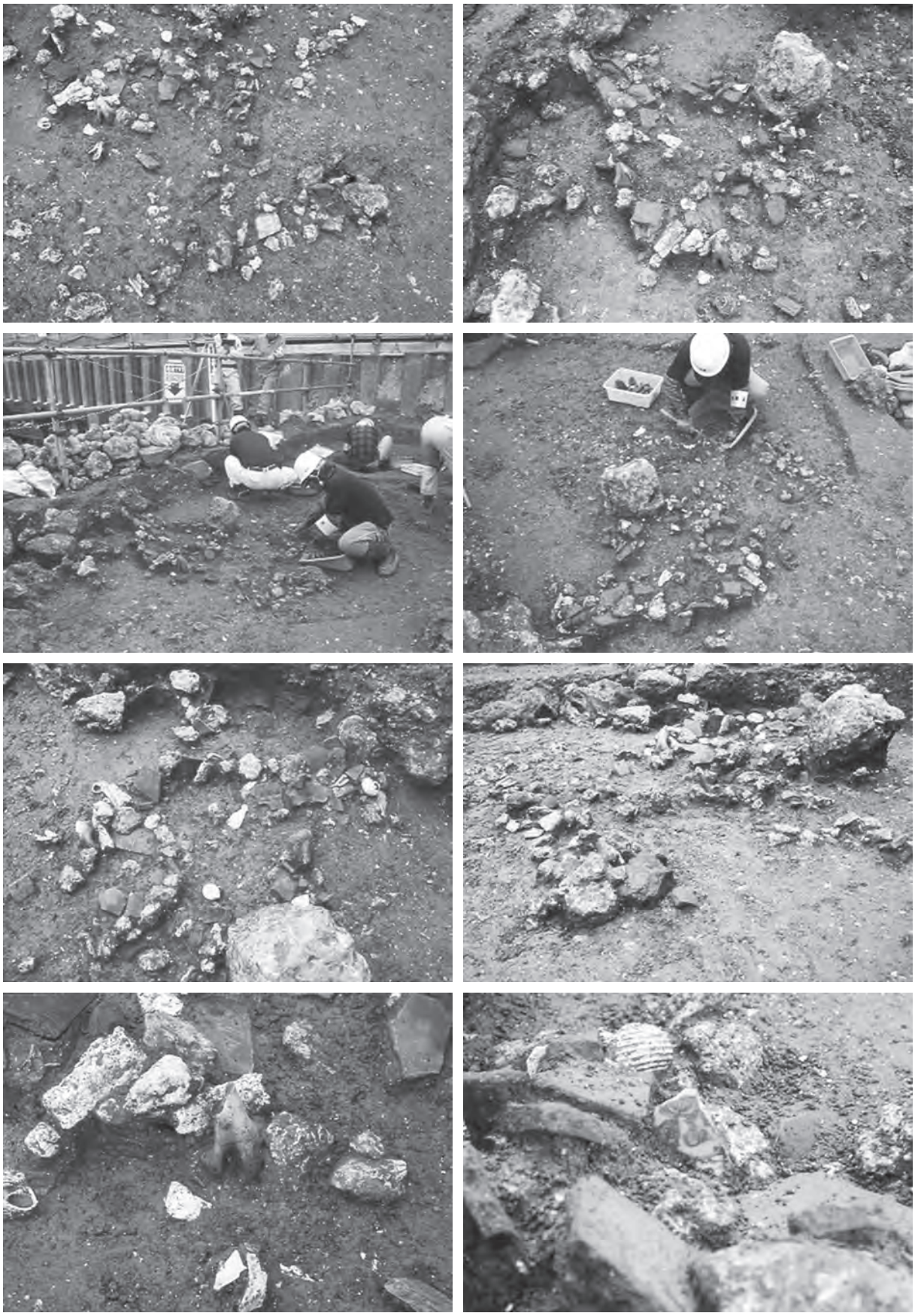
図版 13　第3号埋甕遺構の状況

1段目左：遺構の全景（東から）　1段目右：遺構の近景（南東から）
2段目左：遺構の近景（南西から）　2段目右：甕№2の状況（南東から）
3段目左：甕№1の状況（南東から）　3段目右：甕№1の状況（北東から）
4段目左：甕№1の近景（縄が巻き付く）　4段目右：甕№1の近景（縄が巻き付く）



図版 14　第3号埋甕遺構の状況（埋甕№1）

1段目左：埋甕№1の検出状況（北から）　1段目右：埋甕№1縄の近景（南東から）
2段目左：埋甕№1縄の近景（南から）　2段目右：埋甕№1縄の近景（南から）
3段目左：埋甕№1の作業状況（南西から）　3段目右:埋甕№1の作業状況（南東から）
4段目左：埋甕№1の完掘状況　4段目右：埋甕№1取上げ後の状況



図版 15　遺物集中部の状況

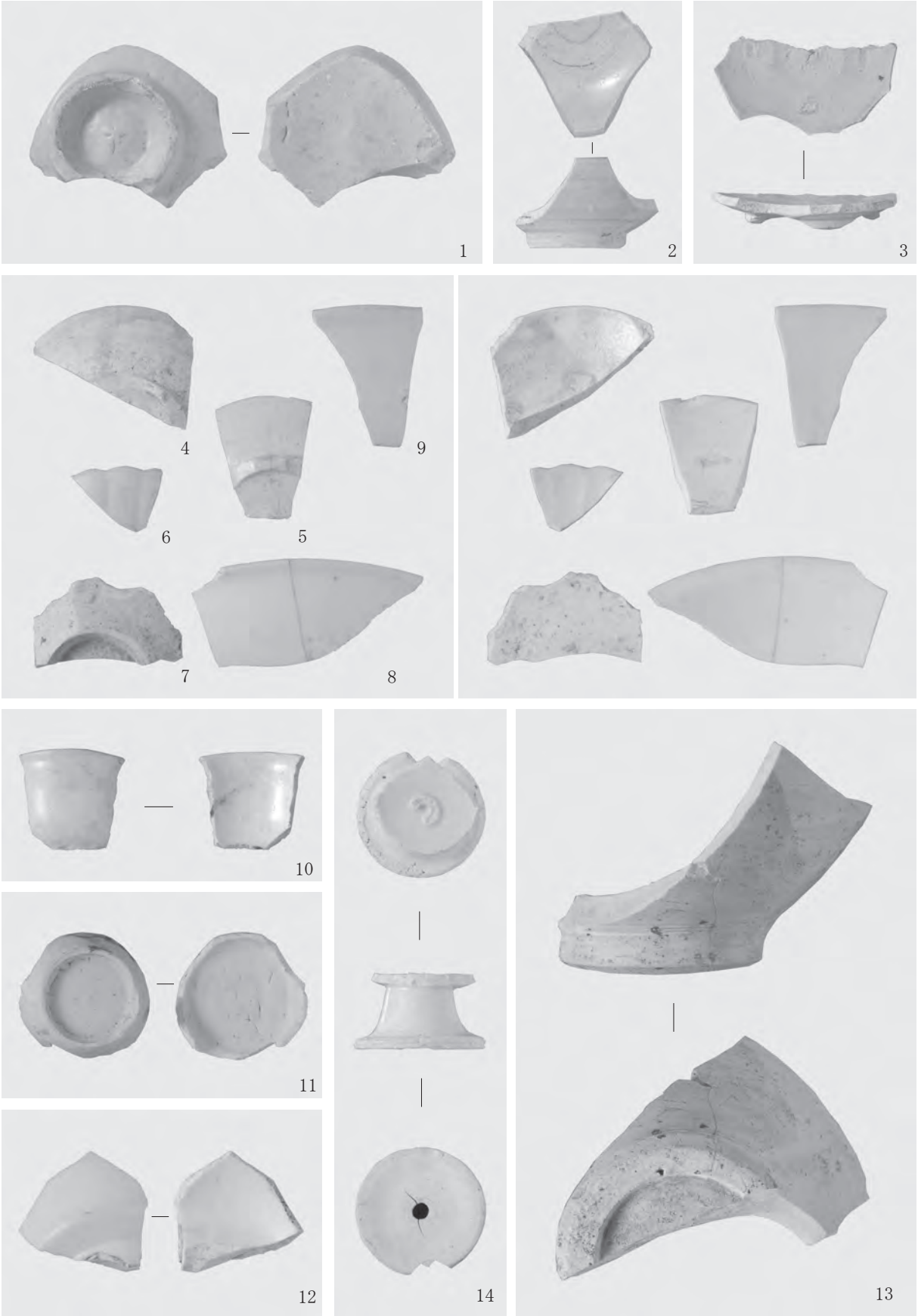
1段目左：検出状況（北西から）
2段目左：作業状況（南東から）
3段目左：検出状況（南西から）
4段目左：近景（獣骨）

1段目右：検出状況（西から）
2段目右：作業状況（北から）
3段目右：検出状況（南西から）
4段目右：近景（中国産青花）

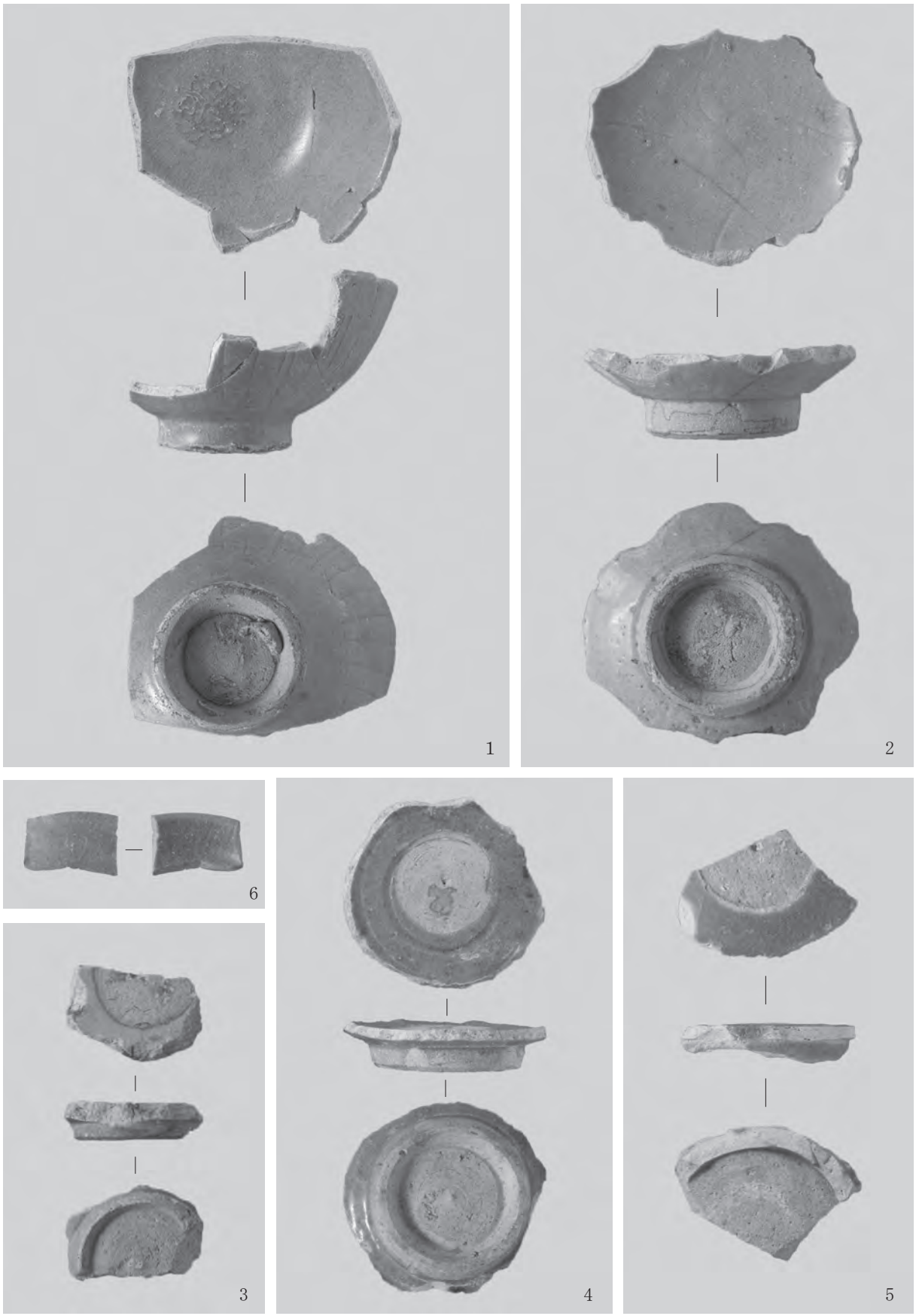
図版 16　作業の状況

1段目左：掘下げ作業の全景
2段目左：建物跡の検出状況
3段目左：第3号埋甕遺構の掘下げ作業
4段目左：第3号埋甕遺構の実測作業

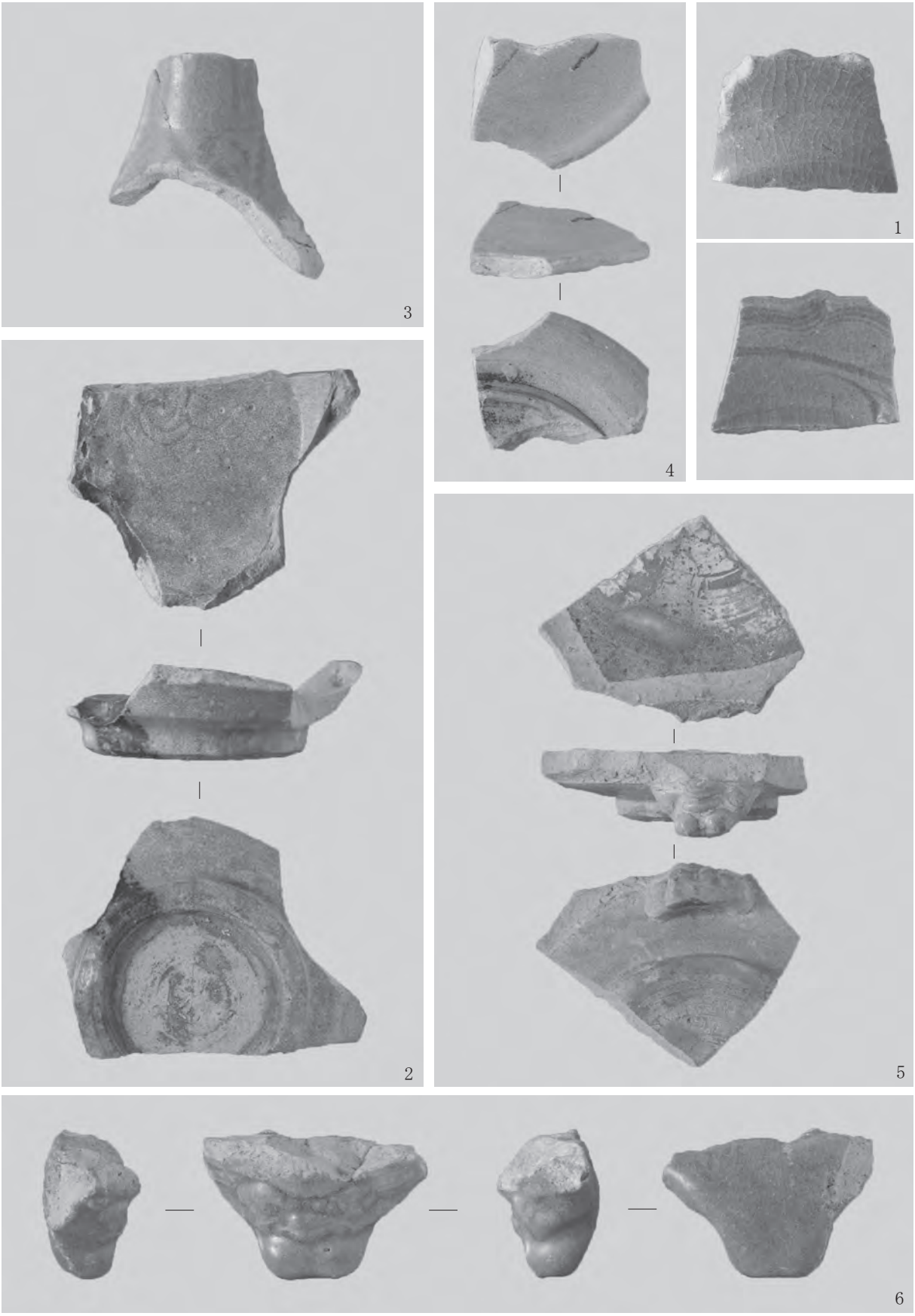
1段目右：掘下げ作業の近景
2段目右：第3号遺物廃棄遺構の掘下げ作業
3段目右：第2号埋甕遺構の掘下げ作業
4段目右：足場からの撮影作業



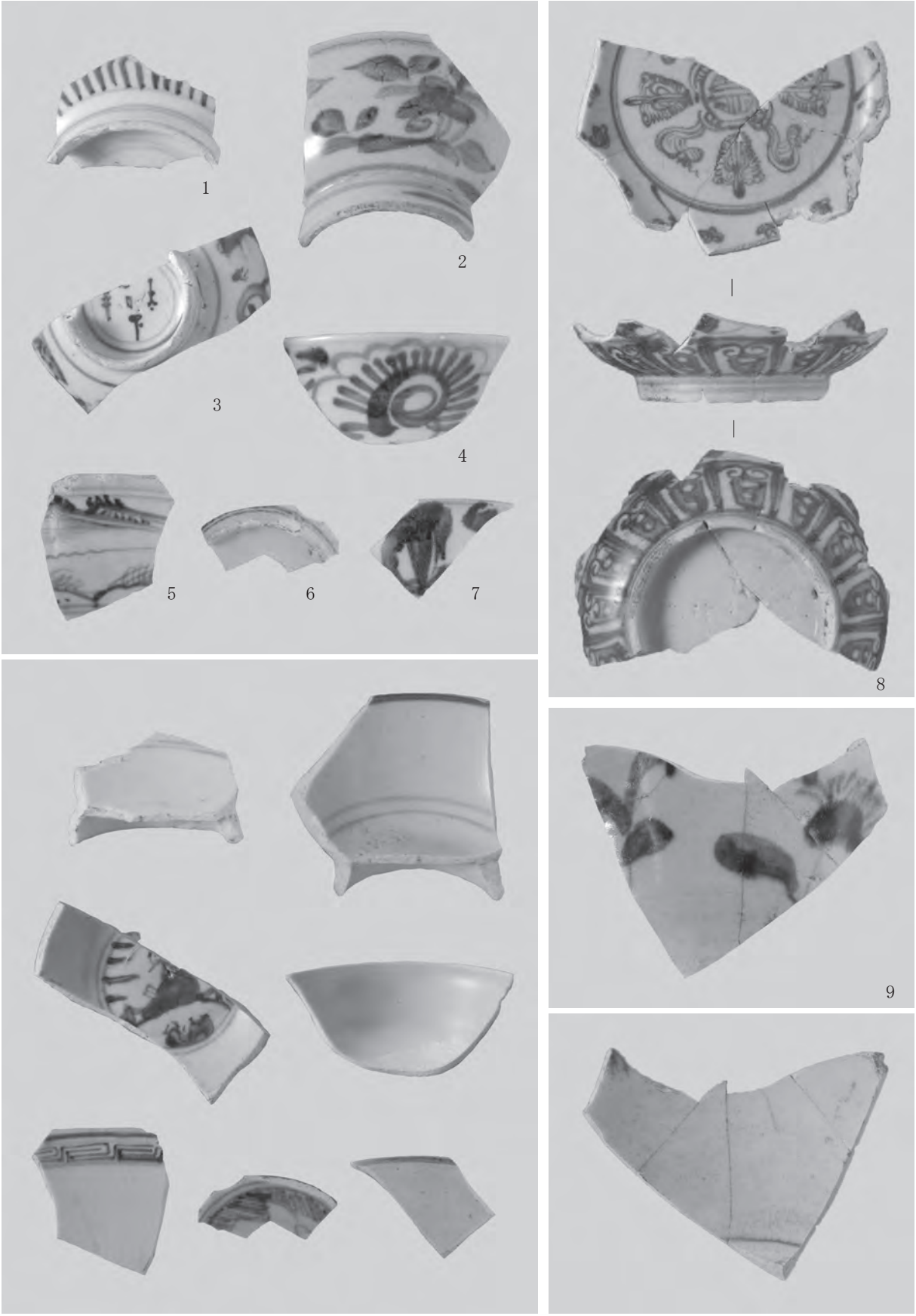
図版 17（第 8 図）　白磁:碗（1）、皿（2 ～ 9）、杯（10 ～ 12）、壺（13）、灯明具（14）



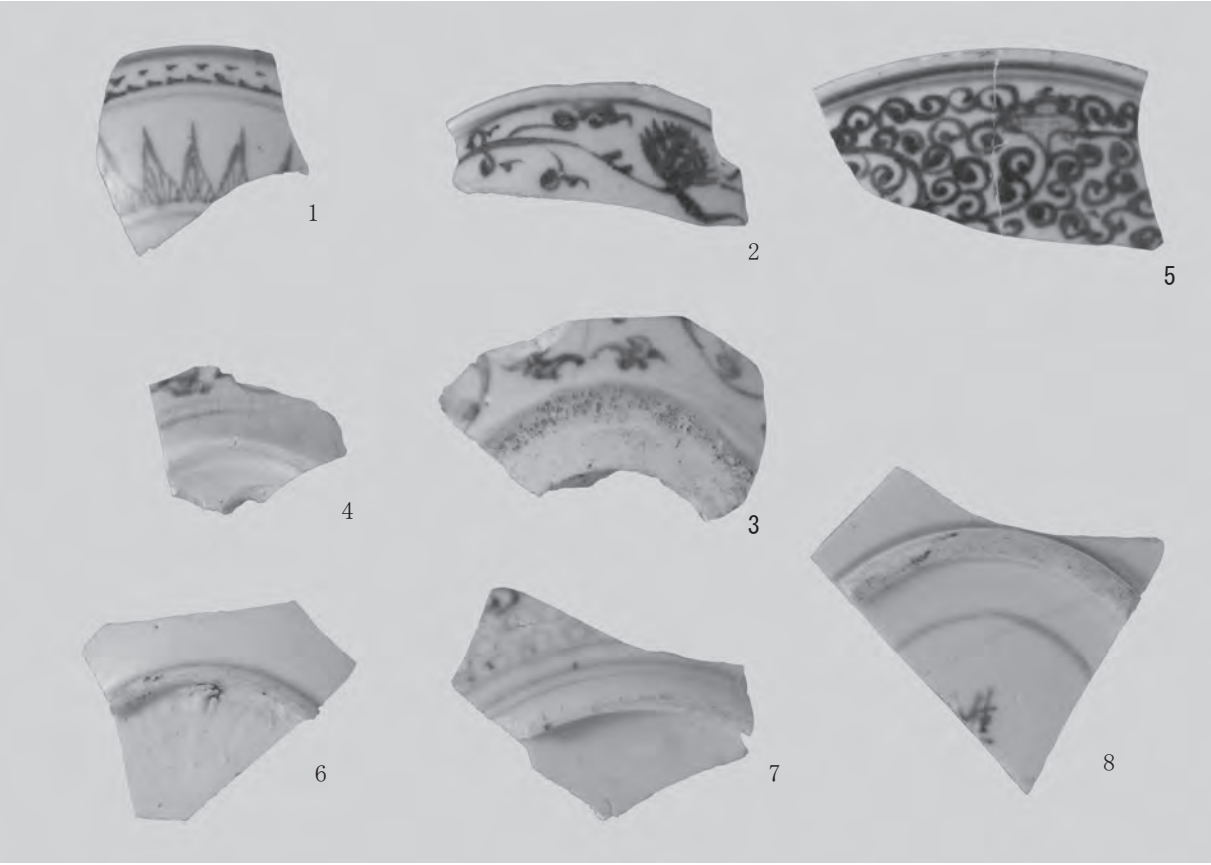
図版 18（第 9 図）　青磁①：碗（1 ～ 4）、皿（5・6）



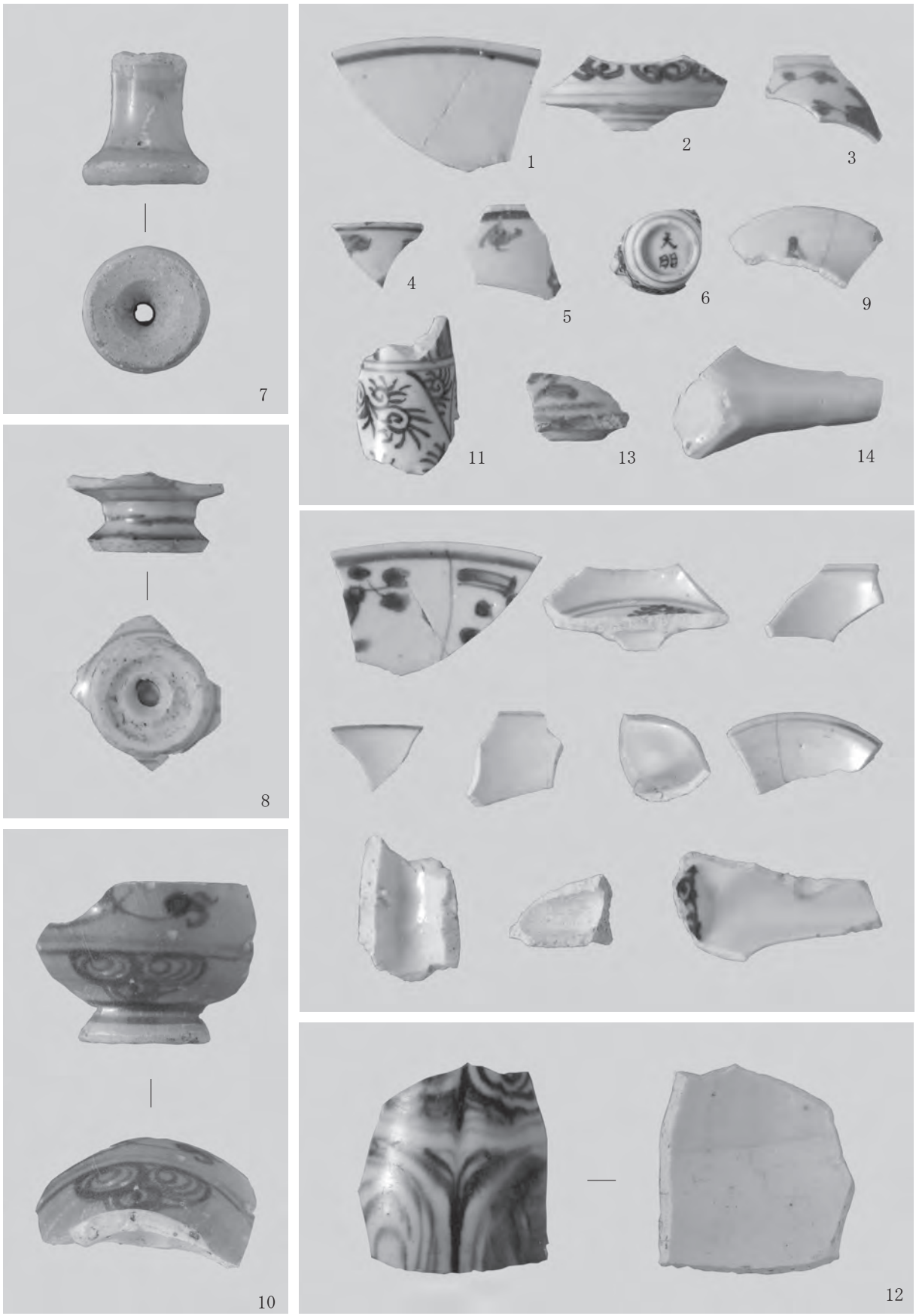
図版 19（第 10 図）　青磁②：皿（1・2）、瓶（3）、壺の蓋（4）、香炉（5・6）



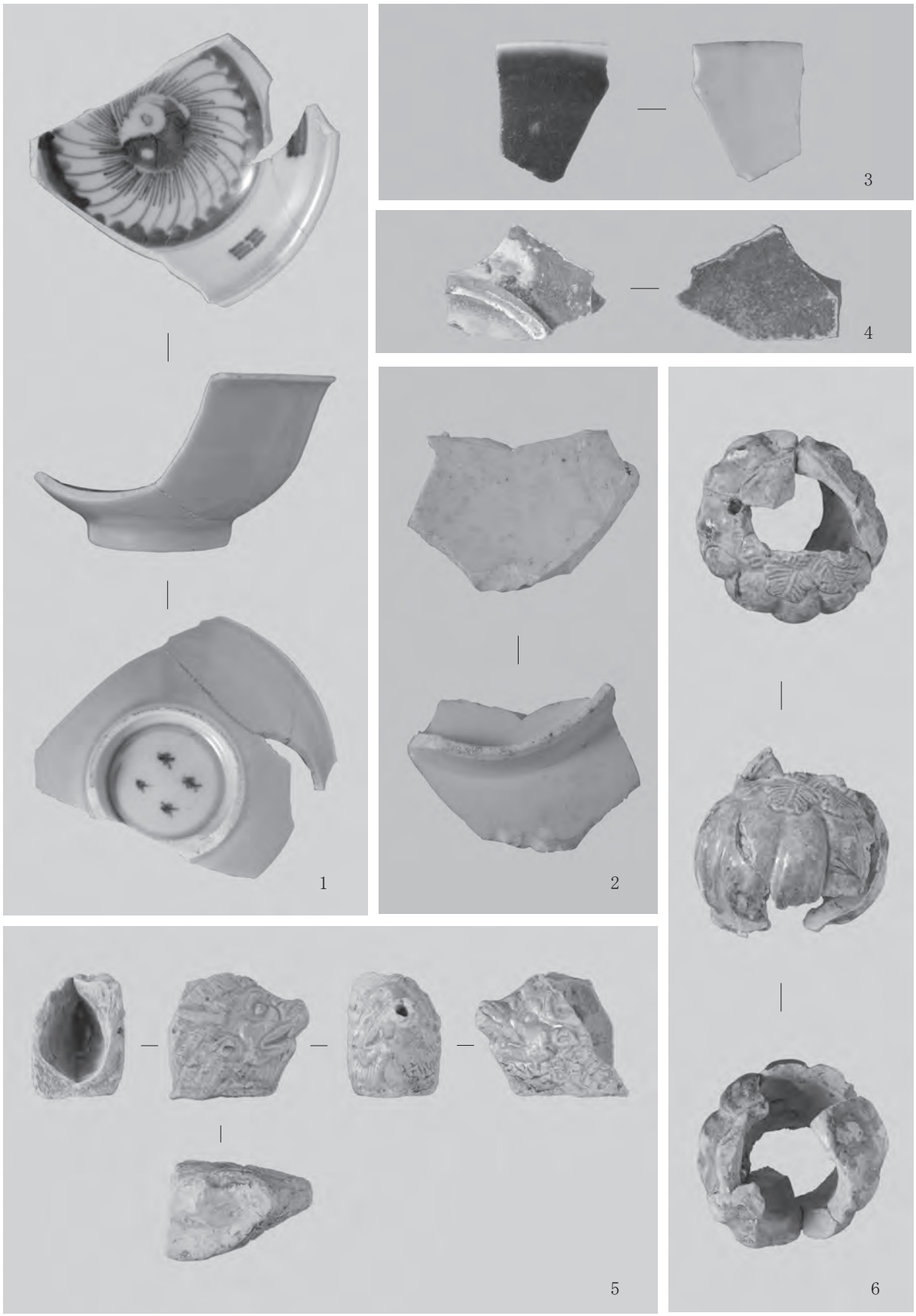
図版 20（第 11 図）　青花①：碗（１～８）、鉢（９）



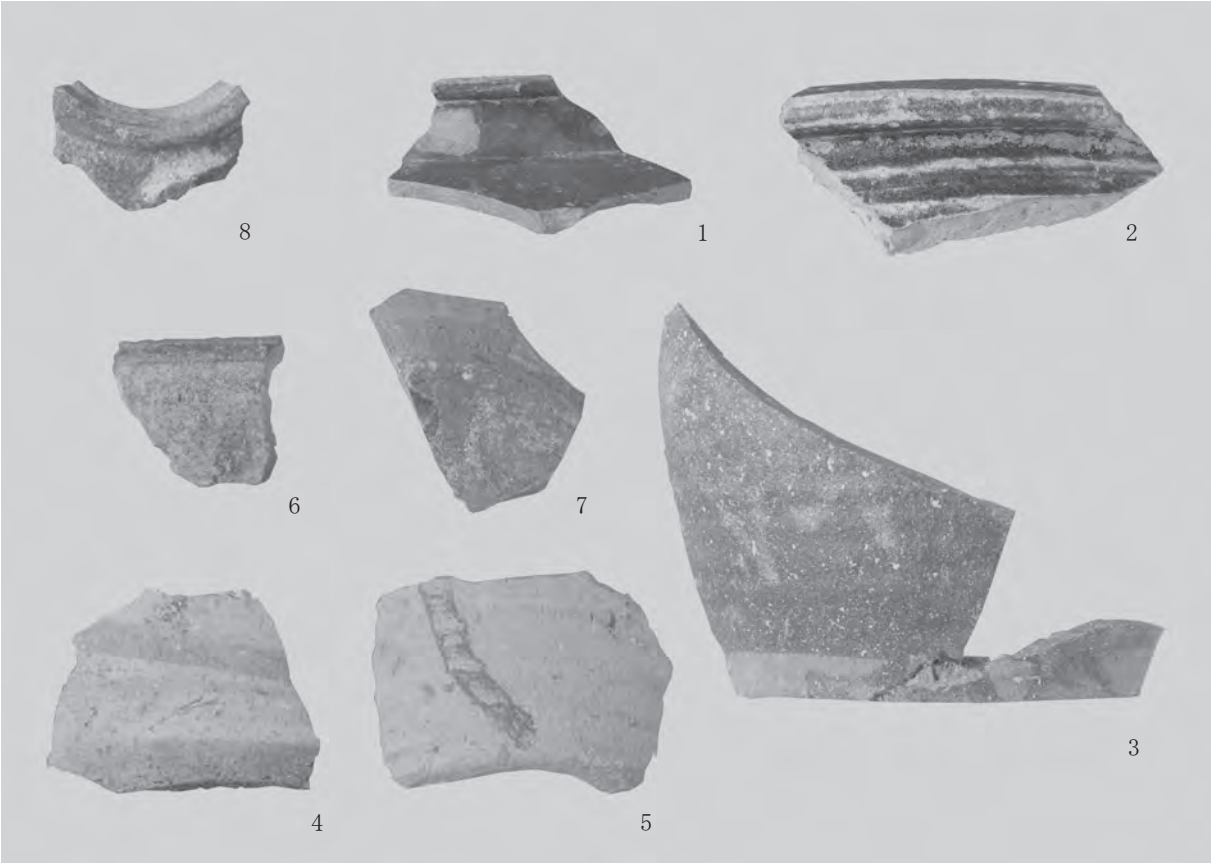
図版 21（第 12 図）　青花②：皿

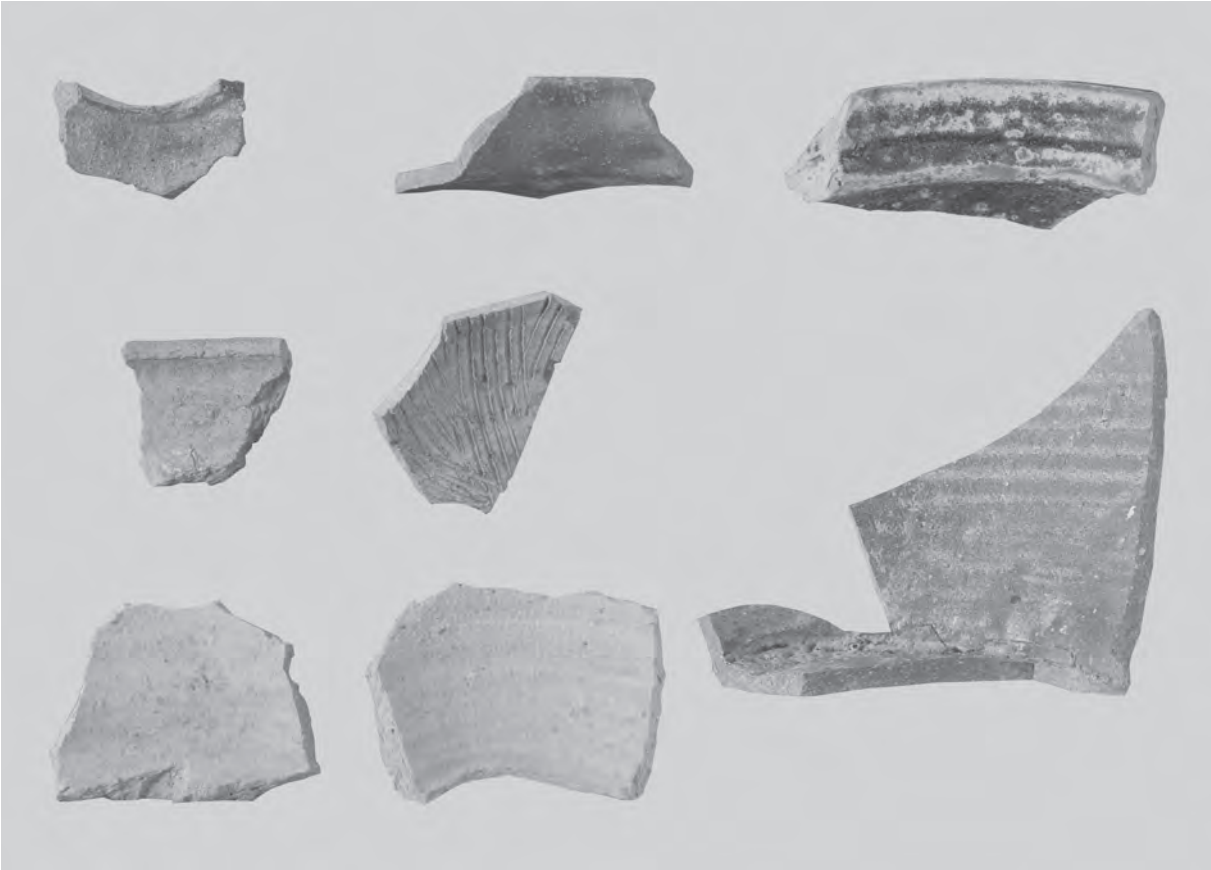


図版 22（第 13 図）　青花③：皿（１）、杯（２～７）、壺（９～１２）、蓋（１３）、蓮華（１４）



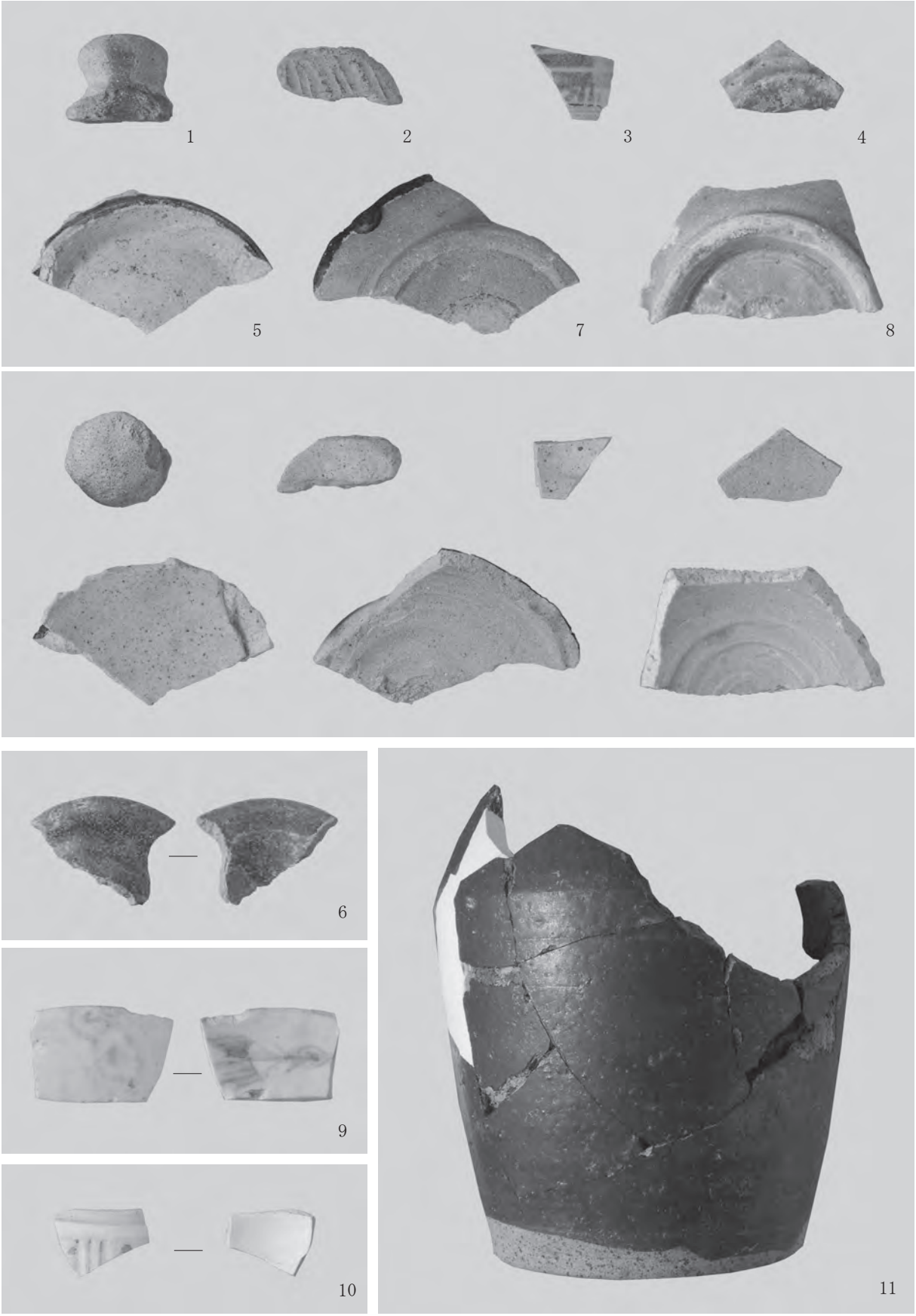
図版 23（第 14 図）　青磁（1）、色絵（2）、瑠璃釉（3）、翡翠釉（4）、三彩釉（5・6）





図版 24（第 15 図）　褐釉陶器：壺（1 ～ 5）、鉢（6・7）、水注（8）

図版 25（第 16 図）　タイ産褐釉（埋甕遺構）　大型壺



図版 26（第 17 図）　タイ産陶器 ：蓋（1）、壺（2･6･7）、合子（3 ～ 5）
産地不明 ：壺（8）、皿（9）、筒形（10）、壺（11）

報 告 書 抄 録

ふりがな 書名	わくたむらあと 湧田村跡
副書名	那覇市新庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書
シリーズ番号	第96集
編著者名	島弘・仲宗根啓・城間千栄子・㈱島田組・㈱文化財サービス・パリノ・サーヴェイ株式会社・㈱パスコ
編集機関	那覇市教育委員会文化財課
所在地	〒900-8553　沖縄県那覇市泉崎1－1－1　TEL098-917-3501
発行年月日	西暦 2013年　3月　29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
わくたむらあと 湧田村跡	おきなわけん 沖縄県 なはし 那覇市 いずみざき 泉崎	47201		26度 12分 43秒 （世界測地系）	127度 40分 45秒 （世界測地系）	20101201 ～ 20110122	約300㎡	那覇市新庁舎建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湧田村跡	集落	近世～近代	建物跡 井戸 遺物廃棄遺構 埋甕遺構	中国産陶磁器 本土産陶磁器 沖縄産陶器 陶質土器 瓦質土器 瓦 円盤状製品 煙管 銭貨 ガラス製小玉 石製品 貝製品 脊椎動物遺体 貝類遺殻	那覇市新庁舎建設事業に伴って発見された遺跡

要約	本報告書は、那覇市新庁舎建設事業に伴う湧田村跡の発掘調査成果をまとめたものである。「湧田」は、1616（尚寧王28）年、朝鮮陶工の張献功によって製陶が始められ、当時の琉球の人々に陶工の技術を伝授した場所で沖縄における窯業の始まりの地として知られている歴史深い地域である。調査の結果、近代の屋敷跡（建物跡、井戸、廃棄土坑など）と琉球王府時代（15～19世紀頃）の遺物包含層が確認された。出土遺物は、灰色瓦や外国産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、銭貨、煙管、貝製品などの人工遺物の他、貝類や獣骨など多種多様な様相であった。

那覇市文化財調査報告書第 96 集

湧　田　村　跡

―那覇市新庁舎建設事業に伴う緊急発掘調査報告―

発行　2013 年 3 月 29 日
那覇市教育委員会
〒900-8553　沖縄県那覇市泉崎 1-1-1
編集　那覇市教育委員会文化財課
TEL　098-917-3501
FAX　098-917-3523
印刷　有限会社　福琉印刷
〒900-0012　沖縄県那覇市泊 2-19-8
TEL　098-867-1989
FAX　098-863-8709